

窯体内で降灰を受けた34も、口縁部の一部や口頸部全体を意図的に割った土器とみられ、鋭利な破断面を各所に持つ。粗雑な平底をなす底部付近は調整も粗く、復元すると口頸部も焼け歪みのためか、大きく傾く。底は厚く、重量感が感じ取れる。口縁端部はヘラ切り風の面取り整形がなされている。口縁部や体部に意識的な打ち欠き痕をみる35も粗雑な底部、口縁端の面取りなど、34と共に通性のみられる平瓶で、窯内で破損した土器片の付着をみたまま、本墳に供されたものである。底部付近に気泡の膨張が認められる（図版45、47）。

36は台付長頸壺である。算盤玉形の体部に口頸部と脚台を付ける。口縁部は9.8cmの高さを持ち、端部付近で外反する。口頸部内面には製作回転中のシボリ目が観察できる。体部中位よりやや上に位置する肩部の傾斜変化点に1条の凹線が、これより1cm程下に1条の弱い凹線が巡る。脚台部は、長台形を呈した3方の透かし孔が穿たれ、裾端部は反り状に肥厚させ、幅1cm未満の面を持つ。灰色を呈し、全体として堅緻な焼成を示す。7世紀代の所産である（図版43下）。

37は短頸壺である。手持ちヘラケズリやヘラナデによる外底面の平坦さと独特の器形から、どっしりとした安定感をみせる仕上がりとなっている。体部外面下半には粘土紐巻上げ痕を消すように指オサエ調整が観察でき、最終調整は回転ナデによって仕上げる。自然釉は外面の上半（肩部より上）と内底面に濃密度にガラス状の付着をみせる。また、外底面には窯壁の一部が融着しており、この土器を正置させることは困難である。粘土紐積み上げによる成形段階で生地に空気が入っていたため、各所で器面の膨張や剥脱痕が観察される。降灰、自然釉の様相が34をはじめ、多くの釉が掛かる須恵器と類似し、不良品とも覺しき土器を供献している点は、これまでの資料とかなり共通性がみられ、さらに口縁の打ち欠きを伴う点も同巧である（図版46）。

38～41は處とその円孔の切り抜き円板である。頸部から口縁端部にかけてラッパ状に開く口縁部を持ち、口縁部は二重口縁のように、頸部から外反しながら立ち上がり、凹線状の界線と段を有してさらに外上方へと伸びる。両者ともに口径が体部最大径を超えるか伯仲するものであろう。また、穿孔は体部最大径の位置よりやや上に空けられ、ちょうど穿孔レベルに先行する凹線が1条巡る。その他の加飾は一切ない。40・41は處の器体内に落ち込んでいた切り抜き円板で、40には抜き取る際の竹管刺突痕が観察できる。製作時から古墳に供献されるまで伴出してきた点は興味深い。中間過程での実用はおそらくないことを意味するのだろう。なお、39は底部をヘラ切りの後に指ナデして平底を形成している。38・39共に口縁部を意識的に打ち欠いており、供献時に一斉行われた儀礼行為の一斑を証している（図版44）。

第105図は、須恵器の大甕である。中央やや西寄りから出土したもので、総数45片に及ぶ破片を接合したもので、ほぼ完形に復元できたが、口縁部の1／3を大きく欠いている。器高44.4cm、体部最大径40.8cmを測る大きさで、復元口径は18cm前後になる。丈高の器体を有し、底部の形態に不安定要素を残す。最大径が肩部と体部の変化点に位置し、器体上半に重心が偏るため、やや怒り肩の印象を受ける。口頸部は厚めに作られ、外反しつつも直立ぎみに立ち上がり、外面の加飾は行わぬものの、口縁部外面には端部から0.5～1cm程下と、中程近くに浅い凹線が不整に巡る。成形や調整痕については、口端が内傾するていねいな面取り風のヨコナデ調整がなされている。体部外面に細かな平行タタキ（5本/cm）の後、回転作用を利用した指頭によるナデを施す。内面は底部から口縁部直下まで同心円當て具痕がみられる。当て具の原体径は5cm前後であろう。叩き技法と同様、原体は小振りである。いびつな底部付近はやや厚めの粘土帶積み重ね残痕が残り、外面タタキの方向を異にしている部分の内面當て具痕は少なくとも原体自体が異なることが瞭然としている（拓影参照）。色調は内外面共に暗い灰色であるが、表層に限られており、器壁全体は灰紫色を呈している。この土器の他の特徴として、底部に坏Gの蓋や窯壁が融着している。そのことからも、7世紀前半～中頃の時期に比定できよう（図版48）。

第106図は、須恵器の横瓶である。焼け歪みが著しい器体であり、口径は10.6～11.4cm、器高は21.1cmを計測する。体部は俵形を呈し、短軸18.6cm、長軸28.6cmを測る。俵を縦に置く形で粘土紐巻き上げ成形を行い、片方を底部として閉塞状態として積み上げている。底部側面の器壁は厚くいびつで、上方へは粘土帶の接合痕を解消し、薄く引き伸ばす。タタキ成形も貫徹されていないのは、底部付近を自重支えのため、タタキ出しの最後まで厚くしたためであろうか。内面同心円當て具痕のナデ消しもほとんど行っていない。また、原体の縁端を当てるよう用心し、硬化しつつある素地粘土を押し拵げようとしている。底部から体部上半にかけては、閉塞側に向かって粘土帶に応じた反時計回りの同心円當て具痕が残るが、器壁を減ずる中央付近は押圧風のナデを加え、半消しにしている。これらは、閉塞作業より前に当然行った作業工程と考えられる。

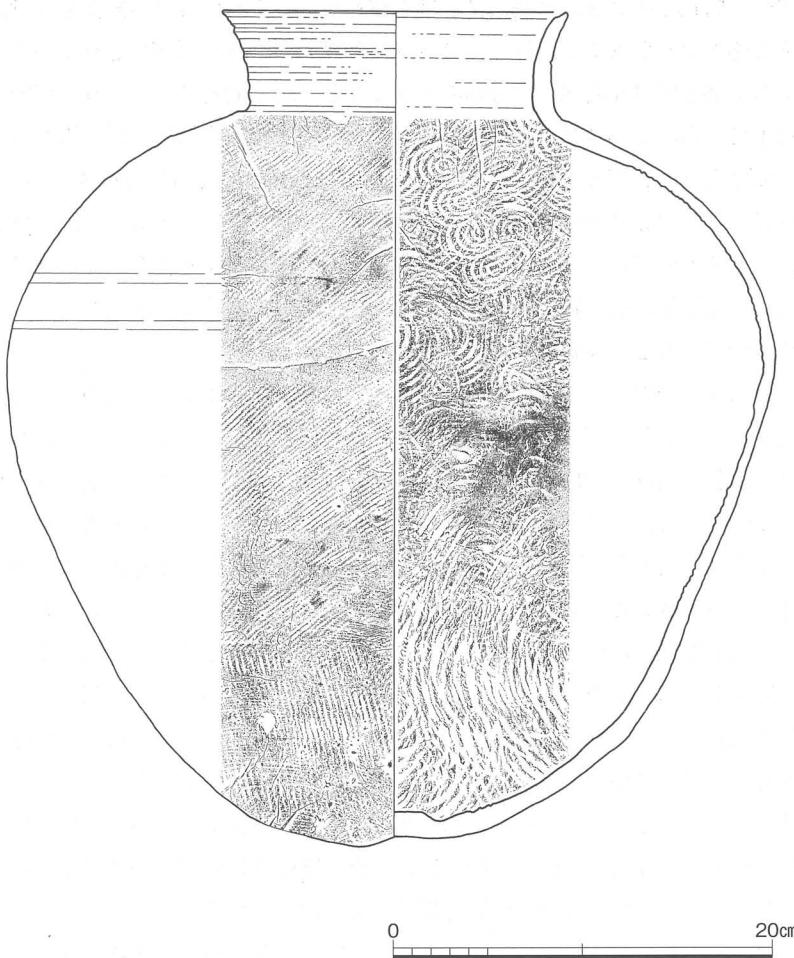
閉塞のための粘土円板は、粘土紐積み上げ最終の開口部が、6.6cm～7.6cm程を測るので、それ以上と目され、閉塞孔付近の帶状化した粘土紐2本分は締め付けを伴う水気を含む指頭圧を加え、最終端部はやや尖りぎみの擬口縁を形成している。粘土円板は内面側を四面風に仕上げるため、不整な指オサエ調整がみられる。外面調整は、平行タタキの後、丁寧なカキメ調整を施す。外面の底部側には、土器片と窯体の破片が融着している。タタキ調整による器壁内の空気抜きが甘かったためか、器面の膨張が数ヶ所で観察できる。

口縁部は最終工程で作られており、本体の中央に径7～8cmの粘土板状の器壁を切り取り、その周縁に内側から粘土紐の積み上げを行い、開口部との接合は粗い指オサエを行っている。口縁部は焼成の関係でひずむが、内外面ともにヨコナデ調整を加え、端面を作り出して、口端を尖りぎみに終える。口縁部の半分を中心に一部自然釉

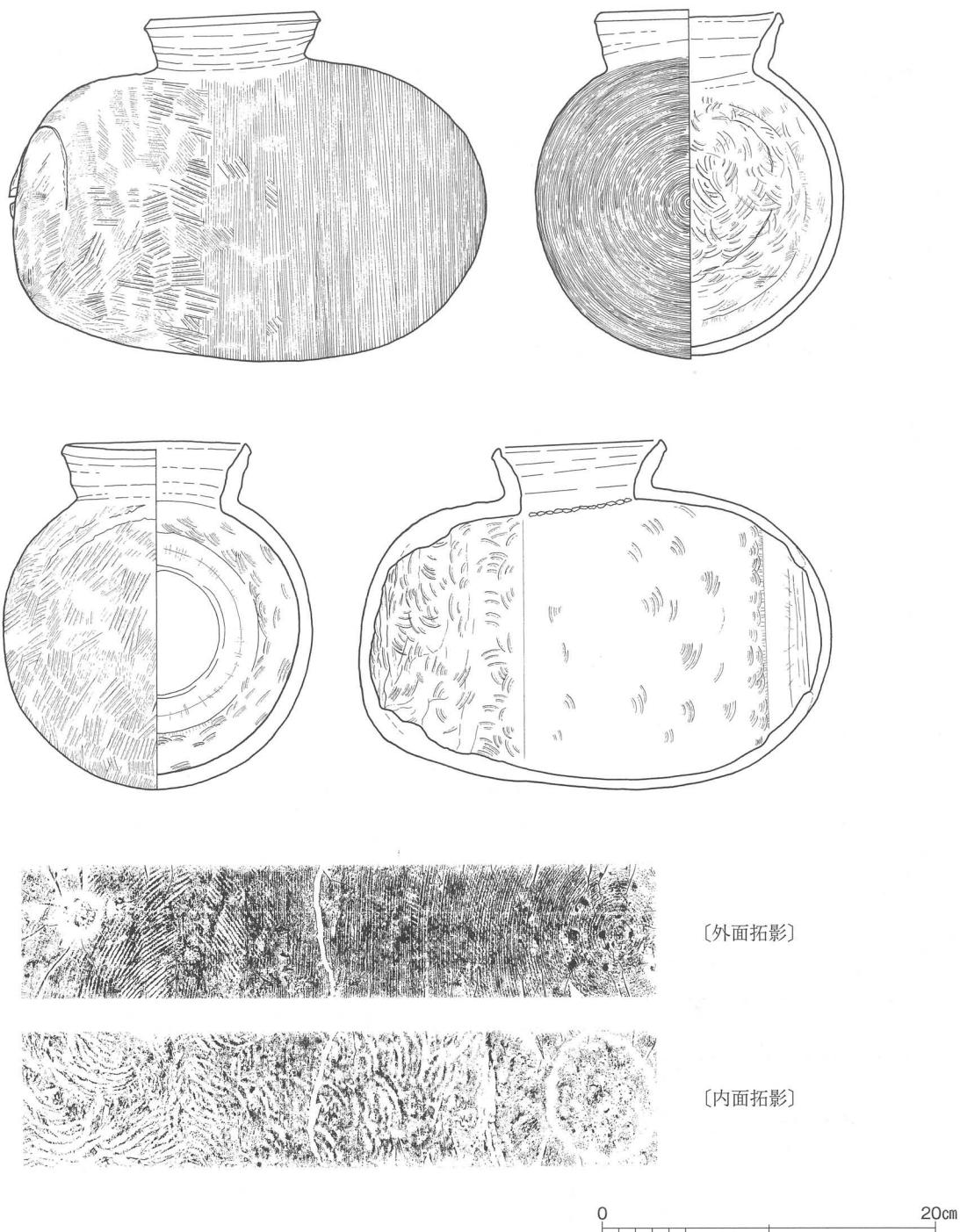
を帯び、淡い紫色を示す器壁断面は層状の焼き上がりとなっている。他のテラス面供献土器群と同様の窯で同時に焼かれたものとみられ、品揃えを意識した共通する要素が多々みられる。灰色を呈し、底部側外面の一部に輪状の黒斑が認められる（図版49・50）。

第107図1～12は、テラス面にて出土した瓦質土器・土師器をまとめている。煮炊関係の器種が主体となることを特色とする。焼き上がりの異質な1は瓦質焼成の壺である。器面の磨滅が進行し、一見、土師質を呈する。韓式系の土器とみられ、体部中位に最大径を有して屈折することを特徴とし、頸部から短く立ち上がる口縁部を持つ。端部は面をなし、内面側には軽い突出をみ、外面側には軽い段を形成して、頸部へと至る。底部は器面の剥脱が著しいが、平底風の丸底である。体部下半には指頭圧を加えつつ粘土紐の巻き上げを行った痕跡を留める。復元口径14.0cm、器高も同じくらいになる。2～7は土師器の小振りの甕である。全形を残す資料は少ない。図上完形品となった2の底部は丸底で、やや横ぶとりの球形を示す体部に外反する口縁部を持つ。口頸部の屈曲は、基本的には緩やかな「く」の字が多い。口端内面は少し膨らみをみせる。調整技法は、外面がハケメ調整、内面が指ナデによって仕上げる。外面のハケメ調整は、頸部から体部上位が縦方向のハケメを、体部中位から底部にかけては斜め方向に外底面全体に施す。残存率の高い2・3をみると、口径は約12～15cmで、器高も約12～15cmを測るものが多いようである。いずれも7世紀前半から中葉に比定される。中型の甕である3も、口端の内面が僅かに肥厚する特徴をもつ。5・6は、口縁部の端を丸く収めるやや薄手の土器で、口頸部の「く」の字状屈折も弱くなる。これらの甕はいずれも淡黄褐色を呈する明るい色調の土器で、器壁が厚めの4を除いて、胎土中に鉱物粒があまりなく良好である（図版52上、54下、55、60）。

8～10は土師質の把手付甕である。扁球形の体部に対向する把手を付け、口縁部は短く「く」の字状に外反する。体部外面は細かなハケメ調整を、内面は指押さえや指ナデ調整を施す。8は体部中位に黒斑が観察でき、上

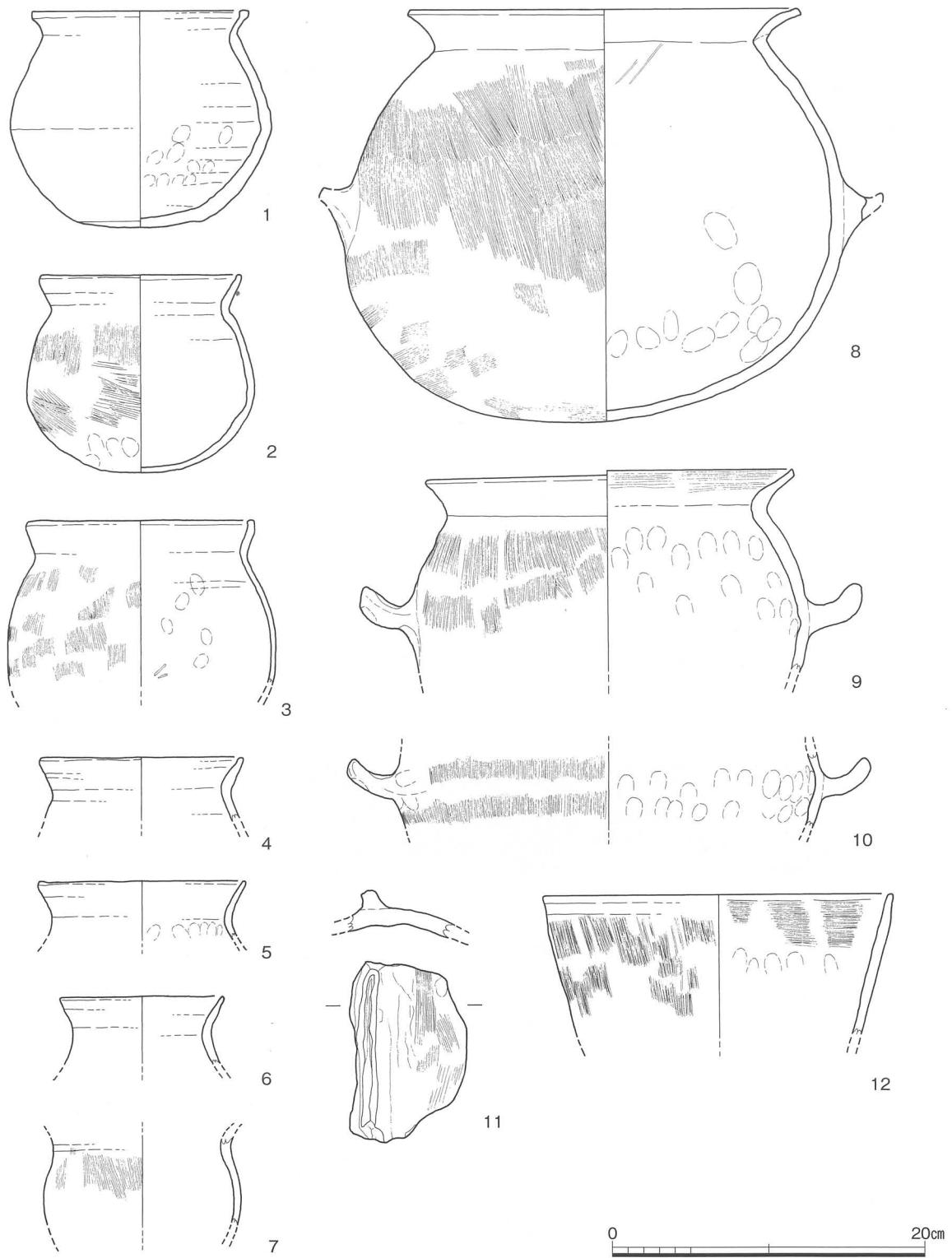


第105図 墳丘裾部テラス面出土遺物 実測図 1／4



第106図 墳丘裾部テラス面出土遺物 実測図 1／4

半のハケは細かく繊細。下半のハケメが磨滅していることから、一定期間使用されたものと思われる。89片を接合してほぼ完形に復せたもので、口径25.0cm、最大腹径32.3cm、器高26.7cmを測る。口縁部端面は面取り調整されるが、口縁部全体はかなりいびつ。8同様、口縁部に歪みの認められる9は、器体の上半部のみが、約半分しか残存しない。「く」の字状に屈折する口縁部の末端は僅かながら内面にシャープな立ち上がりをみせる。体部外面は斜め縦方向の端正なハケ調整を施し、内面には指頭圧調整痕を留める。復元口径23.0cm、残存高18.8cmを測る。黄白色系の色調を呈している。10は胴部の残欠で、把手部のみを残す。把手部の下面には薄く煤の付着を見ることができ、使用痕跡が残っている（図版53、55）。



第107図 墳丘裾部テラス面出土遺物 実測図 1 / 4

11・12は土師器の竈形土器と甌である。いずれも器面にハケメ調整を施す。11は、竈の焚口の底部に連なる突帯に相当する断片で、タガ状の粘土帯をしっかりと貼り付ける。外面にはハケメ調整（6本/cm）が観察できる。胎土に長石・石英・暗赤色シャモットを多く含む。器面の磨滅が著しく、被熱痕跡や煤の付着は観察できない2小片の接合。12の甌は、バケツ状の形態に復元できるタイプのもので、口縁部内面に横方向のハケメ調整が観察できる。口縁部の端面はナデて平滑ぎみに仕上げる。石英・長石などの鉱物粒、暗赤色のシャモットを比較的に含み、淡褐色に焼き上げられている。復元径は22.4cmを計測する（図版54）。

前庭部出土遺物 前庭部に設定したトレンチからは、予想以上に土器が出土している（第108図）。1～8は須恵器の坏類である。高坏の蓋や身に復元可能なものもあるが、一応、まとめてレイアウトした。1は復元径から有蓋高坏の蓋になる可能性が高いが、細片のため器種は不明瞭としておく。天井部と口縁部の変化点に1条の凹線が巡るが、より形骸化したものである。旭塚古墳では微量伴うことが普遍化できる。破片2は竜山石の敷布面から出土した貴重な遺物である。端部は丸く收め、緩やかな稜を有して天井部に至る。変化点直下に浅い凹線が走行する。胎土は良質。7世紀代の遺物である。傾斜の著しい3は、口縁部の内傾具合から、壺の蓋とも推測できよう。胎土は精緻で、焼成も良好である（図版62）。

4は、坏身で立ち上がり端部は欠損する。細片のため口径については言及すべきでないが、TK209～217型式の範疇で理解したい。5～8は坏身である。いずれも7世紀前半から中頃の時期に比定できよう。5は薄作りのシャープな口縁部片である。ていねいなヨコナデで仕上げられる。径10.2cm、器高3.7cmに復された6は、20数片の細片がかなり接合できたもので、東IV区において散在出土した。坏身とみたが、坏蓋になる可能性もある。7は器肉芯が暗灰紫色の焼けを示す。外面にシャープな小段差がみられる（図版56、62）。

9～11は高坏の脚部片である。9は透かし孔を穿つ脚柱下半部で、透かし孔下端レベルに弱い凹線を1条巡らす。10は短脚無透かし、無蓋の断片。端部は拡張し、シャープなつくりをなす。堅い焼き上がりを示す11はやや大きめの裾部で、長脚になり、2段構成の透かし孔が入る可能性が強い。内面に見られる鍵状の工具痕はヘラ記号ではなく、糸状のものの当たり圧痕である（図版62）。

12・13は平瓶の口縁部である。口縁部に歪みを生ずる12は、灰白色～黄灰色の明るい色調を呈し、胎土中に含まれる0.5mm以下の黒色粒子が顕著である。内面には緑黄色の自然釉が付着する。細片の13は器壁が薄く、口径なども不正確な資料。12は東IV区と西IV区の出土資料が接合した（図版56）。13は西II区からの検出（図版62）。

14は一見、土師質の様相を呈する半焼けの須恵器の甌口縁部である。東V区から出土した。軟質で焼成が悪く、磨滅も進んでいるため、器面の回転ナデの痕跡はつかめない。口端面にきわめて浅い凹線状のヨコナデが入る。

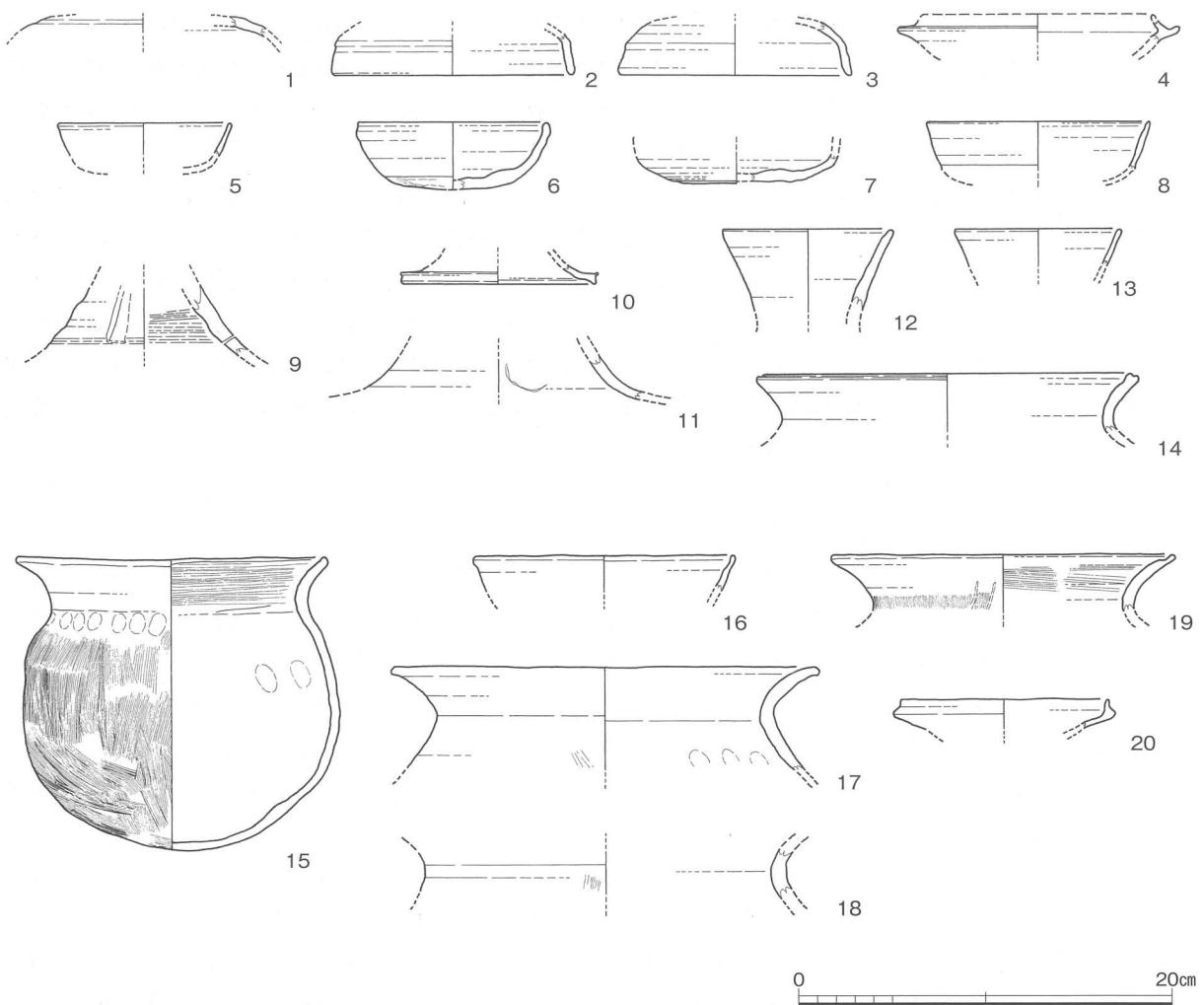
15～20は土師器である。15・17～19は甌、16は坏、器台状の20は器種が不明である。ほぼ完形で遺存していた15は、Aトレンチ溝201から出土した土師器甌と類似し（第99図3）、丸底の器体に短く外反する口縁部を持つ。外面調整のハケメは体部中位を境に大きく2工程に分けて施される。また、口縁部内面には横方向のハケメが施される（図版52下）。17～19も同様に外反口縁をもつハケメ調整を施す甌である（図版62）。

16は飛鳥時代の坏である。端部のみの細片であり、暗紋やミガキの観察ができる部位は遺存していないが、色調明赤褐色で、口縁端部は巻き込み調整がみられる。

20は器種不明と上記したが、極めて焼成が不良な須恵器坏、もしくは須恵器模倣土師器の可能性が考えられる。すなわち、土師質焼成の上に磨滅が進み、受部の欠損破断面と器面の判別が付きにくい資料と化したことにも考えられてよい（図版62）。

石器 出土地点ごとに記載しなかった石器を一括報告する（第109図）。1・2は打製石鏃、3～6は剥片である。いずれもサヌカイト製で、肉眼観察では二上山産と判別できる。1は長脚鏃で、基部に長い逆刺を作り出し、先端部と片方の脚部を欠損する。粗い両面加工を行っており、縁端の押圧剥離は比較的丁寧に行われ、鋸歯状を意識したトリミングを施している。鏃身は残存で2.9cm、厚さは最大で0.4cmと薄い。重さは1.3gを測る。パーティナーを帶び、破断面にも風化が観察できることから、欠損後の廃棄が考えられる。Aトレンチ周溝内（X=28.215、Y=11.216、H=79.621）から出土した。縄文時代前期の打製石鏃と思われる（図版64）。

2はほぼ完形の小型の打製石鏃である。凹基無茎の基部をなし、鏃身は長さ1.85cm、幅1.5cm、厚さ0.25cm。重さは0.5gを測り、軽量である。片方の逆刺先端を欠損する。欠損面は漆黒色を呈する。押圧剥離は、やや粗雑で、強いパーティネーションに覆われる。Aトレンチ南端の須恵器・土師器の一群を覆う黄色砂質シルトからの



第108図 前庭部出土遺物 実測図 1／4

出土。縄文時代の所産である（図版64）。これらは、山芦屋遺跡と関わる遺物とみられる。

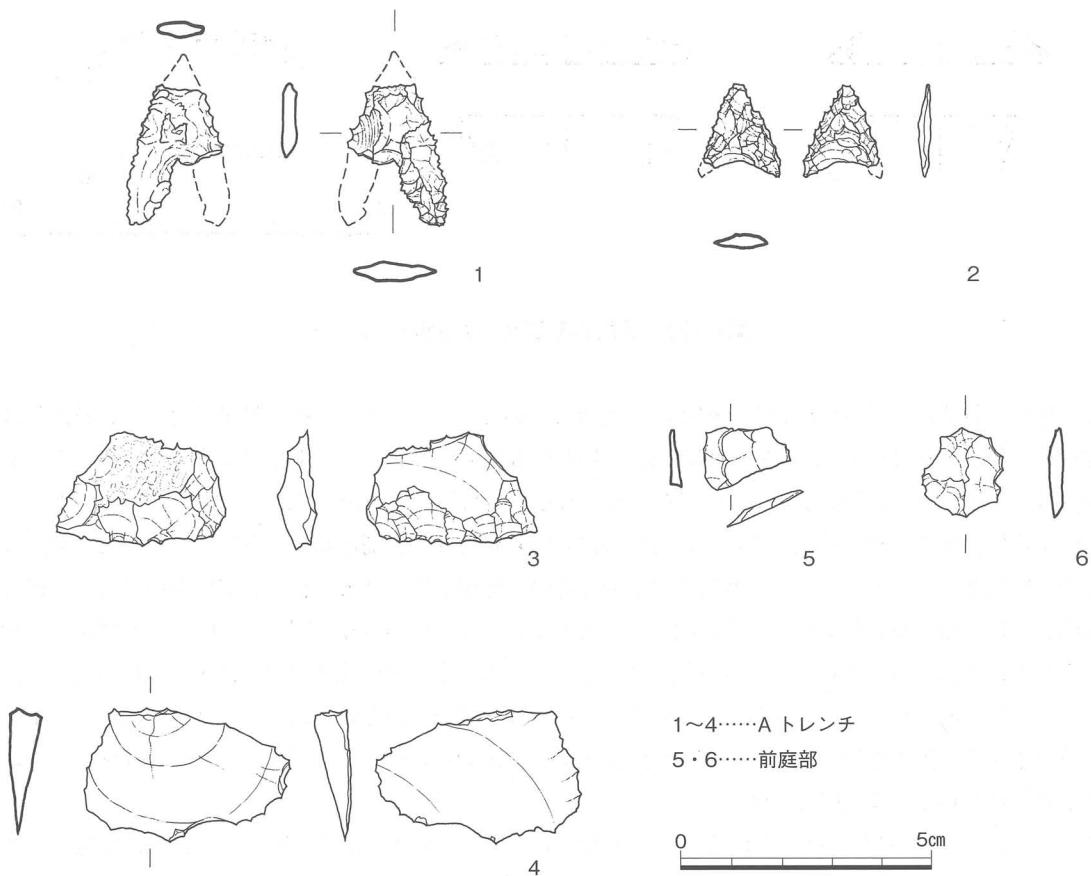
3は円礫とみられる原礫からの第1次表皮剥片で、背面に灰白味の強い風化自然面を残す。ただし、腹面には押圧剥離による微細な剥離調整が施されており、刃縁の形成が認められる。削器的な機能を持つ小型のスクレイパーの可能性を考えてよい。Aトレントレンチ北端の深掘トレントレンチ壁面（褐色砂礫層）から出土した（図版64）。

4はAトレントレンチ南半域、中央東西セクション南側の礫混じり黄褐色粗粒砂から出土したサヌカイト剥片である。厚さは最大0.7cmで、重さは7.5gを測る。最大厚を測る1辺に打面調整が観察できる。素材剥片の可能性が考えられる。風化が認められるが、二上山産とみて大過ない（図版64）。

5は前庭部西IV区の黄色極細粒砂から出土したサヌカイトチップである。重さは0.4gで、薄く、軽い。

6も前庭部（東IV区）から出土した。サヌカイトチップで、重さ0.6gを測る。周辺で石器作りが行われたとみられる（図版64）。

表面採集資料 第110図1は耳環である。楕円形を呈し、長径3.2cm、短径2.9cmで、断面は概ね正円形に近いが、長径0.8cm、短径0.7cmを計測する。完形で、重さ10.2gを測る。青銅軸に金を巻き、両端の小口は0.75cmの比較的広い間隔を空ける。鍍金の遺存状況は良好であり、発色は鮮明で美しい光沢と材質感がみられ、錆化は進行していない。表採品ではあるものの、帰属層位は2通り考えられ、他地からの客土もしくは敷地内供給の造成土である。古墳の副葬品と見て大過なく、先ずは旭塚古墳からの出土が推定され、また、別古墳が損壊を受けて移動土砂に紛れ込んだ遺物の可能性が考えられる。耳環はその属性の分析から、これまでに中実から中空化、大



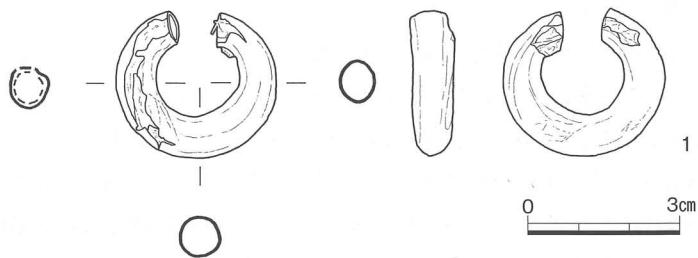
第109図 石器 実測図 1 / 3

型から小型化、太目のものから細目のものへ、断面形は円形から楕円形へ、開き部の端面形態が直線状から弧状へ、その仕上げが被覆から切斷へと考えられており、一般的には古い要素を留めている。ただ、開き部の製作手法には村上分類のⅡ型が容認でき〔村上2001〕、技術的には新しい傾向をもつもの（7世紀代）と理解している。なお、劣化している部分の観察からは、銅管芯に貼られた金箔部分の厚さ0.025cm前後とみられる（巻頭図版15）。

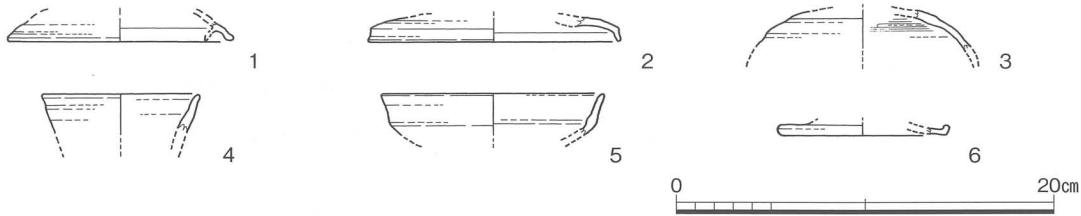
その他表面採集遺物 1～6は、事業地内で調査中に表面採集した遺物をひとまとめにする（第111図）。すべて須恵器で、おそらく周辺の宅地開発や社宅建設時の造成で遊離・混入したものと考えられ、本来は旭塚古墳もしくはその周辺の遺構や包含層に帰属する遺物と考えられる。壺蓋1～3は共に細片ではあるが、おおきな時期幅が認められる。1は壺G蓋の口縁端部、2は同じ壺蓋でも扁平なツマミが付くもので、8世紀以降の年代に下降するものであろう。壺蓋3は、1より古くなるもので、壺Hに分類される。内面の起伏調整にカキ目状の擦過痕がみられるのは珍しい。4は平瓶や長頸壺の口縁部であろう。

5は壺身もしくは高壺であろう。6は高壺の脚裾端部である。5は蓋になる可能性もあるだろう。6は、底径8.8cmに復元でき、大きさからみておそらく無蓋の低脚高壺になるだろう（図版63）。

前庭部出土竜山石 調査地付近はもちろんのこと、兵庫県南東部で産出しない播磨産竜山石が前庭部で多数検出された。出土状態については先に記したとおりであるが、



第110図 耳環 実測図 2 / 3



第111図 表面採集遺物 実測図 1 / 4

剥片・碎片・粉状片、さらに母岩の一部とみて大過ない50cmを超える大きさの石材まで含めて、総点数は3万8千点前後を数え（第3表）、トレンチ外に広がるものも加算すればおそらく4万点に達するであろう。総重量は330kgを測る。その中で特徴的なものをごく一部抽出し、実測したものが第112～114図である。出土した竜山石はその重要性に鑑み、全点採取を心掛け、可能な限り持ちかえり、個別観察とカウントを行った。前節にも詳述したが、製品面の一部とみなせる人為的な平滑面を持つ石材が一片たりとも含まれていないことは、遺構の解釈や竜山石自体の役割やありように一定の制約を与える要素となるであろう（図版65～68、巻頭図版16～19）。

竜山石とは流紋岩溶岩が噴出し、火碎流がカルデラ湖内で堆積・凝固した火山礫凝灰岩のことを指し、「印南石」・「宝殿石」のように産地・地名と深く結びついた別称を持つ。現在の市制では高砂市や加西市、姫路市などに広域分布する。生成地質年代は、中生代白亜紀後期（約7000万年前）で、阪神間の六甲山地域で見られる花崗岩の生成年代と時期をほぼ同じくする。

また、「長石」・「高室石」など小地域ごとの産地細別の名称があり、地元の研究者・石工には色調、鉱物粒、質感、水もち、硬軟、岩肌の特徴や特性からその違いを見分けることができるよう、同じ火山礫凝灰岩でも地域によって岩相に異なりを見せることができる。現段階では自然科学的な産地同定を経ていないが、調査期間中の研究者検討会にも参加して頂いた、竜山石産出地をフィールドにする清水一文氏（高砂市教育委員会）に調査終了後の取り上げサンプルを改めて実見して頂いたところ、土中内であっても風化を受け黄色になるはずであり、青味（緑色）が残っていることに疑問があるが、鉱物粒や質感、岩肌は極めて石宝殿付近の竜山石に近く、「長石」や「高室石」とは一見して異なるとの所見を得ている。

この様に前部と石室内床面で検出した凝灰岩は、肉眼観察の上で極めて高砂市竜山付近で産出される竜山石に近似し、現段階ではすべてを竜山石と認識し、記述を進める。

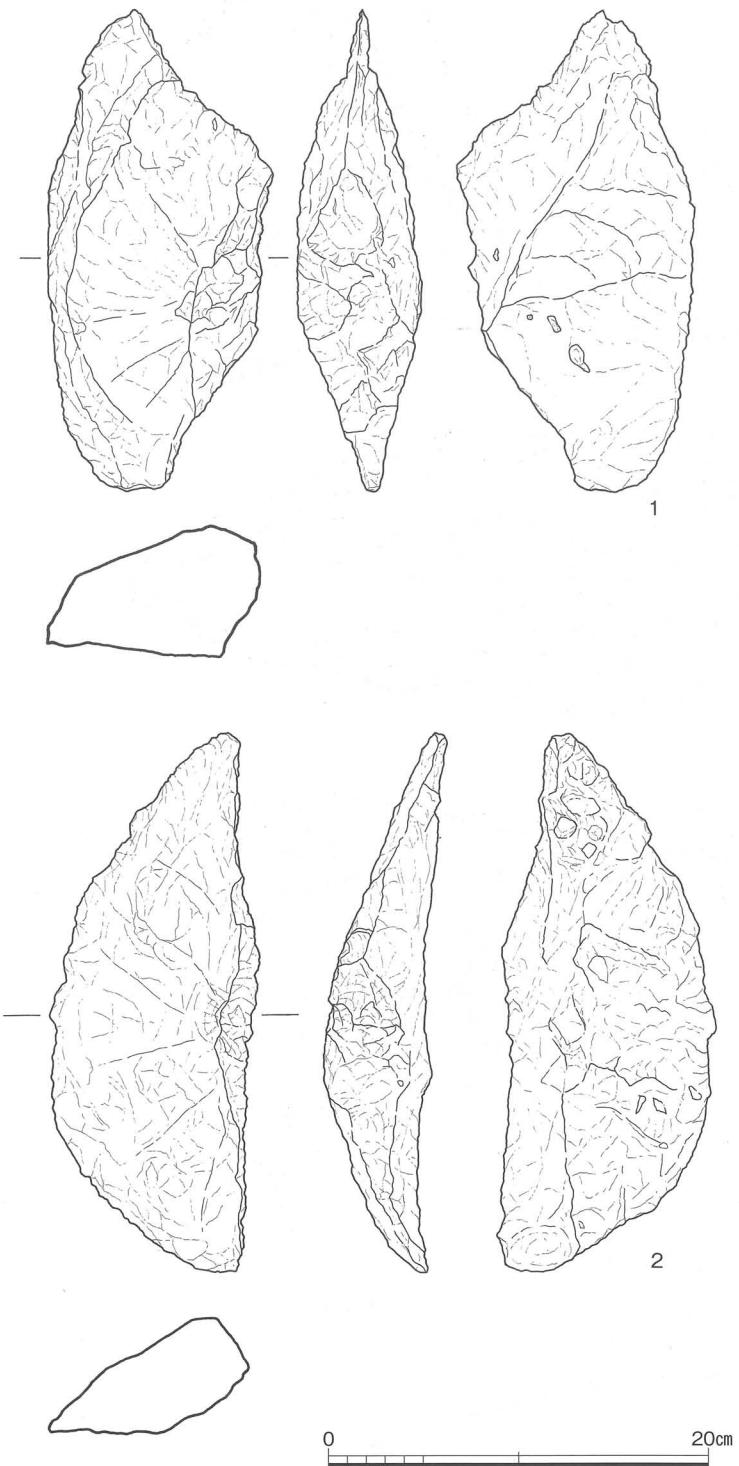
第112図は、最大長49.5cm、幅30cm、厚さ13.2cmを測る竜山石で、調査地から出土した石材の中で最大の石材である。腹面には8ヶ所以上の打点が観察でき、当石材は大剥片であるが、素材利用できるものであり、このような大振りの石片から剥片や碎片を多数獲得していったことが窺える。また、石材の縁端部にもスケールこそ違えど、石器で言うところの押圧剥離を思わせる剥離痕が看取される。一方で、背面の凸部にはこのような打点・打瘤は一切見られない。小剥片を取ることを目的としたハツリ行為が片側のみから行われたことが読み取れる。このことから、当石材自体を何かのカタチに作ることが目的の求心的な製作行為ではなく、剥片、碎片など採石・採木の作業に言ういわゆるコッパを逆に得ることがねらいであったことが窺える資料である（図版65・66、巻頭図版16）。

第113図1・2は母岩からの割り取り工程が進んだものであるものの、今回採取した資料の中では比較的大なサイズを保つ。両者共に平面がイチョウ葉の形態をなしており、剥離面の末端の状態は羽毛状剥離を呈する。打点が明瞭に観察でき、小さめの母岩からの第1次剥片で、その後の細部加工は行っていない。1は、最大長25.3cm、厚さは6.9cmを計測する。重さ1.35kg。1～3mm大の白色粒・黒点粒が多く含まれる。表面には鉱物粒が抜け落ちた鬆状の穴が観察できる。2は、最大長28.3cm、厚さ6.1cmを測る。重さは1.22kgである。本資料を整理中に実見した池田朋生氏（熊本県立装飾古墳館）は、これら2石の打点形状を観察し、一辺2～3cm程度の隅丸方柱状の鉄製工具の打撃により割り取っている可能性が高いことを指摘している（図版67、巻頭図版17）。

第114図は中サイズの剥片（2～16cm）をサンプリングし、6点を図化した。明瞭な打点が遺存しているもの



第112図 竜山石剥片 実測図(1) 1 / 4



第113図 竜山石剥片 実測図(2) 1 / 4

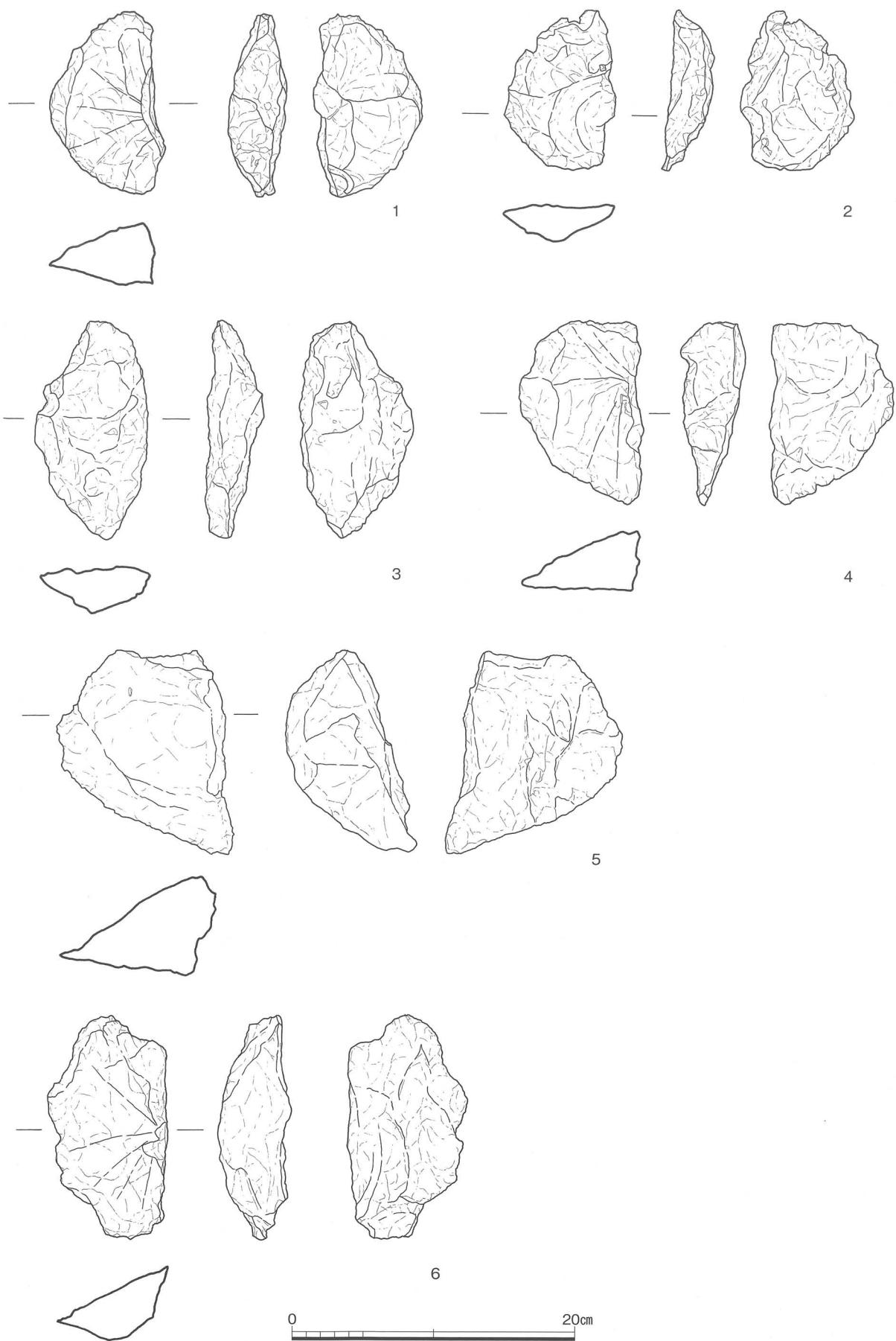
は1・2・4・6の4点である。3や5に欠損の痕跡は見受けられるが、意識的に第2次調整を施しているものは無い。岩質的な特徴は、5が5~10mm大のやや大きな鉱物粒を取り込んでいる。以下に、各石材の法量を記述する。1は最大長13cm、厚さ4.5cm、重さ290g。2は最大長11.3cm、厚さ2.6cm、重さ190g。3は最大長15.6cm、厚さ5.3cm、重さ490g。4は最大長12.9cm、厚さ4.4cm、重さ310g。5は最大長12.4cm、厚さ6.6cm、重さ800g。6は最大長15.4cm、厚さ3.5cm、重さ330g(図版67)。

以上の竜山石剥片の持つ特徴の中で、共有する点の一、二をあげるなら、①実測しなかった資料も含め、内反剥離を起こした剥片が多く、②打面側が尖頭形になる。③剥片の末端側が半円状を呈し、刃縁的に薄く鋭利になっているものが目立つ。④背面に角礫面を持つものが含まれており、原面とは言えないまでも、剥片生成工程を繰り返し行ない、用材の規模を次々と小型化する意図が読み取れる。⑤相対的に大型剥片程、単剥離打面から剥離されている。⑥微小な碎片(チップ状)が生ずるような打撃行為と素材的な剥離生成工程が同居している。⑦交互剥離はもちろんのこと、一般的な二次加工による製品整形を目指した形跡がなく、欠損の所見も偶発的である。

これらの観察結果を要するに、発掘調査の進行過程で予測されたことがらの多くを排除し得る結果となった。

その第一は、竜山石の原石を調達し、家形石棺など内蔵棺の製作を行った場ではないこと、第二は、石室内に安置されていた埋葬棺を引きずり出し、前庭周辺で壊した可能性は全くないこと、第三はこれだけの剥片材をあらかじめ播磨の地で用意、運搬したものでないことであり、結論が自ずから導けたとの意義は大きい。

(森岡・坂田)



第114図 竜山石 実測図(3) 1 / 4

第3表 石室・前庭部出土竜山石 数量・法量計測表

出土位置層位	箱数	大 (個)	中 (個)	小 (個)	合計 (個)	重さ グラ 大	重さ グラ 中	重さ グラ 小	重さ グラ 合計	整理 番号
前庭部西部図面の下位	1	1	1104	3788	4893	977	4218	1630	6825	A
前庭部西部遊離遺物	1	3	42	0	45	671	704	0	1375	B
前庭部2区西部東部図面の下位	1	1	227	35	263	127	2324	48	2499	C
前庭部北部南半	1	15	786	1220	2021	5238.5	4809.5	461	10509	D
前庭部東部	1	9	1	0	10	1820	140	0	1960	E
前庭部一括	1	1	275	52	328	77	2390	49	2516	F
前庭部東部(北半)図面下位	1	32	208	141	381	8684	2770	9.5	11463.5	G
前庭部東部	1	26	767	497	1290	5811	5220.5	242	11273.5	H
前庭部北部北半	1	34	583	909	1526	8502	5795	406	14703	I
前庭部東部図面の下位	1	7	409	243	659	1284	3276	146	4706	J
前庭部南部図面の下位	1	8	1010	691	1709	1859	6233	688	8780	K
前庭部北部図面の下位	1	4	717	1250	1971	434	4133	781	5348	L
前庭部北部と東部の区間畦	1	0	157	35	192	0	1340.5	18	1358.5	M
前庭部西部と南部区間畦(西半)	1	19	561	878	1458	3434	4408	663	8505	N
前庭部南部と東部の区間畦(一括)	1	5	113	59	177	595	2118	19	2732	O
前庭部北部と東部の区間畦(東半部)	1	23	1083	119	1225	4689	5776	350	10815	P
前庭部西部図面の下位	1	28	921	1211	2160	5879.5	10427	705	17011.5	Q
前庭部北部～東部の区間畦(西半)	1	4	354	410	768	1496.5	2305	253	4054.5	R
前庭部南部と東部の区間畦(一括)	1	12	302	127	441	2738	2216	93	5047	S
前庭部東部(南半)図面の下位	1	9	150	34	193	2693	2014	15	4722	T
前庭部北部と西部の区間畦(北半)	1	26	1971	551	2548	7177	7321	764	15262	U
前庭部南部	3	72	1547	501	2120	17571.5	14605.5	528	32705	V
前庭部2区1/2(北半)	1	15	235	221	480	3707.5	3861.5	29	7598	W
前庭部2区2/2(南半)	1	24	174	10	199	2801.5	2266	14	5081.5	X
前庭部	1	29	241	283	553	7474	4512.5	452	12438.5	Y
前庭部東部4/5	1	37	426	169	632	9005.5	4775.5	93.5	13874.5	Z
前庭部東部3/5	1	29	455	482	966	6787.5	6793.5	116.5	13697.5	ア
前庭部西部2/4(北半)	1	35	367	45	447	9753.5	7114	11	16878.5	イ
前庭部東部5/5	1	39	210	15	264	9949.5	3828	6	13783.5	ウ
羨道部(西)奥区X=9.0以北	1	5	226	57	288	743.5	3792	29	4564.5	エ
羨道部(西)南部と西部の区間畦(東半)	1	16	794	391	1201	2572	6481.5	304	9357.5	オ
羨道部(西)北部と南部の区間畦(南半)	1	15	593	160	768	3019	6257.5	132.5	9409	カ
羨道部(西)西部1/4(北半)	1	23	2326	1990	4339	3628.5	12458	1441	17527.5	キ
花崗岩のため欠番	1									ク
羨道部(西)手前区X=9.0以南	1	1	58	0	59	120	788	0	908	ケ
羨道部(西)奥区X=9.0以北	1	7	302	18	327	1104	6143	22	7269	コ
羨道部(西)手前区X=9.0以南	1	2	158	0	160	229	1013	0	1242	サ
羨道部(西)奥区X=9.0以北	1	7	452	211	670	1029	4419	164	5612	シ
羨道部(西)手前区X=9.0以南	1	3	438	210	651	431	5623	123	6183	ス
総計		626	20743	17013	38382	144113	174670	10806	329595	

第4表 遺物観察表

拂因 番号	因版 番号	器種	器形	口径 (cm)	器高 (cm)	その他の量 (cm)	胎土(素材)	焼成	色調	残存度	出土地区	遺構・層位	時期	備考	取り上げ 番号 破片数
95-1	32	須恵器	坏蓋	10.6	2.0	-	密 φ0.5mm大の白色砂礫を少 量含む。	良好	内)N5/0灰色～N4/0灰色 断)N4/0灰色 外)N6/0灰色	口縁部 約1/14	トレンチ11	東半部 4a層	7世紀	蓋部に径2cmの大付着物が付く。焼成温 度が低かったためか、断面がサンドイッ チ状になっている所がある。回転ナデが しっかりと施されている。	17-1点
95-2	32	須恵器	坏蓋	11.2	2.2	-	密 φ0.5mm大の白色砂礫を中量 含む。	良好	内)7.5Y6/1灰白色 断)7.5Y6/1灰白色 外)7.5Y7/1灰白色	小片	トレンチ1	盛土直下	7世紀	回転ナデが施されている。	7-1点
95-3	32	須恵器	坏蓋	残存 最大径 12.6	2.3	径3.0 高さ0.8 くびれ部 径2.6	やや粗い～密 φ1mm大の長石や石英が中 量見られる。	やや不良	内)N6/0灰色～N5/0灰色 断)N7/0灰白色 外)N5/0灰色～N6/0灰色	つまみ 部存 天井部 約1/8	トレンチ2	盛土直下	7世紀	回転ナデがしつかり施されている。焼成 温度が低かったためか、断面がサンド イッチ状にムラ焼けしている。	2-1点
95-4	38	須恵器	高坏	11.4	12.5	脚径12.3	密 φ1mm以下の長石や石英、黑 色粒砂が中量見られる。	良	内)N6/0灰色～N5/0灰色 断)N6/0灰色 外)N6/0灰色～N5/0灰色	約1/2	トレンチ3	墳丘と 旧建築物の 基礎間	7世紀 か	環部と脚部の接合が歪。脚部に1条の沈 織が見られる。脚と环の接合状況は必ず しも明瞭ではない。脚の中輪は坏部中輪 を通過している。	8-14点
95-5	32	土師器	皿	推定 19.4	2.9	-	やや粗い～密 φ1mm大の長石や石英、肌色 粒砂などが中量見られる。	良	内)5Y6/8橙色～2.5Y6/8橙色 断)7.5YR6/6橙色 外)5YR6/6橙色	口縁部 約1/8	トレンチ10	南城	7世紀 前半	全体的に摩滅が著しい。	16-1点
95-6	32	銭貨	寛永通寶	継長 2.6 横長 2.6	-	厚み0.1 重さ3.4 ～3.5g	銅製	-	表)2.5Y4/3オリーブ褐色(光沢あり) 裏)10GY4/1暗緑色(緋の色)	完存	トレンチ1	表土内	江戸 時代 1668年～ 1683年	銘が全体に広がっているが、寛永通寶の 文字は比較的はっきりと読み取れる。	6-1点
96-1	38	須恵器	坏蓋	8.8	1.7	-	密 φ1mm以下の長石や石英、黑 色粒砂が中量見られる。	良	内)N6/0灰色～N7/0灰白色 断)5B5/1青灰色～N5/0灰色 外)N7/0灰白色～N6/0灰色	口縁部 約1/2	Aトレンチ (第1次10tr. の南側)	表土層	7世紀 中頃～ 後半	ロクロ回転、左、外面にうっすらと自然 軸が斑点状に付く。	7-1点
96-2	55	須恵器	坏蓋	9.6	1.5	-	やや粗い～密 φ1mm以下の長石や肌色粒 砂が散見される。	やや不良	内)N6/0灰色～N5/0灰色 断)N4/0灰色～N3/0暗灰色 外)7.5Y6/1灰色～N6/0灰色	口縁部 約1/2	Aトレンチ (西側サブ ト1の南端 第1次10tr. の南)	黑色表土の 直下層	7世紀	ツマミ部欠損で剥離痕が見られる。	7-1点 8-1点
96-3	57	須恵器	坏蓋	復元 9.4	1.1	復元器径 11.4	やや粗い～密 φ1mm以下の長石や石英が 散見される。	良	内)N6/0灰色～N5/0灰色 断)N3/0暗灰色～N2/0黒色 外)N5/0灰色 内)N7/0灰白色～N6/0灰色	頭部 約1/14	Aトレンチ (第1次10tr. の南側)	表土層	7世紀 前半	カエリが低く、器高も扁平になつていい る。内・外面ともにナデは丁寧に行われ ている。环身とセットで焼かれたのか、 カエリ部にはつりと色の違い見られる。天井部に近くなる程器壁が厚くなっている。	7-1点
96-4	58	須恵器	長頸壺 (体部肩部)	-	3.0	肩部復元 20.4	密 φ1mm以下の長石や石英が 中量見られる。	不良	内)N5/0灰色～N4/0灰色 断)①5YR6/1褐色②5Y6/1灰 色外)5Y6/1灰色～N5/0灰色 桶)5Y3/2オリーブ黒色	肩部 約1/20	Aトレンチ (第1次10tr. の南側)	表土層	7世紀 前半	外縁は釉が付いており調整は分からな いが、回転ナデが内面同様施されている と思われる。断面により内面2/3は生焼 け状態になっている。	7-1点
96-5	38	須恵器	高坏 (坏部と脚部)	7.6	4.1	-	やや粗い～密 φ2～1mm以下の長石や石 英、肌色粒砂が散見される。	良	内)N5/0灰色～N6/0灰色 断)7.5YR3/1墨褐色～N4/0灰色 外)N5/0灰色 脚部 内)N6/0灰色～5B6/1青灰色 桶)10Y4/1暗赤色～N6/0灰色 外)N6/0灰色 桶)5GY3/1暗オリーブ灰色	坏底部 約3/4	Aトレンチ (第1次10tr. の南側)	表土層	7世紀	脚部に弱い凹線がある。脚部約1/4と坏 部の一部に自然軸が付いている。	7-1点
96-6	58	須恵器	高坏 (脚部)	-	1.8	脚裾部 13.6	密 φ1mm以下の長石や石英、黑 色粒砂が多く見られる。	良	内)N7/0灰白色～N6/0灰色 断)N5/0灰色 外)N6/0灰色～N7/0灰白色	脚裾部 約1/8	Aトレンチ (第1次10tr. の南側)	表土層	7世紀	接合は出来ないが、同一個体と思われる 破片(SSK2-7)が1片ある。内・外面とも に丁寧なナデが施されている。	7-2点
96-7	58	須恵器	器台 (底盤部)	-	2.3	底部残存 最大径 21.2	密～や粗い φ1mm以下の長石や石英が 多く見られる。	やや不良	内)N5/0灰色～N4/0灰色 断)①N6/0灰色②5Y6/1褐色 外)N6/0灰色～N7/0灰白色	残存部 最大 約1/12	Aトレンチ (第1次10tr. の南側)	表土層	7世紀 前半	焼成時の温度が低かったのか、断面がサ ノトイッチ状になつている。内・外面も に回転ナデが施されている。台の部分 は剥離している。	7-1点
96-8	卷頭 13- 因版 34下	須恵器	子持器台 (杯柱部)	9.2	残存 8.6	-	密 φ1mm以下の長石が中量見 られる。	良	内)N6/0灰色～N5/0灰色 断)N6/0灰色～N5/0灰色 外)N4/0灰色～N5/0灰色	-	Aトレンチ	7-表土層内 8-黒色表土 直下 73-74-86- 土器留りA	7世紀 か	子持器台の中心に置かれる台座の可能 性がある。	7-1点
96-9	58	須恵器	坏蓋 (天井部)	-	1.5	残存最大 直径15.2	密 φ1mm以下の長石や石英、黑 色粒砂が少量見られる。	やや不良	内)5Y5/1灰色 断)5Y6/1灰白色～2.5Y7/2灰黄色 外)5Y7/1灰白色	最大径 約1/4	Aトレンチ (北城より2 段目)	機械掘削直 下層掘下げ	6世紀 末	内・外面ともに、しっかりとナデが施し ている。外縁のヨコナデは粗雑化しつつ ある。ロクロ回転方向、左。	4-1点
96-10	57	須恵器	坏蓋 (天井部)	-	1.5	残存最大 直径9.2	密～精緻 φ1mm以下の長石や黒色粒 砂が中量見られる。	良	内)N6/0灰色～N7/0灰白色 断)N6/0灰色 外)10Y7/1灰白色～N6/0灰色	天井部 約1/8	Aトレンチ (北城より1 段目)	機械掘削直 下層掘下げ	7世紀 前半	ロクロ回転方向、右。内面のナデは回転 方向以外にも見られる。	4-1点
96-11	57	須恵器	坏蓋	復元 9.6	1.9	-	密 φ1mm以下の長石や石英が 中量見られる。	良	内)5Y7/1灰白色～N7/0灰白色 断)5Y8/1灰白色～5Y7/1灰白色 外)5Y7/1灰白色～7.5Y8/1灰白色	口縁部 約1/10	Aトレンチ (北城より1 段目)	機械掘削直 下層掘下げ	7世紀 前半	内・外面ともに面取り風のナデがしつ かりと施されている。	4-1点
96-12	40	須恵器	坏蓋	推定 9.0	2.4	-	密 φ1mm以下の長石や黒色粒 砂が中量見られる。	良好	内)N7/0灰白色 断)N6/0灰色～N7/0灰白色	口縁部 約1/6	Aトレンチ (北城より2 段目)	機械掘削床 直下層掘下げ	7世紀 前半	回転ナデが施されている。	4-3点
96-13	40	須恵器	坏蓋	推定 8.4	2.4	-	密 φ1mm以下の長石や石英、黑 色粒砂が中量見られる。	不良	内)N5/0灰色～N4/0灰色 断)5YR5/2灰褐色～2.5YR5/2灰赤色 外)5YR4/1灰褐色～2.5YR5/1赤灰色	口縁部 約1/8	Aトレンチ (北城より2 段目)	機械掘削直 下層掘下げ	7世紀 前半	ロクロ回転、左。全体的に厚みがない。	4-1点
96-14	40	須恵器	坏蓋	7.6	2.0	-	密 φ1mm以下の長石や黒色粒 砂が散見される。	やや不良	内)N5/0灰色～N4/0灰色 断)5YR4/2灰褐色～N4/0灰色 外)N5/0灰色～N6/0灰色	口縁部 約1/2	Aトレンチ (北城より3 段目)	機械掘削直 下層掘下げ	7世紀 中頃	ロクロ回転、左。断面と外縁がしっかり りと施されている。	4-1点
96-15	40	須恵器	坏蓋	8.8	2.0	-	密 φ1mm以下の長石や石英、黑 色粒砂が中量見られる。	やや不良	内)N4/0灰色～N5/0灰色 断)2.5YR4/2灰赤色～N3/0灰白色 外)2.5YR5/1赤灰色～N5/0灰色	口縁部 約1/4	Aトレンチ (北城より2 段目)	機械掘削床 直下層掘下げ	7世紀 中頃～ 後半	ロクロ回転、左。内面と外縁がしっかり りと焼けていない。	4-1点
96-16	40	須恵器	坏蓋	8.0	2.0	-	密～精緻 φ1mm以下の長石や石英、黑 色粒砂が中量見られる。直 径2mmの大長石が1点見られ る。	やや不良	内)N6/0灰色～N5/0灰色 断)10Y4/2灰赤色～10R3/2灰赤色 外)N5/0灰色～N5/0灰色	口縁部 約1/6	Aトレンチ (北城より2 段目)	機械掘削直 下層掘下げ	7世紀 中頃	天井部に1cm程度の付着物が見られる。 内面に仕上げナデが見られる。ツマミを 欠く。	1-1点 4-1点
96-17	-	須恵器	坏蓋	推定 7.8	0.8	-	密 φ1mm以下の長石や石英が 少量見られる。	やや不良	内)N4/0灰色～N5/0灰色 断)2.5YR4/2灰赤色 外)10Y5/1灰褐色～N5/0灰色	約1/12	Aトレンチ (北城より2 段目)	機械掘削直 下層掘下げ	7世紀 前半	全体的に器壁が薄い。同じ個体と思われる 口縁部の破片が他に1点あるが、接合 できる部分が見つからない。外縁に斑点 状にうっすら自然軸がかかっているよ うに見える。	4-1点
96-18	57	須恵器	坏身 (口縁部)	復元 8.4	1.1	-	密～精緻 φ1mm以下の長石や石英な どが、中量見られる。	良	内)N7/0灰白色～N7/0灰白色 断)N8/0灰白色～N7/0灰白色 外)N5/0灰色～N6/0灰色 外)N7/0灰白色	口縁部 約1/10 受け部 約1/8	Aトレンチ (北城より2 段目)	機械掘削直 下層掘下げ	7世紀 前半	内・外面ともに、しっかりとナデを施 している。	4-1点
96-19	57	須恵器	坏身 (口縁部)	復元 9.8	1.9	復元器径 11.8	密～精緻 φ1mm以下の長石が少量見 られる。	良	内)N6/0灰色～N7/0灰白色 断)N6/0灰白色 中)5Y7/1灰白色 外)N5/0灰色～N6/0灰色 外)2.5Y6/4にぶ~黃色(光沢あり)	口縁部 約1/10	Aトレンチ (北城より2 段目)	機械掘削直 下層掘下げ	7世紀 前半	全体的に器壁が薄い。同じ個体と思われる 口縁部の破片が他に1点あるが、接合 できる部分が見つからない。外縁に斑点 状にうっすら自然軸がかかっているよ うに見える。	4-1点
96-20	40	須恵器	坏身	8.6	2.7	-	精緻 φ1mm以下の長石が若干見 られる。	良好	内)N6/0灰色～N5/0灰色 断)N5/0灰色 外)N6/0灰色～N5/0灰色	口縁部 約1/2	Aトレンチ	機械掘削直 下層掘下げ	7世紀 中頃	ロクロ回転、左。口縁部が外反している。	4-3点
96-21	40	須恵器	坏身	10.0	3.5	-	密 φ1mm以下の長石や石英が 中量見られる。極めて散発的。	良	内)N5/0灰色～N4/0灰色 断)2.5YR5/1赤灰色～2.5YR4/2灰赤色 外)N4/0灰色～N3/0暗灰色	口縁部 約2/3	Aトレンチ (北城より2 段目)	機械掘削直 下層掘下げ (黄色砂礫 段丘堆積 層)	7世紀 中頃	ヘラ削り未調整なので、安定せず片方に 傾く。	1-4点 4-1点

96-22	57	須恵器	坏身	10.8	3.5	-	密 φ1mm以下の長石や石英が中量見られる。	やや不良	内)N4/0灰色～N5/0灰色 断)2.5YR4/2赤灰色～2.5YR4/1赤灰色 外)N4/0灰色～N5/0灰色	口縁部 約1/4	Aトレーナ 機械掘削直下層掘下げ(黄色砂礫段丘様再堆積層)	7世紀 前半	内・外面の底面以外は丁寧にナデが施されている。底面は、回転ヘラ削りのち未調整である。	4-3点	
96-23	57	須恵器	坏身	復元 9.6	3.3	-	密 φ1mm以下の長石や黒色粒砂が中量見られる。	良	内)N4/0灰色～N5/0灰色 断)N6/0灰色～2.5Gy6/1オリーブ灰色 外)N6/0灰色～10Y6/1灰色	口縁部 約1/9	Aトレーナ (北域より2段目)	機械掘削直下層掘下げ	7世紀 前半	外面は強いヨコナデが施され、段を生ずる。	4-2点
96-24	57	須恵器	坏身 (口縁部～底部)	10.4	3.1	-	密 φ1mm以下の長石や石英が中量含まれる。	良好	全体的に暗色系 内)N4/0灰色～N5/0灰色 断)N5/0灰色～N6/0灰色 外)N5/0灰色～N4/0灰色	口縁部 約1/8	Aトレーナ (北域より2段目)	機械掘削直下層掘下げ	7世紀 前半	回転ナデが内・外面ともにしっかり施されている。	4-1点
96-25	57	須恵器	坏身	復元 10.4	1.9	-	密 φ1mm以下の長石や石英が中量見られる。	良好	内)N4/0灰色 断)N5/0灰色～N6/0灰色 外)N4/0灰色～N3/0暗灰色	口縁部 約1/10	Aトレーナ (北域より1段目)	機械掘削直下層掘下げ	7世紀 初頭	外面に隕灰のあとが見られる。内・外面ともにナデが丁寧に施されている。短頸壺の蓋になる可能性もある。	4-1点
96-26	57	須恵器	坏身	復元 10.0	3.1	-	密 φ1mm以下の長石や黒色粒砂が少量見られる。	良	内)N6/0灰色～N5/0灰色 断)N6/0灰色～N5/0灰色 外)N6/0灰色～10Y6/1灰色	口縁部 約1/14	Aトレーナ (北域より2段目)	機械掘削直下層掘下げ	7世紀 前半	口縁部付近に屈曲をみるヨコナデ調整。	4-1点
96-27	57	須恵器	坏身	復元 9.2	2.5	-	密 φ1mm以下の長石や黒色粒砂が中量見られる。	良	内)N6/0灰色 断)N6/0灰色～10Y6/1灰色 外)N6/0灰色～2.5Gy6/1オリーブ灰色	口縁部 約1/20	Aトレーナ (北域より2段目)	機械掘削直下層掘下げ	7世紀 前半	破片が小さいのは、はっきりとした径は不明である。同一個体と思われるものが5点あるが、接合する部分はない。内・外面ともにヨコナデが丁寧に行われている。	4-5点
96-28	57	須恵器	坏身 (口縁部)	復元 9.4	2.1	-	密～精緻 φ1mm以下の長石や石英が少量見られる。	良	内)N6/0灰色～N5/0灰色 断)N6/0灰色 外)N5/0灰色～N6/0灰色	小片	Aトレーナ (北域より2段目)	機械掘削直下層掘下げ	7世紀 前半	口縁部の残りが少なかったので、口径は推定である。内・外面ともに丁寧なナデが施されている。器壁がきわめて薄い。	4-1点
96-29	40	須恵器	坏身	9.6	2.8	-	やや粗～密 φ1～2mm以下の長石や石英、黒色粒砂などが中量見られる。	良好	内)N6/0灰色 断)N6/0灰色～N5/0灰色 外)N6/0灰色～N7/0灰色	口縁部 約1/4	Aトレーナ (北域より2段目)	機械掘削直下層掘下げ	7世紀 中頃	器体全体に歪みが見られる。口縁部～体部上部部分に強いナデが段状に施されている。	4-4点
96-30	58	須恵器	坏身 (底部)	6.0	1.6	-	密 φ1mm以下の長石や石英が散見される。	良	内)N5/0灰色～N4/0灰色 断)N6/0灰色 外)N4/0灰色～N3/0暗灰色	底部 約1/3	Aトレーナ (上から1・2段目)	2回目の精査 2枚目の土稟層	7世紀 前半	全般的に器壁が薄い。クロロ回転、右。	11-2点
96-31	58	須恵器	坏身 (底部)	残存 最大 10.0	1.6	-	密 φ1mm以下の長石や石英が少量見られる。φ2mmの大黒色粒砂が1粒見られる。	やや不良	内)10Y7/1灰色～N6/0灰色 断)外)5YR5/3にぶい赤褐色 中)2.5GY6/1オリーブ灰色 外)7.5Y7/1灰白色～10Y7/1灰白色	底部 約1/6	Aトレーナ (上から1・2段目)	2回目の精査 2枚目の土稟層	7世紀 前半	焼成温度が低かったのか、断面内部まで灰色で焼けていない。	11-1点
96-32	58	須恵器	坏身 (底部の一部)	残存 最大 9.2	1.3	-	やや粗～密 φ1mm以下の長石や石英、黒色粒砂が中量見られる。外面底部に2mmの穴が見られる。小石の抜けた痕か。	良	内)N6/0灰色～N5/0灰色 断)N6/0灰色 外)N6/0灰色～N5/0灰色	底部 約1/4	Aトレーナ	機械掘削削 (盛土直下) 黃色砂礫層	7世紀 前半	ロクロ回転、右。	1-1点
96-33	40	須恵器	平瓶 (口縁部)	5.8	3.8	くびれ部 最小径 4.2	密～精緻 φ1mm以下の長石や黒色粒砂が少量見られる。	良好	内)N6/0灰色～2.5GY6/1オリーブ灰色 断)N6/0灰色 外)N5/0灰色～N4/0灰色	口縁部 約1/2	Aトレーナ (北域より2段目)	機械掘削直下層掘下げ	7世紀 前半	凹線文が1条見られる。凹線から頸部にかけて斜め方向にナデが行われている。	4-2点
96-34	40	須恵器	平瓶 (口頭部)	復元 7.6	5.3	-	密～やや粗い φ1mm以下～2mmの大長石や黒色粒砂が散見される。	やや不良	内)N5/0灰色～N4/0灰色 断)内)N4/0灰色外)7.5R4/1暗赤灰色 外)N4/0灰色～N5/0灰色	口縁部 約1/3	Aトレーナ	機械掘削直下層掘下げ 南西部 拡張部 盛土内收 目的土稟層 より上	7世紀	口縁部が歪んでいる。凹線1条が見られる。	4-1点 10-1点 11-2点
96-35	58	須恵器	平瓶(体部)	最大 13.0	体部上 4.7 体部下 2.9	-	(上)密 φ1mm以下の長石や石英が少量見られる (下)密～やや粗い φ1～2mmの大長石が散発的に少量見られる。	やや不良	(上) 内)10YR6/1灰白色～N5/0灰色 断)N5/0灰色～N3/0暗灰色 (下) 内)N6/0灰色～N5/0灰色 断)N4/0灰色～N3/0暗灰色 外)N5/0灰色～N4/0灰色	体部 約1/8	Aトレーナ (北域より2段目) 西側サブフレの南	機械掘削直下層掘下げ (黄色砂礫段丘再堆積層)	7世紀	接合は出来ないが、同一個体と思われる ので合わせて図化した。	8-2点 4-1点
96-36	57	須恵器	無蓋高窓 (口縁部)	復元 10.2	2.2	-	密 φ1mm以下の長石や黒色粒砂が中量見られる。	良	内)N6/0灰色～N5/0灰色 断)N6/0灰色 外)N6/0灰色～10Y6/1灰色	口縁部 約1/16	Aトレーナ	機械掘削削	7世紀 前半	小片のため、径は推定である。内・外面ともに丁寧にナデが施されている。	1-1点
96-37	58	須恵器	高环 (段透かし、環部と脚部の接合箇所)	最大 9.6	1.5	-	密 φ1mm以下の長石や石英、黒色粒砂が中量見られる。	不良	内)N4/0灰色 断)2.5YR4/2赤灰色(暗紫色) 外)N4/0灰色～N5/0灰色 中)2.5Y6/8明黄褐色	小片	Aトレーナ	機械掘削削	7世紀	内面に自然釉が付き、表面は斑点状に剥離している。	1-1点
96-38	58	須恵器	高坏 (脚裾部)	-	0.6	復元 端部径 8.0	やや粗い～密 φ1mm以下の長石や黒色斑状粒砂が中量見られる。	良	内)N7/0灰白色～N6/0灰色 断)N6/0灰色～N5/0灰色 外)N7/0灰白色～N6/0灰色 中)2.5YS4/4黄褐色	端部 約1/6	Aトレーナ (北域より2段目)	機械掘削直下層掘下げ	7世紀 前半～中頃	外面と内面の両方に自然釉がついているが、内面は頸部でない。同一個体と思われる破片があるが、接合する部分がないので図化していない。	4-2点
96-39	57	須恵器	長頭壺 (口縁部)	復元 11.8	2.9	-	密 φ1mm以下の長石や石英が中量見られる。	良好	内)N5/0灰色～10Y5/1灰色 断)外)N6/0灰色～2.5GY7/1明オリーブ灰色 中)N4/0灰色 外)N5/0灰色～N6/0灰色	口縁部 約1/10	Aトレーナ (上から2段目平坦面)	表土層 黄色砂礫	7世紀	同一個体と思われるが、接合できないものが口縁部～頸部の破片として1点見られる。口縁部はしっかりとナデが施されている。	6-1点 1点
96-40	58	須恵器	長頭壺か 龜などとの 体部	残存 20.6	2.3	-	密 φ1～2mm以下の長石や石英、黒色粒砂が中量見られる。	やや不良	内)N6/0灰色～N7/0灰白色 断)N6/0灰色～7.5Y7/1灰白色 外)N5/0灰色～N6/0灰色	肩部 約1/10	Aトレーナ (北域より2段目)	機械掘削直下層掘下げ	7世紀 前半	焼成時に粘土中の空気が膨張した部分が、2ヶ所見られる。内・外ともにヨコナデがしっかりと施されている。	4-1点
96-41	59	土師器	亮や堀類 (口縁部)	復元 28.6	3.5	-	密～やや粗い φ1～2mmの大長石や石英、肌色粒砂が中量見られる。	良	内)7.5YR7/6橙色 断)10YR8/4浅橙色～2.5Y8/3淡黄色 外)7.5YR7/6橙色～7.5YR7/4にぶい橙色	口縁部 約1/16	Aトレーナ (上から2段目平坦面)	表土層	7世紀	内・外ともに自然釉が見られるが、見られる破片が5本(0.5cm)が見られる。	6-1点
97-1	57	須恵器	坏蓋	13.4	2.1	-	密～精緻 φ1mm以下の長石や石英が中量見られる。	良好	内)N5/0灰色～N6/0灰色 断)N5/0灰色(やや紫色味を帯びる) 外)N6/0灰色～N5/0灰色	口縁部 約1/20	Aトレーナ (西側サブトレの南端第1次otr.の南)	黑色表土の直下層	7世紀 前半	内・外ともにナデがしっかりと施されている。器皿は全体的に薄い。口縁部やや尖りぎみに終わる。	8-1点
97-2	38	須恵器	高坏	9.0	7.6	-	密 φ1mm以下の長石や石英が中量見られる。φ2mmの大乳白色粒砂が若干見られる。	良	坏部 内)N5/0灰色～N6/0灰色 断)N5/0灰色～10YR4/1褐色 外)N4/0灰色～N5/0灰色 脚部 内)N4/0灰色～N5/0灰色 断)N3/0暗灰色～N5/0灰色 外)N5/0灰色～N6/0灰色	口縁部 約1/3	Aトレーナ (西側サブトレの南端第1次otr.の南)	黑色表土の直下層	7世紀 中頃	脚部に凹線が1条見られる。	8-1点
97-3	57	須恵器	平瓶 (口頭部)	6.8	2.0	-	密～精緻 φ1mm以下の長石や石英が中量見られる。	良好	内)①N5/0灰色②N6/0灰色 断)N6/0灰色 外)N5/0灰色～N6/0灰色	口縁部 約1/10	Aトレーナ (西側サブトレの南端第1次otr.の南)	黑色表土の直下層	7世紀 前半	内・外ともにナデがしっかりと施されている。	8-1点
97-4	58	須恵器	平瓶(頸部)	6.6	1.4	-	密 φ1mm以下の長石や石英が中量見られる。	良	内)N7/0灰白色 断)N7/0灰白色 外)N6/0灰色～N5/0灰色	頸部 約1/8	Aトレーナ (西側サブトレの南端第1次otr.の南)	黑色表土の直下層	7世紀 前半	一度切り抜いた所に再度粘土を蓋被せ、くり抜いている。外面は、灰を被ったのか表面がこぼこしている。内面は、ナデと指揮されがなされている。	8-1点
97-5	58	須恵器	壺(底部)	-	3.4	復元 底部径 6.8	密～やや粗い φ1mm以下の長石や石英が中量見られる。	やや不良	内)N7/0灰白色～10Y7/1灰白色 断)①N7/0灰白色～7.5Y7/1灰白色 ②7.5YR6/1褐色(薄い紫味を帯びる) 外)N6/0灰色～7.5Y7/1灰白色	底部 約1/10	Aトレーナ 西側先行トレーナ	西側先行トレーナ	7世紀	内面中央は、仕上げナデが施されている。焼成時の温度が低かったのか断面中央から外面にかけて焼けムラが見られる。	2-1点
97-6	39	須恵器	台付長頭壺 の脚台部分 か高台付き 腕の高台残 存部	-	3.0	残存 脚台径 11.0	密～やや粗い φ1mm以下の長石や石英が中量見られる。(器皿中にも鉛物散見)	良	内)2.5YS4/1黄灰色 断)N4/0灰色～N3/0暗灰色 外)N5/0灰色 高台内)N6/0灰色～N5/0灰色	高脚部 約1/4	Aトレーナ (西側サブトレの南端第1次otr.の南)	黑色表土の直下層	7世紀 中頃	内・外ともに回転ナデ調整が施されている。	8-1点

V.
確認調査結果の概要

97-7	58	須惠器	長頸壺(肩部)	残存最大7.2	3.2	-	やや粗い~密 φ1mm以下の長石や石英、黒色粒砂が中量見られる。	良	内)N6/0灰色~N7/0灰白色 断)10Y7/1灰白色~N7/0灰白色 外)N6/0灰色~N5/0灰色	凹線部分 約1/8	Aトレンチ (西側サブトレーの南端第1次10cr.の南)	黒色表土の直下層	7世紀	外面に陥落による釉が斑点のように、極わずか付着している。肩部に弱いやや幅広の凹線が1条見られる。	8-1点
97-8	59	土師器	壺	復元15.6	4.2	-	密 細砂を含む φ1mm以下の長石や石英、黒色粒砂が中量見られる。	良	内)5YR6/6橙色~2.5YR5/6明赤褐色 断)7.5YR6/6橙色~7.5YR6/4にぶい橙色 外)5YR6/6橙色	口縁部 約1/8	Aトレンチ (西側サブトレーの南端第1次10cr.の南)	黒色表土の直下層	7世紀前半	摩滅している部分が多いので、調整が分かれにくいが、外面はへラ磨きが施されている。	8-1点
97-9	38	土師器	大皿	26.8	4.9	-	密 φ1mm以下の長石や黒色粒砂が中量見られる。	良好	内)2.5YR5/6明赤褐色 断)2.5YR5/6明赤褐色 外)2.5YR5/6明赤褐色	口縁部 約1/10	Aトレンチ (西側サブトレーの南端第1次10cr.の南)	黒色表土の直下層	7世紀後半	内面は摩滅しているので、調整が分かれにくい。体部に細かいケ斜め方向にナデられている線が、左から右へは4本、右から左へ2本見られる。	4-4点
97-10	59	弥生土器	甕(口頭部)	18.8	2.0	-	やや粗い φ1mm以下の長石や石英、赤褐色粒砂、黒色粒砂が多く見られる。	良	内)7.5YR7/4にぶい橙色~7.5YR7/6橙色 断)10Y8/3浅黄色 外)7.5YR7/4にぶい橙色~5YR7/6橙色	口頭部 約1/8	Aトレンチ 西側先行トレンチ	西側先行トレンチ	弥生時代後期	内・外面ともに摩滅が著しいので、調整技法が不明瞭。	2-1点
97-11	39	土師器	脚台付き壺	-	3.3	高台接地面径14.6	やや粗い φ2~1mm以下の長石や石英、赤褐色粒砂が散見される。	やや不良	内)5YR6/6橙色~7.5YR6/6橙色 断)10Y7/3にぶい黄橙色~2.5Y7/3浅黄色 外)7.5YR7/6橙色	高台部 約1/8 环部 約1/4	Aトレンチ (西側サブトレーの南端第1次10cr.の南)	黒色表土の直下層	7世紀半ば	内面が著しく摩滅している。外面はヨコナデが施されている。ローリングが見られる。	8-1点
98-1	39	須惠器	壺蓋	15.8	3.7	高さ1.1 径2.3 最大径からの高さ0.7 くびれ部径1.9	密~精緻 φ1mm以下の長石が極少量見られる。	やや不良	内)N4/0灰色~7.5YR3/1黒褐色 断)5YR3/1黒褐色~N6/0灰色 外)N3/0暗灰色~5YR4/2灰褐色	口縁部 約2/3	Aトレンチ	8-黒色表土直下 79-土器溜りA	7世紀後半	ツマミ完存。口縁部は若干歪み、波打っている。外面に強い押圧込みのヨコナデが入っている。B杯として分類。	8-3点 79-3点
98-2	57	須惠器	壺身(口縁部)	10.6	2.0	-	密 φ1mm以下の長石や石英が中量見られる。	良	内)N6/0灰色~N5/0灰色 断)N6/0灰色 外)N6/0灰色~N5/0灰色	口縁部 約1/20	Aトレンチ	土器溜りA	7世紀前半	内・外面ともに丁寧なナデが施されている。	9-1点
98-3	58	須惠器	壺身(底部)	-	2.1	底部径7.0 残存部最大径8.6	やや粗い~密 φ3~1mm以下の長石や黒色粒砂、茶色粒砂が散見される。	不良 軟質な燒き上がりとなっている。	内)2.5Y7/1灰白色~2.5Y7/3浅黄色 断)2.5Y6/1灰白色~5Y7/1灰白色 外)5Y7/1灰白色~2.5Y7/3浅黄色	底部 約2/3	Aトレンチ	土器溜りA	7世紀前半	あまり丁寧なナデではない。器壁の成形が不十分。	9-1点
98-4	38	須恵器	広口壺(口頭部)	23.0	13.6	-	やや粗い φ1mm以下の長石や石英、肌色粒砂が散見される。全体に細砂が広がる。	不良 軟質な焼成炎を受けける	内)2.5Y7/2灰黄色 断)10Y7/2にぶい黄橙色 外)5Y7/1灰白色~2.5Y7/2灰黄色	口縁部 約1/2	Aトレンチ (西側サブトレーの南端第1次10cr.の南)	黒色表土の直下 土器溜りA	7世紀前半	全体的にローリングを受け、摩滅しているので、器面が荒れている。段に分かれている。文様帶を無視した退化波状紋が見られる。内面に指サエと粘土巻上げ焼成が見られる。軟質焼成。	8-3点 9-3点 不明-3点
98-5	57	須惠器	平瓶か長頭壺(口頭部)	復元8.0	3.4	-	密 φ1mm以下の長石や石英、黒色粒砂が中量見られる。	良	内)N6/0灰色~N5/0灰色 断)N6/0灰色~N5/0灰色 外)7.5Y6/1灰白色~N6/0灰色	口縁部 約1/4	Aトレンチ (西側サブトレーの南端第1次10cr.の南)	黒色表土の直下層	7世紀前半	陥落による薄い自然釉が内・外面ともに噴霧状に見られる。	8-1点
98-6	57	須惠器	長頭壺(口縁部)	11.4	2.0	-	密~精緻 φ1mm以下の長石や石英が中量見られる。	良好	内)N6/0灰色~N5/0灰色 断)N4/0灰色~N5/0灰色 外)N4/0灰色	口縁部 約1/12	Aトレンチ	土器溜りA	7世紀前半	外面に直径1cmくらいの祐土粒の付着物が見られる。口縁は少し外反している。内・外面ともに丁寧なナデが施されており、一部に自然釉が付く。	73-1点
98-7	57	須惠器	広口壺(口縁部)	26.6	2.4	-	密 φ1mm以下の長石や黒色粒砂を多く含む。	良	全般的に淡い 内)N7/0灰白色 断)N7/0灰白色~N6/0灰色 外)N6/0灰色~N5/0灰色	口縁部 約1/20	Aトレンチ (上から段目)	土器溜りA	7世紀	内・外面ともにヨコナデがしっかりと施されている。	9-1点
98-8	卷頭13.3-34 図版33-34	須惠器	子持器台	壺部8.0	3.5	壺部 器台14.2	密 φ1mm以下長石が中量見られる。	良	壺部 内)N5/0灰色~N6/0灰色 断)N6/0灰色 外)N5/0灰色~N6/0灰色 器台 内)N6/0灰色~N5/0灰色 断)N6/0灰色~N5/0灰色 外)N6/0灰色~N5/0灰色	壺口 部 約1/6	Aトレンチ	7-表土層内 8-黒色表土 直下 73-74-86- 土器溜りA	7世紀	連續した4個の壺部と並進した1個の壺部を復元した。子持器台としては、近畿で最も新しい型式に復原できる。	7-2点 8-2点 73-1点 86-1点 不明-2点
98-9	39	須惠器	壺か?(体部下半)	-	14.0	残存部最大25.4	密 φ1~2mmの大長石や石英、黒色粒砂などが中量見られる。	良	内)10Y7/1灰白色~10Y6/1灰白色 断)N7/0灰白色~7.5Y7/1灰白色 外)5Y7/2灰白色~5Y6/2オーリーブ色	体部 下半 約1/6	Aトレンチ	土器溜りA	-	内・外面部は、指サエがなされており、その他はナデが施されている。土器質焼成である。	1点
98-10	39	土師器	壺	16.0	5.4	-	密(精良) φ1mm以下の長石・石英・黒色粒砂(器表のみ)が中量見られる。	良	内)5YR6/6橙色~2.5YR6/6橙色 断)5.5YR7/6橙色~7.5YR7/4にぶい橙色 外)5YR6/6橙色~2.5YR5/6明赤褐色 (赤色部分)	口縁部 約1/8	Aトレンチ	土器溜りA	7世紀中頃	内面は摩滅している所が多いが、暗文が施されているのがくらうじて見られる。ミガキや暗文により微細な鉛の粒状物もよく器肉内に沈む。水平方向研磨面に若干の光沢感あり。	87-1点
98-11	39	土師器	皿	復元19.4	3.2	-	密 φ1mm以下の肌色粒砂が少量見られる。	良	内)5YR6/6橙色~2.5YR5/6明赤褐色 断)10Y7/3にぶい黄橙色~2.5YR4/2灰赤色 外)2.5YR5/6明赤褐色	口縁部 約1/12	Aトレンチ	土器溜りA	7世紀前半	全般的に摩滅している。器表に赤採。	81-2点
98-12	59	土師器	皿	19.0	3.6	-	やや粗い φ1~2mmの大長石や石英、赤褐色粒砂が散見される。	良	内)5YR7/6橙色 断)10Y7/4にぶい黄橙色 外)5YR6/6橙色~2.5YR6/8橙色	口縁部 約1/6	Aトレンチ	土器溜りA	7世紀か?	内・外面ともに摩滅が著しいので、はつきりと調整技法が分からない。	9-1点
98-13	59	土師器	皿	残存最大21.2	2.8	-	密 φ1mm以下の黒色粒砂や肌色粒砂が中量見られる。	良	内)2.5YR5/6明赤褐色~5YR6/6橙色 断)5YR6/6橙色~5YR6/3にぶい橙色 外)2.5YR5/6明赤褐色	最大径 約1/12	Aトレンチ	土器溜りA	7世紀前半	小片で全般的に摩滅しているので、調整が分かれにくく。	9-1点
98-14	39	土師器	脚台付き壺	-	2.1	高台接地面径11.4	密 φ1mm以下の長石が少量見られる。	良	内)10Y7/4にぶい黄橙色 断)10Y7/4にぶい黄橙色~10YR6/3に ぶい黄橙色 外)5YR6/6橙色	高台 約1/5	Aトレンチ	土器溜りA	7世紀前半	内面の調整は、摩滅が著しいので分からない。外面も摩滅しているが、かすかにナデの痕が見られる。	80-1点
99-1	36	須惠器	平瓶	11.0~13.3	15.8	体部長20.9	密 φ1mm以下の長石や石英、黒色粒砂が中量見られる。	良	内)N4/0灰色~7.5Y5/1灰白色 断)7.5Y5/1灰白色~N4/1灰色 外)2.5GY3/1オーリーブ灰色~7.5GY2/1綠黑色	完存	Aトレンチ	溝201	7世紀か?	焼き歪みが著しい。回転ヘラケズリのちヨコナデ調整がされている。	201-6点
99-2	57	須惠器	長頭壺(口頭部)	復元14.0	2.7	-	密 φ1mm以下の長石が中量見られる。	良好	内)N5/0灰色~10Y5/1灰白色 断)N5/0灰色~N4/0灰色 外)輪10Y4/2オーリーブ灰色(光沢あり)	口縁部 約1/10	Aトレンチ	溝201 X=28.659 Y=10.673 H-T.P +79.784	7世紀前半	自然釉が外側全体と口縁端部の一部に付着している。	126-1点
99-3	卷頭15 図版37 15 37	土師器	甕(小型)	14.6	12.8	頸部径12.6	密 φ1mm以下の長石や石英、黒色粒砂が散見される。	良	内)7.5YR8/4浅黃橙色~10YR8/3浅黃 橙色 断)10YR8/3浅黃橙色 外)7.5YR8/4浅黃橙色~10YR8/4浅黃 橙色(部分に2.5YR4/4にぶい赤褐色)	完存	Aトレンチ	溝201 (周溝)	7世紀か?	外面に焼成時の黒斑あり(径3cm)。外面と内面の口頭部について、ハケ目調整がされている。外面は底部から、体部にかけて向きをかえハケ目調整を施していく。口縁部を上にした状態である。第99回-1の完存の須惠器(平瓶)と並列かつ近接位置から出土している。	202-24点
100-1	57	須惠器	甕(口縁部・頸部)	37.6	4.8	-	密 φ1mm以下の長石と黒色粒砂が少量見られる。直徑2mmの大長石も若干見られる。	やや不良	内)N6/0灰色~5YR5/1楕灰色 断)10R5/2赤色~2.5YR4/2赤色 外)N5/0灰色 輪10Y2/1緑黑色	口縁部 約1/15	Aトレンチ	攪乱坑	7世紀	口縁部と口頭部に自然釉が付く。外面の一部が摩滅している。内・外面ともに回転ナデがしっかりして施されている。	20-1点
100-2	59	土師器	皿	復元22.8	4.2	-	密 φ1mm以下の長石や石英、赤褐色粒砂が中量見られる。	良	内)5YR6/8橙色~2.5YR5/6明赤褐色 断)5YR5/6明赤褐色 外)5YR6/6橙色	口縁部 約1/10	Aトレンチ	旧表土面 (土器溜りAと同一面)	7世紀前半	内・外面ともに摩滅が著しいので、調整技法が分からない。	19-2点

101-1	35	須恵器	壺 (体部下半)	体部 最大 58.0	33.0	-	密 $\phi 1\text{mm}$ 以下の長石や石英、黒色粒砂が中量みられる。	良	内)N6/0~N5/0灰色 断)N5/0灰色~N3/0暗灰色 外)N4/0灰色~N3/0暗灰色	体部 約1/4	Aトレンチ (第1次10c. の北側盤付 近)	撲乱坑	7世紀	外面に平行タキ痕あり。体部中位にヨコ方向、下位にタネないしや右へ傾斜のちヨコ方向のカキ目調整。必ずしも整然とした平行カキ目ではなく、あわせて左上→右下、右上→左下の斜め方向のハゲ目次の調整もみられる。	5-26点 20-22点
102-1	63	須恵器	壺蓋 (天井部)	残存 最大 13.0	1.7	-	密 $\phi 1\text{mm}$ 以下の長石や黑色粒砂などが中量見られる。	良	内)N6/0灰色~2.5Y6/1オリーブ灰色 断)N6/0灰色~N5/0灰色 外)N6/0灰色~5B5/1青灰色	小片 (全体 約 1/16 くらい)	壇丘 北側 壇丘築成土 外の盛土	X=19.570 Y=-0.581	7世紀	外面に何か工具などで削られた部分が見られる。天井部の境、比較的明瞭。	121-1点
102-2	60	須恵器	壺蓋 (口縁部)	復元 11.2	1.7	-	密 $\phi 1\text{mm}$ 以下の長石や石英が中量みられる。	良	内)N7/0灰白色~N6/0灰色 断)N6/0灰色~N5/0灰色 外)N6/0灰色~5B5/1青灰色	口縁部 約1/24	壇丘 北側 壇丘築成土 外の盛土	X=19.570 Y=-0.581	7世紀 初頭~前半	弱い凹線が1条見られる。口縁部のナデが丁寧に施されている。	121-1点
102-3	56	須恵器	壺身	8.9	3.9	-	密~精緻 $\phi 1\text{mm}$ 以下の長石が極少量見られる。	良	内)N7/0灰白色~N6/0灰色 断)N7/0灰白色 外)N6/0灰色~N5/0灰色	口縁部 約5/6	壇堆 SSK-2-018 美道部 西側2列目	石垣裏込め	7世紀	底部は、回転ヘラ切りを加えながらヘラ起こしを行っている。	96-1点 163-5点
102-4	56	須恵器	壺身	9.0	4.1	-	密~精緻 $\phi 1\text{mm}$ 以下の長石や黑色粒砂が極少量見られる。	良好	内)N6/0灰白色~7.5Y6/1灰色 断)N7/0灰白色 外)N7/0灰白色~N6/0灰色	口縁部 約1/2	美道部 西側2列目	石垣裏込め	7世紀	底部は、回転ヘラ切りを加えながらヘラ起こしを行っている。器径に比べ、全体的に厚味がある。口縁部に外傾傾斜を持つ丁寧なヨコナデ調整面が加わる。	96-6点
102-5	55	須恵器	長頸壺 (頸部)	残存 最大 8.2	8.7	-	密~やや粗い $\phi 1\text{mm}$ 以下の長石や石英、黒色粒砂が多く見られる。	不良	内)N6/0灰色~N7/0灰白色 釉)2.5GY5/1オリーブ灰色(光沢有り) 断)I1N4/0灰色?7.5Y4/1暗赤灰色 外)N6/0灰色	頭部 約2/3	壇丘 北側 壇丘築成土 と盛土の境	壇丘北 西部表土	7世紀	上部には条の弱い凹線が見られる。焼成温度が低かったのか、断面がサンゴイチヂチ状になら焼けしている。内面に直状工具による調整痕がある。内面に自然釉がまばらに残っている。口縁部は外反するタイプである。	111-3点 122-1点 未註記-1点
102-6	61	須恵器	壺(小型)	13.2	推定 残存高 20.0cm	-	密 $\phi 1\text{mm}$ 以下の長石が少量見られる。	良	口縁~頭部 内)2.5Y5/1黄灰色~5Y5/1灰色 断)N6/0灰色~N5/0灰色 外)5GY3/1暗オリーブ灰色 体部 内)7.5Y4/1灰白色~5Y5/1灰色 断)5Y6/1灰色 外)N6/0灰色~N5/0灰色 釉)2.5GY4/1暗オリーブ灰色	口縁部 約1/4 体部 約1/6	美道部 西側2列目	石垣裏込め	7世紀 前半	内・外面ともに自然釉が濃厚に付く。外間に焼成時の降灰の影響で約1~2mm大の付着物が散見される。内面にタキ目が見られる。接合は出来ないが、同一個体と思われる破片が2つある(取り上げNo161)。体部外面上にはタタキの後に丁寧にハケ(7~8本/cm)が施されている。	96-1点
102-7	61	須恵器	器台 (脚台裾部)	-	5.5	推定 脚部径 22.4	密 $\phi 1\text{mm}$ 以下の長石や石英や黑色粒砂が少量見られる。	良好	内)N6/0灰色 断)N6/0灰色~5B5/1青灰色 外)N6/0灰色~N5/0灰色	脚端部 約1/10	壇丘 北側 盛土内	X=22.468 Y=-1.051 H=80.186	7世紀	脚端部近くに斜めに箤先別点文が見られるが、擦過で薄くなっている。	99-1点
102-8	56	弥生 生活 器	広口壺 (口縁部)	復元 22.0	1.8	-	やや粗い~密 $\phi 2\sim 1\text{mm}$ 以下の長石や石英、角閃石、黒雲母が散見される。角閃石の入り方は均質で、大きさも等均質である(1mm未満)。生駒西麓産の胎土。	やや不良	内)10YR7/3にぶい黃橙色~10YR5/3に ぶい黃褐色 断)7.5YR4/4褐色~10YR6/1褐色 外)7.5YR5/4にぶい褐色~7.5YR6/3に ぶい褐色 釉)2.5GY2/1黒色(黑斑の要素を持つ)	口縁部 約1/10	壇丘 第6トレンチ 表土層	弥生 時代 (後期 前半)	全体が摩滅しているので、調整や文様などが分からず。頭部には文様があるかも知れないが、口縁部は無文。中河内地域からの搬入品。河内V-1様式。	142-1点	
103-1	61	須恵器	短頸壺蓋 かぶ蓋	復元 11.2	2.8	-	密 $\phi 1\text{mm}$ 以下の長石や石英、黒色粒砂が中量見られる。	良	内)N6/0灰色~N5/0灰色 断)N6/0灰色 外)N6/0灰色~N4/0灰色(外面は淡灰黒色)	口縁部 約1/10	石室 床面	X=11.757 Y=-0.664 H=T.P +77.406	7世紀	内面の口縁に水仕上げ痕が見られる。内・外面ともに丁寧なナデが施されている。天井局部付近で少くらしている。	255-1点
103-2	61	須恵器	壺身	復元 11.2	2.5	-	密~堅緻 $\phi 1\text{mm}$ 以下の長石や石英、黒色粒砂が少量見られる。	良	内)7.5Y6/1灰色(摩滅している所) 断)N4/0灰色 外)2.5YR4/2赤灰色 内)N4/0灰色~N5/0灰色 外)N4/0灰色~N5/0灰色	小片	石室内 竜山石上面	7世紀	焼成時の温度が低かったのか、断面色調が暗紫色を呈し、サンディッチ状になっている。内面開口の底部より約1/3部分が、降灰による変色がある。	196-1点	
103-3	61	須恵器	無蓋高杯 (口縁部)	復元 11.4	1.9	-	密 $\phi 1\text{mm}$ 以下の長石や石英、黒粒砂が少量見られる。	堅緻	内)N5/0灰色 断)N6/0灰色~N5/0灰色 外)N5/0灰色	小片	石室 玄室部 胴木部分 埋土	7世紀	破片が小さいので、口径は推定である。内・外面ともに丁寧なナデが施されている。	283-1点	
103-4	61	須恵器	壺身か 無蓋高杯 杯部	復元 10.8	2.0	-	密 $\phi 1\text{mm}$ 以下の長石や石英が少量見られる。	良	内)N6/0灰白色~5Y6/1灰白色 断)N6/0灰色~N5/0灰色 外)N7/0灰白色~N8/0灰白色	小片	石室 玄室部 胴木部分 埋土	7世紀	破片が小さいため、口径は推定である。外面は若干摩滅しているが、内面ともに丁寧なナデが施されている。重要な遺構(祭祀初期)の遺物なので、上限年代を考慮し得る資料。	283-1点	
103-5	56	須恵器	有蓋高杯-蓋	15.2	5.3	高さ0.5 径2.6 最大径か らの高さ 0.2 くびれ部 0.2	密~精緻 $\phi 1\text{mm}$ 以下の長石や石英が中量見られる。基質は、細緻から成る。	良好	68 内)N6/0灰色~N7/0灰白色 断)N7/0灰白色~N8/0灰白色 外)N7/0灰白色~N8/0灰白色	口縁部 約1/36 天井部 約1/3	石室 美道部 (右端)	X=6.072 Y=3.727 H=76.088 竜山石より 上の腐植土	7世紀	出土地点が違うので、表面の色に違いが見られる。肩部付近に弱い凹線が2条見られる。197は、天井部が上向きの状態で出土している。	68-1点 197-2点
103-6	56	須恵器	有蓋高杯-蓋	体部 最大径 8.4	2.0	高さ1.0 径2.1 最大径か らの高さ 0.3 くびれ部 1.8	密 $\phi 1\text{mm}$ 以下の長石や黑色粒砂が少量見られる。	良好	内)N5/0灰色 断)N5/0灰色~N6/0灰色 外)N5/0灰色~N6/0灰色	天井部 中央の みツマ ミ完存	石室 竜山石 敷布範囲外 (東区)	7世紀	天井部粘土紐巻き上げ痕のスタート痕跡が認められる。ツマミ部が上の状態で出土。ロクロ回転、右。	199-1点	
103-7	61	須恵器	高杯 (脚縁部)	-	0.8	復元 脚縁径 10.2	密 $\phi 1\text{mm}$ 以下の長石が極少量見られる。	良好	内)N6/0灰色~N5/0灰色 断)12.5YR4/2赤灰色 外)N4/0灰色~N5/0灰色 外)N4/0灰色	縫部 約1/14	石室 内 右石際	7世紀	焼成時の温度が低かったのか、断面がサンドイッチ状になっている。灰紫色のコアをしっかり残している。ロクロ回転、左。	203-1点	
104-1	41	須恵器	壺蓋	9.4	2.7	高さ0.7 径1.6 最大径か らの高さ 0.6 くびれ部 1.0	精緻 $\phi 1\text{mm}$ 以下の長石が少量みられる。微砂を全体に含む。	良好	内)7.5Y7/1灰白色~N7/0灰白色 断)-外)10YR3/2オリーブ黒色~10Y4/2 オリーブ色 薄釉)7.5Y6/1灰白色~10Y7/1灰白色	完存	壇丘	南西 テラス面	7世紀 前半~中頃	ツマミ部を上に向けた状態で出土。ツマミ部が上の状態で出土。焼成前に他の須恵器が重ねられていたのか、付着物が付いている。杯G。	264-1点
104-2	41	須恵器	壺蓋	9.6	3.5	高さ1.2 径1.4 最大径か らの高さ 0.8 くびれ部 1.3	精緻 $\phi 1\text{mm}$ 以下の長石や黑色粒砂が極少量みられる。	良好	内)5Y7/1灰白色~N7/0灰白色 断)N7/0灰白色 外)N7/0灰白色~N6/0灰色 釉)7.5Y4/3暗オリーブ色 薄釉)7.5Y6/1灰白色~10Y7/1灰白色	口縁部 約2/3 ツマ ミ部完存	壇丘	南西 テラス面	7世紀 前半~中頃	口縁部を上に向けた状態で出土。天井部外縁半分程度に自然釉が付いている。口縁部(推定径10.4cm)の一部が付着している。内面のナデは特に丁寧に施されている。杯G。	220-1点
104-3	41	須恵器	壺蓋	9.6	3.3	高さ1.3 径1.4 最大径か らの高さ 0.8 くびれ部 1.1	精緻 $\phi 1\text{mm}$ 以下の長石や黑色粒砂が少量みられる。	良好	内)N7/0灰白色~N6/0灰色 断)N6/0灰色 外)N3/0暗灰色 釉)7.5Y4/3暗オリーブ色 薄釉)10Y7/1灰白色	完存	壇丘	南西 テラス面	7世紀 前半~中頃	天地逆転状態で出土。外縁全体に釉薬が付着する。小さな(1cm以下)の付着物が4ヶ所に付く。杯G。	209-1点
104-4	41	須恵器	壺蓋	6.4	3.3	高さ1.0 径1.0 最大径か らの高さ 0.6 くびれ部 1.6	密~精緻 $\phi 1\text{mm}$ 以下の長石が少量みられる。	良好	内)N7/0灰白色~N6/0灰色 断)N6/0灰色 外)10Y6/1灰白色~N6/0灰色	口縁部 約7/8 (ほぼ 完存)	壇丘	南西 テラス面	7世紀 中頃	ツマミ接合後の外縁側の接続部はナデがあまり丁寧に行われていないでこぼこしている。内面を上にした状態で出土。端部に意識的な打ち欠きが認められる。ヘラ削り後のナデは、ヘラ先でナデられていると思われる。杯G。	212-1点
104-5	55	須恵器	壺蓋	9.6	2.5	-	密~精緻 $\phi 1\text{mm}$ 以下の長石が少量みられる。	良好	内)N7/0灰白色~10Y7/1灰白色 断)10Y6/1灰白色~N6/0灰色 外)N7/0灰白色~N6/0灰色	口縁部 約1/3	壇丘	南西 テラス面	7世紀 前半~中頃	口縁部と受部口縁は、丁寧にナデが施されている。内面を上に向けた状態で出土。杯G。	263-1点

確
認
調
査
結
果
の
概
要

104-6	41	須惠器	坏蓋	6.4	2.7	器径8.4 高さ1.0 径1.0 最大径か らの高さ 0.4 くびれ部径 1.2	精緻 φ1mm以下の長石が少量見 られる。	良好	内)N7/0灰白色～N6/0灰色(端部のみ N5/0灰色) 断)N7/0灰白色 外)N6/0灰色～5B6/1青灰色	口縁部 約4/5 (一部 に欠あ るも はば完 存)	墳丘	南西 テラス面	7世紀 中頃	外面の一部に降灰による希薄な自然釉 が見られる。ツマミ部が歪んでいる。ロ クロ回転、右。杯G。	218'-1点
104-7	41	須惠器	坏蓋	7.6	2.6	器径9.2 高さ1.1 径1.5 最大径か らの高さ 0.6 くびれ部径 1.4	密～精緻 φ1mm以下の長石が少量見 られる。(内部にφ3mmの大 の長石が1点見られる。)	良好	内)N6/0灰色 断)N5/0灰色 外)N6/0灰色～N7/0灰白色 軸)7.5Y3/2オリーブ黒色	はば 完存 (ツマ ミ一部 欠損)	墳丘	南西 テラス面	7世紀 中頃	天井部に焼成時に重ね焼きをしたのか 付着物が数点見られる。受部にうっすら と重ね焼き(径8.2cmの口縁か)が見ら れるので、下に坏石を伴っていた可能性 がある。少し斜めにかぶさっている痕跡 がある。ツマミ部を上にした状態で出土 している。ツマミ部の左右に歪みがみら れ、一部欠損している。左右に軸ののかか り方に違いが見られる。半面はべったり としているが、もう半面は斑点状であ る。杯G。	213-1点
104-8	41	須惠器	坏蓋	10	3.5	高さ0.8 径1.2 最大径か らの高さ 0.6 くびれ部径 1.0	密 φ1～2mm大の長石や黒色粒 砂が散見される。	良好	内)N7/0灰白色～N6/0灰色 断)N7/0灰白色 外)N7/0灰白色	口縁部 約6/7 (ツマ ミ部 完存)	墳丘	南西 テラス面	7世紀 中頃	ツマミ部が中心軸よりほんの少し左に ずれている。内部のナデは丁寧に施されて いる。外面は強い押圧気味のヨコナテ 調整が入る(幅8mm～9mm)。ロクロ回転、 右。杯G。	258-2点 232-3点
104-9	41	須惠器	ツマミ付き蓋 (長頸蓋か子持蓋台の検討要)	6.0	2.2	器径8.4 高さ0.9 径1.0 最大径か らの高さ 0.6 くびれ部径 1.0	密～やや粗い φ1～3mm大の長石や黒色粒 砂が中量見られる。	良好	内)N7/0灰白色 断)N4/0灰色～10YR4/1褐色 外)N7/0灰白色～N6/0灰色 軸)2.5GY3/1暗オリーブ灰色	はば 完存 (口縁 部約 9/10)	墳丘	南西 テラス面	7世紀	口縁部付近の天井部に他の工器の口縁 2ヶ所(円弧を描く、推定径9.2cm・推定径 8.8cm)が付着している。受部内面にモ 坏身(径7.2cm)のような重ね焼き痕跡が うっすら見られる。全体的に釉がべたり と付着しているので、調整がはっきり と観察出来ない。出している他の工器G の宝瓶ツマミとは形態・大きさともに異 なる。器端に欠きを入れる土器割りの特徴 が認められる。	210-1点
104-10	60	須惠器	坏蓋	10.2	1.9	-	密～精緻 φ1mm以下～1mm大の長石が 中量見られる。	良	内)N7/0灰白色～2.5GY6/1オリーブ灰 色 断)N7/0灰白色 外)N6/0灰色～N5/0灰色	口縁部 約1/6	墳丘	南西 テラス面 浮いた土器 群	7世紀 前半	受部のカエリがしっかりと屈曲してい る。杯G。	282-1点
104-11	41	須惠器	坏蓋	推定 口径 9.6	2.2	-	密～精緻 φ1mm以下の大長石が中量見 られる。	やや不良	内)N6/0灰色～5B5/1青灰色 断)5P3/1暗紫色 外)N5/0灰色 軸)2.5GY3/1暗オリーブ灰色	口縁部 約1/2 近く	墳丘	南西 テラス面	7世紀 中頃	自然釉が外壁全体に飛散するようにな かっているので、調整が分かり難い。内 面のカエリ周辺のナデは丁寧である。 杯G。	218-1点
104-12	41	須惠器	坏蓋	7.4	2.4	推定径 10.2	精緻 φ1mm以下の長石が若干見 られる。	良好	内)N7/0灰白色～5B6/1青灰色 断)N7/0灰白色 外)N6/0灰色～N5/0灰色	口縁部 約1/3	墳丘	南西 テラス面	7世紀	内側を上に向むた高环の蓋の中に、坏蓋 は口縁部を下に向むた状態で出土した。 ツマミ部は欠損しているが、ツマミ部の 付く可能性はある。	218'-1点
104-13	51	須惠器	坏身	8.6	4	-	精緻 φ1mm以下の長石が若干み られる。	良好	内)7.5Y7/1灰白色～N7/0灰白色 断)7.5Y7/1灰白色～7.5Y6/1灰色	完存	墳丘	南西 テラス面	7世紀 前半 中頃	环の底部はヘラ切りのみで、底部はヘラ 削り未調整。	263-1点
104-14	55	須惠器	坏身	推定 口径 9.2	3.6	-	密～やや粗い φ1mm以下の長石や黒色粒 砂が中量見られる。約5mmの 岩片(堆積岩片)が1点見ら れる。	良好	内)N6/0灰色～N7/0灰白色 断)N7/0灰白色 外)N6/0灰色～2.5GY6/1オリーブ灰色	口縁部 約1/8 (体部 1/4程度)	墳丘	南西部 テラス面	7世紀 前半	底部はヘラ削り未調整。ヘラ切り片の残 存物が付着。作業台のようなどろいで一 部乾燥させている可能性がある。内・外 面ともに、丁寧にナデが施されている。 口縁部を下にした状態で出土。	218'-1点
104-15	51	須惠器	坏身	9.2	3.8	-	やや粗い～密 φ1～2mm大の長石や黒色粒 砂が多く見られる。	良好	内)N6/0灰色～N7/0灰白色 断)N7/0灰白色～N6/0灰色 外)N5/0灰色～5B5/1青灰色	口縁部 約3/4	墳丘	南西 テラス面 浮いた土器 群	7世紀	底部はヘラ削り未調整の部分と、ヘラ切 りのち丁寧なナデが施されている部分 がある。内面は丁寧なナデが施されている 。口縁部を上に向むた状態で出土。	249-1点 282-1点
104-16	51	須惠器	坏身	9.6	4.0	-	密 φ1mm以下の長石や黒色粒 砂が多く見られる。	悪い	内)2.5Y8/2灰白色～2.5Y7/2灰黄色 断)10Y6/1灰色 外)2.5GY6/1オリーブ灰色～2.5Y8/2 灰白色	はば 完存 (口縁 部一部 欠けで いる)	墳丘	南西 テラス面 浮いた土器 群	7世紀 頃	会体的に磨滅している。底部から体部に かけて一部他より還元炎焼成を受けている。 底部ヘラ起こし未調整。器表は、ローリ ングを受けて粉っぽい。軟質焼成となっ ている。	222-16点 282-4点
104-17	55	須惠器	坏身	推定 口径 10.0	4.1	-	密～精緻 φ1mm以下の長石が中量見 られる。	良	内)N6/0灰色～2.5GY6/1オリーブ灰色 断)N5/0灰色 外)N6/0灰色～N5/0灰色	口縁部 約1/4 (体部 約1/4)	墳丘	南西 テラス面	7世紀	底面はあまり丁寧にナデが施されてい ない。内・外面は、丁寧にナデが施されてい ない。	218-4点 248-1点
104-18	63	須惠器	坏身	残存 最大 11.8	2.1	-	密 φ1mm以下の長石や石英、黑 色粒砂が散見される。	やや不良	内)N7/0灰白色～N6/0灰色 断)N5/0灰色 外)N7/0灰白色～N6/0灰色 外)N5/0灰色	小片	墳丘	南西 テラス面	7世紀	重ね焼きされたのか、外面にはつきりと 色の違いがある。断面がグンドイッチ状 になっている。ロクロ回転、右。	269-1点
104-19	卷頭 14 図版 42-43	須惠器	深坏	7.0	5.1	-	密～やや粗い φ1～2mm大の長石が多く見 られる。	やや不良	内)N7/0灰白色～N6/0灰色 断)N6/0灰色 外)N6/0灰色～N5/0灰色	口縁部 約3/4 (体部 約3/4)	墳丘	南西 テラス面	7世紀	内面に胎土中の空気が膨らんで、盛り上 がっている部分を大小合わせて箇所に 見られる。外・内両面で特に外側では胎状 縮み方向に幅2mm前後で局所的に自然釉 が見られる。内面は、外面ラインと同じよ うな所に斑点状の釉が付く。底部ヘラ削 りのち未調整。	231-3点 164-1点
104-20	卷頭 14 図版 42-43	須惠器	深坏	7.2	5.8	-	密～やや粗い φ1～2mm大の長石や黒色粒 砂が中量見られる。	やや不良	内)N7/0灰白色～N6/0灰色 断)N6/0灰色 外)N6/0灰色～N5/0灰色 軸)2.5GY3/1暗オリーブ灰色	口縁部 約3/4 (体部 約3/4)	墳丘 填土 SSK-2-018	南西 テラス面	7世紀	内・外面とも焼成時に胎土中の気泡が膨 らんだ出っ張り数ヶ所見られる。底部 にφ1mmの小石が数個、蒸内でやさしく している。焼成時の温度が低かったのか、 断面がいわゆるグンドイッチ状になっている。 外面の自然釉幅3～4cmで縱方向に 向かって断面が剥離出来る。底部ヘラ削り のち未調整。口縁部に粘土溜りがみられ る。	238-5点 239-2点 174-1点 96-1点
104-21	卷頭 14 図版 42-43	須惠器	深坏	8.2	5.2	-	やや粗い φ1～2mm大の長石や石英が 中量見られる。	良好	内)N7/0灰白色～N6/0灰色 断)N6/0灰色 外)N7/0灰白色～7.5Y7/1灰白色 軸)7.5Y3/2オリーブ黒色～7.5Y4/3暗 オリーブ色	口縁部 約3/4	墳丘	南西 テラス面	7世紀	自然釉が外面に帯状に2ヶ所、縱方向に 付く。底面底面周縁に1～2ヶ所焼き支 えのような付着痕が見られる。他の2点 (104図19-104図20)に比べてが薄く、 外反度が最も強。	229-4点
104-22	卷頭 14 図版 42-43	須惠器	短頭 小型壺	6.6	7.1	頭径5.0 底径4.4 体部 最大径 8.9	密 φ1mm～1.5mm大の長石や黒色 粒砂が中量見られる。	良好	内)N7/0灰白色～N6/0灰色 断)N7/0灰白色 外)N6/0灰色～N5/0灰色	数片の 欠けを はば 完存。	墳丘	南西 テラス面	7世紀	底部はヘラ削り未調整。体部に凹線1条 がしっかり施されている。体部は算盤形 をしていて、落石による衝撃か、割れは 鋭利である。ロクロ回転、左。	282-5点 248-13点
104-23	卷頭 14 図版 42-43	須惠器	短頭 小型壺	6.6	6.8	頭径5.0 底径4.8 体部 最大径 8.8	密 φ1～1.5mm大の長石や黒色 粒砂が中量見られる。	良好	内)N7/0灰白色～N6/0灰色 断)N7/0灰白色 外)N6/0灰色～N7/0灰白色	口縁部 約3/4 (体部 約3/4)	墳丘	南西 テラス面 浮いた土器 群	7世紀	外面に凹線が1条見られる。破断面は鏡 利。底部はヘラ削り未調整。口縁部が下 になった状態で出土。内面部は板目によ る擦過調整のちヨコナテ調整が施されて いる。ロクロ回転、左。	211-11点 282-3点
104-24	卷頭 14 図版 42-43	須惠器	短頭 小型壺	6.7	6.8	體部 最大径 8.3	密 φ1～2mm大の長石が少量見 られる。	良好	内)N7/0灰白色～N6/0灰色 断)N6/0灰色～N7/0灰白色 外)N6/0灰色～5B7/1明青灰色	口縁部 約1/3 (体部 はば 完存)	墳丘	南西 テラス面	7世紀	水平面に置いた時、安定が悪い。外面凹 線が1条見られる。ロクロ回転、左。	216-1点 248-8点 282-4点
104-25	51	須惠器	有蓋高坏 (蓋)	16.4	5.7	-	密 φ1mm以下の長石が少量見 られる。	良	内)N7/0灰白色～7.5Y7/1灰白色 断)N7/0灰白色 外)N7/0灰白色～N6/0灰色	完存	墳丘	南西 テラス面	7世紀 初期	ツマミ部が中心軸よりどちらかに付 いている。天井部の後をあらわす、凹鏡は 形変化する。ヘラ削りのちナデは弱く、 ヘラ削りの残存が確認出来る程度である。 ツマミ部を上にした状態で出土。	218-3点
104-26	51	須惠器	有蓋高坏 (坏部)	復元 12.6	8.7 (柱脚 を含む)	-	やや粗い～密 φ1mm以下～2mm大の長石や 黒色粒砂を中量含んでい る。一部内面に3mm以上の石 英粒包含。	良	内)N7/0灰白色～7.5Y7/1灰白色 断)N7/0灰白色 外)N7/0灰白色～N6/0灰色	口縁部 約1/3 (柱脚 部 約1/6)	墳丘	南西 テラス面 美濃道 西側2列目 石垣裏込め 最下位	7世紀 前半～ 中頃	環部と底部は同一個体と考えられるが、 接点が見つかないので高さは不明で ある。脚柱部に2条の凹線がある。脚柱の 内側にシボリ目が取られる。脚柱に2方 透かしが施されている可能性も考え られる。	270-5点 282-5点

104-27	55	須恵器	高杯 (脚部)	-	2.2	裾部推定 11.6	密 φ1mm以下の長石や石英、黒色粒砂が少量見られる。	良好	内)N6/0灰色～N5/0灰色(心持ち青灰味を帯びる) 断)N7/0灰白色～N6/0灰色 外)N6/0灰色～N7/0灰白色	脚縁部 約1/4	埴丘	南西 テラス面	7世紀 中頃	裾部の一部が「く」の字状に内側に曲がって歪んでいる。	232-1点	
104-28	55	須恵器	高杯 (脚部)	-	1.7	裾部径 11.6	密～精緻 φ1mm以下の長石や黒色粒砂が少量見られる。	良	内)N6/0灰色～N5/0灰色 断)N7/0灰白色～N6/0灰色 外)N5/0灰色～N6/0灰色	脚縁部 約1/2	埴丘	南西 テラス面 浮いた土器群	7世紀 中頃	全体的に回転ナデがしっかりと施されている。	215-1点 225-3点 282-1点	
104-29	51	須恵器	高杯 (脚部)	-	1.2	脚部幅径 13.0	やや粗い～密 φ1mm以下～2mm大の長石や黒色粒砂が中量含んでる。一部内面に3mm以上の石英粒包含。	良	内)N6/0灰色～N5/0灰色 断)N7/0灰白色～N6/0灰色 外)N6/0灰色～N7/0灰白色	脚縁部 約1/3	埴丘	南西 テラス面 浮いた土器群 西側2月 石垣裏込め 最下位	7世紀 前半～中頃	回転ナデがしっかりと施されている。	96-1点 270-3点	
104-30	60	須恵器	平瓶 (口縁部)	推定	6.2	1.8	密 φ1mm以下の長石や石英などが中量見られる。	良	内)N6/0灰色～10Y6/1灰褐色 断)N6/0灰色～N7/0灰白色 外)N7/0灰白色～N6/0灰色	口縁部 約1/4	埴丘	南西 テラス面 浮いた土器群	7世紀 前半	内・外ともに回転ナデがされている。	282-1点	
104-31	60	須恵器	短頸壺 か小壺	推定	7.4	1.5	密～精緻 φ1mm以下の長石が僅かに見られる。	良	内)N7/0灰白色～N6/0灰色 断)N6/0灰色 外)N6/0灰色～N5/0灰色	口縁部 約1/4	埴丘	南西 テラス面	7世紀 前半	口縁部の径や胎土が104図24と酷似しているので、同一個体の可能性もある。内外面ともにナデが丁寧に施されている。	248-1点	
104-32	60	須恵器	平瓶などの 切り抜き部	縦2.8 横2.7	-	厚さ0.8	密 φ1mm以下の長石が極少量見られる。	良	内)N6/0灰色～N5/0灰色 断)N5/0灰色～N6/0灰色 外)N4/0灰色～N3/0暗灰色	ほぼ 完存	埴丘	南西 テラス面	7世紀 前半	一度切り抜いた場所をふさいでその後、ナデを行ったあとに、外面から管状の道具を使つくり抜いたもの。外面に自然輪が斑点のように少しだけ付いている。	206-1点	
104-33	47	須恵器	平瓶	4.6	12.2	体部 最大径 12.1	密 φ1mm以下の長石や肌色粒砂が中量見られる。	良	内)N4/0灰色～N5/0灰色 断)N5/0灰色～N6/0灰色 外)N4/0灰色～N3/0暗灰色	口縁部 約1/2 体部 完存	埴丘	南西 テラス面	7世紀	体部にカキ目を施した後に、口頭部を接合している。底部・体部中程までは、へら削り調整のちナデが丁寧に施されている。カキ目(17本/cm)。	214-1点 259-1点 270-1点	
104-34	45	須恵器	平瓶	6.4	15.2	体部 最大径 16.8	やや粗い～密 φ1mm以下～2mm大の長石や赤紫色粒砂が中量見られる。	良好	内)N6/0灰色～5PB5/1青灰色 断)10YR5/1褐灰色～5Y5/1灰褐色 外)N6/0灰色～5B5/1青灰色 釉)10GY3/1暗緑色(光沢が有る)体部 肩以上が中心	ほぼ 完存	埴丘	南西 テラス面	7世紀	頭部～口縁部は、体部を切り抜いた後に接合されている。体部外面に焼成時の重ね焼きで付いたと思われる土器の土縁部らしき跡が付いている。底部から体部にかけて、上斜め方向にへら削りケナデなどの線が入っている。体部外面は、あまり丁寧にナデされていない。頭部の歪みが大きい。底部に指紋が見られる。頭部を接続する際に、体部の取り扱い痕が内面にはっきりと残っており、ナデ調整ではない。	224-17点 227-2点 282-6点 269-1点	
104-35	47	須恵器	平瓶	推定	6.4	16.0	頭部 最小径 4.2 体部 最大径 15.4	密～精緻 φ1～1.5mm大の長石や赤紫色粒砂が中量見られる。	やや不良	内)N7/0灰白色～N6/0灰色 断)10YR6/1褐灰色～10YR5/1褐灰色 外)N5/0灰色～N6/0灰色 釉)2.5GY3/1暗オリーブ灰色	体部 完存 口縁部 欠損	SSK-2-018 埴 埴丘	南西 テラス面 浮いた土器群	7世紀	焼成時素地土中の空気が膨らんだ所が多く見られ、底部は安定がない。体部に重ね焼きをしたのか、他の須恵器口縁部片や破片に4点付着している。ロクロ回転、右。	167-1点 266-1点 282-1点
104-36	43	須恵器	脚付き長頸壺 (脚部3方透かし孔)	7.2	23.0	体部 最大径 17.6 低部径 8.4	密 φ1mm以下～2mm大の長石が散見される。	良好	内)N4/0灰色～N5/0灰色 断)N6/0灰色 外)N6/0灰色～N7/0灰白色	口縁部 約1/8 体部～ 脚部 完存	埴丘	南西 テラス面 浮いた土器群	7世紀 中頃	体部に2ヶ所の凹窓が巡らされている。脚部透かし孔は、外から内へ向けてくり抜かれている。体部の裏味は完形なので計測出来ず。脚部3方透かし孔に重みが見られる。ロクロ回転、右。頭部の内外面にシボリ目が見られる。	248-3点 282-1点 205-1点	
104-37	46	須恵器	短頸壺	9.8	14.8	頭部径 8.2～10 体部 最大径 16.4	やや粗い～密 φ1mm以下の長石や黒色粒砂が中量みられる。	良	内)N6/0灰色～N7/0灰白色 断)7.5Y4/1灰褐色～7.5YR4/1褐灰色 外)N6/0灰色～N5/0灰色 釉)10Y3/2オーリーブ黑色～2.5GY3/1暗 オーリーブ灰色	口頭部 約1/3 体部 完存	埴丘	南西 テラス面 浮いた土器群	7世紀 前半	底部は手括り～ヘラケズリやラフナデで、不整なナデだけで、粗放なつくり。体部や口縁部・内面は丁寧にナデが施されている。体部に空気泡が膨張しているところが、數ヵ所ある。自然輪がべったりと付着している所とあまり付着していない所がある。	282-3点 215-1点	
104-38	44	須恵器	恩	10.6	13.3	頭部 最小径 2.3 体部 最大径 9.6	やや粗い～密 φ1～2mm大の長石や肌色の粒砂が散見される。さらに大きな鉱物粒も少量見られる。	やや不良	内)N6/0灰色(部分的にN4/0灰色) 断)5Y4/1褐灰色 外)N5/0灰色	口縁部 約2/3 体部か ら頭部 完存	埴丘	南西 テラス面 浮いた土器群	7世紀 後半	体部に2ヶ所の凹窓が巡らされている。頭部透かし孔は、外から内へ向けてくり抜かれている。体部の裏味は完形なので計測出来ず。脚部3方透かし孔に重みが見られる。ロクロ回転、右。頭部の内外面にシボリ目が見られる。	282-2点 226-5点	
104-40			円孔 切り抜き部	直径 1.4 (外側) 1.3 (内面)	-	厚み0.8		良好	内)N7/0灰白色～N6/0灰色 断)- 外)N6/0灰色～7.Y6/1灰褐色	完存	埴丘	南西 テラス面 浮いた土器群	7世紀 前半	同一個体として取り上げられていたが、中から出されたかどうかは不明である。そのため、別個体の切り抜き部の可能性もある。切り抜き部外間に竹管空洞部の痕が突出している。	207-1点	
104-39	44	須恵器	恩	-	11.4	頭部 最小径 2.8 体部 最大径 8.6 底部4.8	密 φ1～2mm大の長石や石英が 中量みられる。(体部にφ2 mm大の長石がみられる。)	良好	内)N6/0灰色～N8/0灰白色 断)N8/0灰白色 外)N7/0灰白色～N6/0灰色	体部 ほぼ 完存	埴丘	南西 テラス面	7世紀 前半	底部が斜めにこぼれているので、傾いた状態で立つ。上部へ開いている口縁部は焼け込みで、椭円形になっている。残存長は、前後7.7cm左右6.0cm。孔が斜め上を向いた状態で出土している。	208-1点	
104-41			円孔 切り抜き部	直径 1.5	-	厚み7.0		良好	内)N7/0灰白色～N7/0灰白色 断)N7/0灰白色 外)N7/0灰白色～N6/0灰色	復元 完存	埴丘	南西 テラス面	7世紀 前半	切り抜き部が器の中から出てきたので、切り抜かれた時に恩の中に入ったまま焼かれたと多かられ、切り抜き部よりも小さくなっている。外間にナデ調整が見られる。	208-1点	
104-43	44	須恵器	恩	-	11.4	頭部 最小径 2.8 体部 最大径 8.6 底部4.8	密 φ1～2mm大の長石や石英が 中量みられる。(体部にφ2 mm大の長石がみられる。)	良好	内)N6/0灰色～N8/0灰白色 断)N8/0灰白色 外)N7/0灰白色～N6/0灰色	体部 ほぼ 完存	埴丘	南西 テラス面	7世紀 前半	底面が斜めにこぼれているので、傾いた状態で立つ。上部へ開いている口縁部は焼け込みで、椭円形になっている。残存長は、前後7.7cm左右6.0cm。孔が斜め上を向いた状態で出土している。	208-1点	
104-41			円孔 切り抜き部	直径 1.5	-	厚み7.0		良好	内)N6/0灰色～N7/0灰白色 断)N7/0灰白色 外)N7/0灰白色～N6/0灰色	復元 完存	埴丘	南西 テラス面	7世紀 前半	切り抜き部が器の中から出てきたので、切り抜かれた時に恩の中に入ったまま焼かれたと多かられ、切り抜き部よりも小さくなっている。外間にナデ調整が見られる。	208-1点	
105-1	48	須恵器	甕	推定径 18.6	44.4	体部 最大径 40.8 口頭部 高 5.5	密～精緻 φ1mm以下の長石や石英が 中量見られる。	やや不良	内)N6/0灰色～N5/0灰色 断)N6/0灰色～5YR3/2暗赤褐色 外)N5/0灰色～N4/0灰色	ほぼ 完存 口縁部 約2/3	埴丘	南西 テラス面 浮いた土器群	7世紀 前半	底面に、壺蓋の一部が付着している。外側のタタキ(5本/cm)が比較的質に施されている。内面は同じ円筒原体径5cmのタタキが進化して施され、上部にいく程何度も重ねられている。口頭部のヨコナデ調整には難渋さが目立つ。	218-44点 282-1点	
106-1	49	須恵器	横瓶	10.6～ 11.4	21.1 体部長 28.6	体部 最大径 18.6	密 φ1mm以下の長石や石英、黒色粒砂が中量見られる。	良	内)N5/0灰色～N4/0灰色 断)7.5YR4/1褐灰色 外)N5/0灰色～N4/0灰色	復元 完存	埴丘	南西 テラス面	7世紀 か	内面の側面にシボリ目が見られ、一度側面を切り取つた後、壺蓋するような形で再度蓋がされている。内面に同心円文が見られる。外面はカキ目調整と平行タタキが見られる。外面上に溶接片と土器片が付着している。	221-24点	
107-1	52	瓦 瓦筒 瓦筒 式 系土器	壺 ないしは 壺	14.0	13.9	-	密 φ1～2mm大、大きいものは直徑3mm以上の灰色粒砂、長石や石英、茶褐色粒砂が多く見られる。特に表六甲ではみられない暗灰色の砂粒が見られる。	良	内)10YR8/3淡黄橙色～10YR6/1褐灰色 断)10YR8/3淡黄橙色 外)7.5YR7/3にぶい橙色～7.5YR7/6橙色	口縁部 約1/10	埴丘	南西 テラス面 浮いた土器群	7世紀	全体に磨滅が著しい。底部が平らに成形されている。下半部の器壁厚く、不整形、器體に歪みが認められる。	282-8点 249-1点 250-4点 不明-13 点	
107-2	54	須恵器	甕	12.6	12.7	-	やや粗い～密 φ1mm以下の長石や石英、肌色粒砂や赤褐色粒砂が中量見られる。	良	内)7.5YR7/6橙色～7.5YR8/4浅黄橙色 断)7.5YR7/6橙色 外)N5/0灰色～N4/0灰色	口縁部 約1/8 体部 約1/2	埴丘	南西 テラス面 浮いた土器群	7世紀	外面上に細かいハケ(10本/cm)が施されている。ハケは摩滅している所が多く、ハケの前後関係が分かりづらい。体部全体にハケが施されている。	223-23点 282-1点	
107-3	60	土 筒 器	甕	復元 14.4	10.5	-	やや粗い～密 φ1mm以下の長石、石英、赤褐色粒砂が散見される。	良	内)7.5YR7/6橙色～7.5YR8/4浅黄橙色 断)7.5YR7/6橙色 外)7.5YR8/4浅黄橙色～10YR8/4浅黄橙色 刷毛目)7.5YR7/4にぶい橙色	口縁部 約1/12	埴丘	南西 テラス面 浮いた土器群	7世紀 前半	外面上に細かいハケ(10本/cm)が施されているが、摩滅している所が多く、ハケの前後関係が分かりづらい。体部全体にハケが施されていたと思われるが、接合できない2片(282)がある。	231-1点 232-1点 223-2点 282-4点	
107-4	60	土 筒 器	甕 (口縁部～頭部)	復元 13.0	4.1	-	やや粗い φ1mm以下の長石や石英、黒色粒砂、赤褐色粒砂が散見される。φ2mmの大長石も数点見られる。	やや不良	内)7.5YR7/6橙色～7.5YR7/4にぶい橙色 断)10YR8/3淡黄橙色 外)10YR8/4浅黄橙色～10YR7/4にぶい黄橙色	頭部 約1/10	埴丘	南西 テラス面	7世紀 前半	内・外ともにヨコナデがしっかりと施されている。	268-1点	
107-5	55	土 筒 器	甕(口頭部)	13.2	3.7	-	密 φ1mm以下の長石や石英、黒色粒砂が中量見られる。褐色シャモット紋を含む。	良	内)7.5YR7/6橙色～7.5YR7/2灰黄色 断)7.5YR7/6橙色 外)7.5YR7/6橙色～2.5YV7/2灰黄色	口縁部 約1/2	埴丘	南西 テラス面	7世紀 前半	摩滅が著しく調整が分かりにくい。口縁部を上にした状態で出土している。他に同一固体とみられる破片が6片ある。	234-2点	

確認調査結果の概要

107-6	60	土 器 器	甕(口頭部)	復元 10.6	4.3	-	密 $\phi 1\text{mm}$ 以下の長石や黒色粒 砂が少量見られる。	良	内)7.5YR7/6橙色～10YR7/6明黄褐色 断)10YR7/4にぶい黄橙色 外)10YR7/4にぶい黄橙色	口縁部 約1/8	墳丘	南西 テラス面	7世紀 頃	内・外ともに摩滅しているので、調整 技法がはっきりと分からない。外面に うっすらとハケ目のあとが見受けられ る。口縁を上向きにした状態で出土して いる。同一個体と思われる破片3点も一 緒に取り上げているが、今回実測した部 分との接合点が見つかなかった。	235-1点
107-7	60	土 器 器	甕 (口頭部～部)	残存 最大径 12.6 残存 最小径 11.4	5.5	-	やや粗い $\phi 1\text{mm}$ 以下の長石や石英、赤 褐色粒砂などが散見され る。	やや不良 ～良	内)7.5YR7/4にぶい黄橙色～7.5YR7/6橙 色 断)10YR7/4にぶい黄橙色～ 10YR8/3浅黄橙色 中)10YR6/1褐灰色 外)10YR7/3にぶい黄橙色～7.5YR7/4 にぶい黄橙色	体部 約1/8	墳丘	南西 テラス面 浮いた土器 群	7世紀 前半	外面に細かいハケナデ痕が見られる。ハ ケ(9本/cm)、摩滅している部分も多い。 内面は摩滅が著しいので、調整技法は分 からない。	282-2点
107-8	53	土 器 器	甕 (把手付き)	25.0	26.7	腹径32.3	密 $\phi 1\text{mm}$ 以下の長石や石英、黒 色粒砂が散見される。	良	内)10YR8/4浅黄橙色～7.5YR8/6浅黄 橙色 断)10YR8/4浅黄橙色～7.5YR8/6浅黄 橙色	復元 完存	墳丘	南西 テラス面	7世紀 か	外面に黒斑が付く。ハケ調整(10本/cm) 内面の指オサエで器面の凹凸が著しい。	216-70点 282-7点 不明-12 点
107-9	53	土 器 器	甕 (把手付き)	23.0	18.8	-	密～やや粗い $\phi 1\text{mm}$ 以下の長石や石英、肌 色粒砂、赤褐色粒砂が散見 される。	良	内)7.5YR8/4浅黄橙色 断)5YR7/4にぶい黄橙色～7.5YR8/4浅黄 橙色 外)10YR8/3浅黄橙色～2.5YR6/6にぶ い黄橙色	口縁部 約2/3 体部 約2/3	墳丘	南西 テラス面 浮いた土器 群	7世紀	外面と内面の口縁部にハケ目(8～10本/ cm)調整が見られる。把手部分は、指オ サエとナデが施され内面はしっかりと ヨコナデが施されている。外面の一部 に還元焼成を受けている(全体の約 1/8)。	228-19点 237-9点 282-8点 240-2点 220-2点 234-1点 241-1点 164-1点
107-10	55	土 器 器	鍋の把手	体部径 26.0	4.6	-	やや粗い～密 $\phi 1\text{mm}$ 以下の長石や石英、赤 褐色粒砂、黒色粒砂が多く見 られる。	良	内)10YR7/4にぶい黄橙色～7.5YR7/6 橙色 断)5YR8/4浅黄橙色 外)7.5YR7/4にぶい褐色～5YR5/3にぶ い赤褐色 燃)7.5YR4/1褐灰色～7.5YR1.7/1黒色	把手 のみ	墳丘	南西 テラス面	7世紀	内・外ともに摩滅が著しいので、調整 技法が分からず。把手部分は指オサエ が丁寧に施されている。	268-1点
107-11	-	土 器 器	龜形土器の 一部	-	残存部縦 11.6 残存部横 7.5	-	密 $\phi 1\text{mm}$ 以下の長石や石英、赤 褐色粒砂(シャモット)、黒 色粒砂が多く見られる。	良	内)7.5YR7/6橙色～7.5YR7/6橙色 断)5YR8/4浅黄橙色 外)7.5YR7/6橙色～7.5YR8/4浅黄橙色	不明	墳丘	南西 テラス面	7世紀 前半	外面は摩滅している部分が多い、ハケ 目(6本/cm)やナデが施されている所が ある。内面は摩滅している。	218-1点
107-12	54	土 器 器	瓶	22.4	7.8	-	やや粗い $\phi 1\text{mm}$ 以下の長石や石英、赤 褐色粒砂(シャモット)、黒 色粒砂が多く見られる。	良	内)7.5YR7/6橙色～7.5YR8/4浅黄橙色 断)10YR8/4浅黄橙色 外)5YR6/4にぶい橙色～7.5YR7/4にぶ い黄橙色 燃)7.5YR1/1黒色	口縁部 約1/2	墳丘	南西 テラス面	7世紀	内・外ともに摩滅している部分が多い い。外面はタテハケ(9本/cm)、内面はヨ コハケ(9本/cm)が施されている、同一原 体と思われる。把手位置は不明。外面に 黒斑が付く。	272-4点 233-3点 268-1点 不明-7点
108-1	62	須 恵 器	有蓋高环蓋 (肩の一部)	-	1.1	残存 最大径 13.2	密 $\phi 1\text{mm}$ 以下の長石や石英が 少量見られる。	良	内)N6/0灰白色～N5/0灰色 断)N7/0灰白色(薄い紫味を帯びる) 外)N7/0灰白色～N8/0灰白色外がや や明るい	小片	前部 IV区 十字SEC 南東竪山石 面の間、凹部 下位	X=-5.732 Y=0.394 Z=75.749	6世紀 末頃 (竪山 石敷布 面の年 代より 古い資 料か)	内面はしっかり回転ナデが見えるが、外 面は摩滅のため、不明瞭。ツマミが付く タイプ。	279-1点
108-2	62	須 恵 器	蓋 (高环か?) (口縁部)	12.8	2.3	-	密～精緻 $\phi 1\text{mm}$ 以下の長石や黒色粒 砂が極僅か見られる。直徑5 mmの長石1点見られる。	良	内)N6/0灰白色 断)N6/0灰白色 外)N6/0灰白色～N5/0灰白色	口縁部 約1/12	前庭部 IV区 竪山石 コップ面	-	7世紀	口縁部内側に粘土溜まりが使用痕の ような凹凸が見られる。外面に浅く幅の みられる凹面が1条見られる。	204-1点
108-3	62	須 恵 器	短頸蓋(蓋)	12.4	3.0	-	密～精緻 $\phi 1\text{mm}$ 以下の長石や黒色粒 砂が極少量見られる。	良	内)N7/0灰白色～N6/0灰色 断)N6/0灰白色 外)N6/0灰白色～N7/0灰白色	口縁部 約1/10	前庭部 IV区 竪山石 下層シルト 質粗粒砂	X=4.909 Y=-4.655 H=75.795	6世紀 末～ 7世紀 前半	全体的に器壁が厚い。肩部接線は弱い。	266-1点
108-4	62	須 恵 器	坏身	12.4	1.2	復元 元器径 15.2	密 $\phi 1\text{mm}$ 以下の長石や石英、黑 色粒砂が少量見られる。	良	内)N6/0灰白色～N6/0灰色 断)N6/0灰白色 外)受け部までN5/0灰白色～N6/0灰白色 体部)N4/0灰白色～N3/0暗灰色	小片	前庭部 西III区 黄色シルト	X=-0.894 Y=-3.262 H=T.P +76.390	6世紀 末	焼成時に蓋と身と一緒にした状態で焼 かれたと思われる。受部に、焼きムラに よる色の違いが見られる。	47-1点
108-5	62	須 恵 器	坏身 (口縁部)	9.4	1.8	-	密 $\phi 1\text{mm}$ 以下の長石や石英が 多く見られる。	良～やや 不良	内)N5/0灰白色 断)①N4/0灰白色～N5/0灰白色 外)N5/0灰白色～N6/0灰白色	口縁部 約1/8	前庭部 西II区	X=-0.787 Y=-4.531 H=T.P +76.041	7世紀 前半	内・外ともにナデがしっかりと施され ている。	70-1点
108-6	56	須 恵 器	坏身	推定 10.2	3.7	-	やや粗い～密 $\phi 1\text{mm}$ 以下の長石や石英が 多く見られる。	良	内)N6/0灰白色～N5/0灰白色 断)2.5Y6/1灰黄色～N5/0灰白色 外)N4/0灰白色～10Y6/1灰白色	口縁部 約4/5	前庭部 東IV区	-	7世紀 前半	底部はヘラ削り未調整なので、こぼこ している。	156-32点
108-7	62	須 恵 器	坏(底部)	-	1.5	底部径 6.0 残存部 最大径 10.8	密 $\phi 1\text{mm}$ 以下の長石が中量見 られる。	やや不良	内)N4/0灰白色 断)10R3/2暗赤褐色から10R5/2赤褐色 N4/0灰白色～N5/0灰白色 外)N5/0灰白色	残存部 最大 約1/8	前庭部 西IV区 黄色パウ ダー	X=-3.216 Y=-5.574 H=T.P +76.235	7世紀 前半	ではなく、底面は回転ヘラ削りの一 定方向へのナデが施されている。焼成時 の温度が低かったのか、断面がサンドイチ 子状になっている。	53-1点
108-8	62	須 恵 器	高环か、畿 (坏部) (口縁部)	11.8	2.7	-	密 $\phi 1\text{mm}$ 以下の長石や石英、黑 色粒砂が多く見られる。	良	内)2.5Y5/1灰黄色～N5/0灰白色 断)10YR7/1灰白色 外)N4/0灰白色～7.5Y7/1灰白色	口縁部 約1/24	前庭部 西II区	X=-0.519 Y=-3.719 Z=76.358	7世紀 前半	外面に自然釉が付く。欠けているが、突 起とと思われる突起が見られる。	48-1点
108-9	62	須 恵 器	高环脚部 (下半)	-	3.8	脚部最 大径 11.0 脚部 最少径 9.0	脚部最 密 $\phi 1\text{mm}$ 以下の長石や石英、黑 色粒砂が中量見られる。	良	内)N6/0灰白色～N5/0灰白色 断)N5/0灰白色～N4/0灰白色 外)N4/0灰白色～N3/0暗灰色	脚下 1/4 程度	旭塚 右前庭部 石垣裏込め	-	7世紀 前半	斜め上方に向く浅くほみが見られる。外 面に若干降灰がみられる。2方透かしの 可能性がある。	95-1点
108-10	62	須 恵 器	無蓋高环 (脚部)	-	1.0	脚部径 10.4	密～精緻 $\phi 1\text{mm}$ 以下の長石や黒色粒 砂が少量見られる。	良	内)N5/0灰白色～N4/0灰白色 断)N6/0灰白色～N7/0灰白色 外)7.5Y5/1灰白色～10Y7/1灰白色	端部 約1/10	前庭部 西IV区 碎石層と 土層の間	-	7世紀 前半	外面にうっすらと自然釉が付いている。 端部のナデが丁寧に行われている。	27-1点
108-11	62	須 恵 器	高环脚部 (長脚2段タ イプ)	-	2.3	残存 最大径 15.6 残存 最小径 10.8	密～精緻 $\phi 1\text{mm}$ 以下の長石や石英が 中量見られる。	良好	内)N5/0灰白色～N6/0灰白色 断)N5/0灰白色～N4/0灰白色 外)N4/0灰白色～N5/0灰白色	最大径 約1/8	前庭部 東IV区	X=-4.632 Y=3.740 Z=76.264	6世紀 末 7世紀	内面に撚て描いたような線が見られ る。内・外面は、丁寧にナデが施されて いる。	40-1点
108-12	56	須 恵 器	平瓶 (口縁部)	9.0	4.5	-	密～精緻 $\phi 1\text{mm}$ 以下の長石や黒色粒 砂が少量見られる。	良好	内)N7/0灰白色～N6/0灰白色 断)N7/0灰白色～N6/0灰白色 外)N6/0灰白色～N5/0灰白色	口縁部 約1/3	前庭部 西IV区	X=-6.125 Y=5.936 H=76.197 X=-5.350 Y=4.885 H=76.151	7世紀 前半	内面全面と口縁端に自然釉が付く。口縁 部全体に垂みが取取される。	56-1点 64-5点
108-13	62	須 恵 器	平瓶 (口縁部)	8.8	2.0	-	密 $\phi 1\text{mm}$ 以下の長石や石英が 中量見られる。	良好	内)N7/0灰白色～N6/0灰白色 断)N7/0灰白色～N6/0灰白色 外)N6/0灰白色～N5/0灰白色	口縁部 約1/12	前庭部 西II区	X=-0.616 Y=-2.498 Z=76.405	7世紀	回転ナデが施されている。	45-1点
108-14	62	須 恵 器	甕 (口頭部)	19.6	3.3	-	精緻 $\phi 1\text{mm}$ 以下の長石や黒色粒 砂が中量見られる。	良	内)2.5Y7/2灰黄色、2.5Y4/1灰白色 外)2.5Y8/1灰白色～5Y7/1灰白色	口縁部 約1/20	前庭部 東V区	-	7世紀 前半	外面は摩滅が著しい。内面の一部が黒く 煤が付いたようになっている。	151-1点
108-15	52	土 器 器	甕	16.4	15.8	-	やや粗い～密 $\phi 1\text{mm}$ 以下の長石や石英が 散見される。	良好	内)2.5Y8/3淡黃色～7.5YR8/4浅黃 橙色 断)7.5YR7/3にぶい橙色～10YR7/2に ぶい黃橙色 外)5YR7/6橙色～10YR8/4浅黃橙色	口縁部 約1/4 体部 約1/20	前庭部 東V区	-	7世紀 前半	外面に丁寧なハケ目(8～10本/cm)、内面 口縁部にもハケ(6～8本/cm)が施されて いる。外側の片面に黒斑が認められる。 口縁から底部まで縦長で、外側全体の 1/6程度である。口縁部を上にした状態 で出土している。	195-76点
108-16	62	土 器 器	坏	復元 13.8	1.9	-	密 $\phi 1\text{mm}$ 以下の長石や石英が 少量見られる。	良	内)5YR6/6橙色～7.5YR7/6橙色 断)10YR7/4にぶい黄橙色 外)5YR6/6橙色	口縁部 約1/20	前庭部 石垣裏込め	-	7世紀 前半	口縁部の内側に影込みがあり、丸味を帶 びている。摩滅してて暗文は見えない が、暗文の入っている可能性がある。	95-1点

108-17	62	土師器 (口頭部)	-	5.6	残存 最大径 22.6 頭部 最大径 18.0	やや粗い~密 φ1mm以下の長石や石英、赤 褐色粒砂が散見される。	良	内)10YR7/6明黄褐色~10YR8/4浅黃橙 色 断)10YR8/4浅黃橙色~2.5Y8/2灰白色 外)7.5YR7/6橙色~10YR8/4浅黃橙色	頭部 約1/6	前庭部 東II区 置土直下	X=-0.738 Y=1.078 H=T, P +76.523	7世紀	外・内面に指サエと思われる浅いくぼ みが見られる。外面にうっすらハケ目が 施された痕が見られるが、磨滅している のでハケ目の単位は分からない。	31-1点
108-18	62	土師器 (頭部)	-	2.7	推定残存 最大径 19.8 推定残存 最小径 19.2	やや粗い~密 φ1mm以下の長石や石英、赤 褐色粒砂が散見される。 <phi>2 mm大の長石も数点見られ る。</phi>	良	内)5YR7/6橙色~7.5YR7/4にぶい橙 色 断)10YR8/4浅黃橙色~10YR7/4にぶい黃 橙色 外)7.5YR6/4にぶい橙色	小片	前庭部 東V区	土器検出面 頭か?	7世紀 頭か?	破片が小さいでは、はっきりとした径は 不明である。外面にハケ目があるが、单 位は分からない。ハケ目を施した後、日 コナデが行われている。	134-1点
108-19	62	土師器 (口頭部)	復元 18.4	3.2	-	密 φ1mm以下の長石や石英、黒 色粒砂が中量見られる。さ わめて精緻。	良	内)10YR7/4にぶい黃橙色 断)10YR8/4浅黃橙色~10YR7/4にぶい黃 橙色 外)10YR7/4にぶい黃橙色~5YR6/6橙 色	口縁部 約1/10	前庭部 東IV区		7世紀 前半	外面に2種類のハケを使用したあとが、 うっすらと見られる。内面には細かいハ ケ(9本/cm)が施されている。上部はヨコ ナデの痕跡条線。	155-1点
108-20	62	土師器 器種不明	推定 11.0	1.6	-	密 φ1mm以下の長石や石英が 多くみられ、黑色粒砂が若 干見られる。	良好	内)10YR8/4浅黃橙色~10YR7/4にぶい 黃橙色 断)10YR8/4浅黃橙色~10YR7/4にぶい 黃橙色 外)10YR8/4浅黃橙色~10YR7/4にぶい 黃橙色	口縁部 約1/24	前庭部 東V区	土器出土状況 SSKX-08	7世紀 前半	破片のりが少なく、口径がはっきりと 分からない。口縁部はうっすらとナデら れた痕が見られるが、摩滅が著しい。	190-1点
109-1	64	石器 打製石鎚 (長脚鎚)	-	-	長さ2.9 幅1.9 厚み0.4 重さ1.2 -1.3 (残存)	精緻、石材 サスカイト	精緻	表面)N4/1灰色~N4/0灰色 断)N4/0灰色~N5/0灰色	欠損	Aトレンチ	溝201 (周溝) X=28.215 Y=11.216 H=T, P +79.621	縄文 時代 (前半期、例 えば前 期頃 か)	B面に損傷部あり。逆刺の長い長脚鎚。 先端部と片脚が欠損している。	127-1点
109-2	64	石器 打製石鎚	-	1.85	幅1.5 厚み0.25 重さ0.5g	サスカイト	-	表面)N7/0灰白色~N6/0灰色	欠損	Aトレンチ	溝文 弥生		脚端1ヶ所欠損している。	23-1点
109-3	64	石器 剥片	-	2.25	幅3.4 厚み0.8 重さ5.0g	サスカイト	-	表面)7.5Y5/1灰色~7.5Y4/1灰色	小片	Aトレンチ	北半部 (深掘) Aトレン チ+北壁 褐色砂疊	縄文 弥生	リタッヂ有り。スクリーパーの可能性、 あるいは石鎚未製品か?	26-1点
109-4	64	石器 剥片	-	2.6	幅4.1 厚み0.7 重さ7.5g	サスカイト	-	表面)7.5Y6/1灰色~N6/1灰色 断)N6/0灰色~N5/0灰色	小片	Aトレンチ	(上から3段 目) 黄褐色 砂、中央東 西セクション 南側	縄文 弥生	打面調整有り。	22-1点
109-5	64	石器 剥片	-	1.7	幅1.4 厚み0.2 重さ0.4g	サスカイト	-	表面)N5/1灰色 断)N6/0灰色~N5/0灰色	小片	前庭部 西IV区	X=-5.647 Y=-0.331 H=76.251	縄文 弥生	使途不明	36-1点
109-6	64	石器 チップ	-	1.75	幅1.6 厚み0.25 重さ0.6g	サスカイト	-	表面)N5/0灰色~N6/0灰色	小片	前庭部 東IV区	X=-6.300 Y=2.126 H=75.971	縄文 弥生	使途不明	180-1点
110-1	卷頭 15	耳環	-	-	小口幅 0.75cm 厚さ 0.65cm 重さ 10.2g	青銅と金	良質	表様 (客土と当 敷地内盛土 の2つの可 能性があ る)	ほぼ 完形			7世紀	青銅製で、表面を金の薄板で覆って いる。	125-1点
111-1	63	須恵器 坏蓋(受部)	復元 11.8	1.1	-	密 φ1mm以下の長石や黒色粒 砂が中量見られる。	やや不良	内)N6/0灰色~N7/0灰白色 断)外)N4/0灰色~5B4/1暗青灰色 中)N7/0灰白色 外)N5/0灰色~N6/0灰色	小片	表探	-	7世紀	破片が小片のため、径は推定である。焼 成時の温度が低かったのか、断面がサン ドイッチ状になっている。	284-1点
111-2	63	須恵器 坏蓋	復元 13.2	1.3	-	密 φ1mm以下の長石や黒色粒 砂が少量見られる。	良	内)N7/0灰白色 断)N7/0灰白色~N6/0灰色	小片	表探	-	奈良 時代	内面のナデを施した後、円形にした粘土 を付け足したような痕が見られる。外面 に焼成時に重ね焼きをしたのか、色が はっきりと違っている部分がある。	284-1点
111-3	63	須恵器 坏蓋	残存 最大 11.4	2.1	-	密~精緻 φ1mm以下の長石が極少量 見られる。	やや不良	内)N6/0灰色~5B5/1青灰色 断)10Y7/1灰白色 中)7.5R4/1暗赤灰色~N6/0灰色 外)N6/0灰色~N7/0灰白色	天井部 約1/3	表探	-	7世紀 初頭	底部に付着物が付いている。台からはが す時に一緒にくつついたままになつたの かも知れない。内面ナデは丁寧に施され ているが、外面は内面ほど丁寧なナ デが施されている。	129-2点
111-4	63	須恵器 長頭壺(口頭部)	8.2	2.0	-	やや粗い φ1mm以下の長石や石英、黒 色粒砂などが多く見られ る。	良	内)N5/0~~-7.5Y7/1灰白色 断)N6/0灰色~N7/0灰白色 外)N7/0灰白色~7.5Y7/1灰白色	口縁部 約1/12	表探	-	7世紀 前半	内面の縁部付近が少し剥離したよう になつてゐる。内・外面ともに丁寧なナ デが施されている。	25-1点
111-5	63	須恵器 高环 (口縁部)	復元 11.6	2.2	-	密 φ1mm以下の長石や黒色粒 砂が中量見られる。Φ2mm大 の長石が1点見られる。	良	内)N6/0灰色~N7/0灰白色 断)N6/0灰色 外)N4/0灰色~N5/0灰色	小片	表探	-	7世紀 前半	回転ナデが施されている。	284-1点
111-6	63	須恵器 無蓋高环 (脚縁部)	-	0.4	脚縫部 8.8	密 φ1mm以下の長石や石英が 少量見られる。	良	内)N4/0灰色 断)2.5YR3/2暗赤褐色~5YR4/2灰褐色 外)N3/0暗灰色~N5/0灰色	小片 (脚縫 径約 1/8)	表探	-	7世紀 前半	脚縫部と内面に釉が付く。	284-1点
112	65-66	竜山石 大剥片	-	-	幅30.0 長49.5 厚さ13.2	やや粗い~密 φ5mm~1cm大的石英、長石、 白色粒砂が多く見られる。	-	内)2.5Y8/3淡黄色~10YR8/2灰白色 断)2.5Y8/3淡黄色~10YR8/2灰白色	石片	前庭部 O南部 と東部の 区間壁一括			内面は銳利に割れている部分と凸凹面 に分かれている。打点が見られる。	1点
113-1	17 67	卷頭 17 67	中剥片	-	-	長25.3 幅12.0 厚み6.9 重さ 1.34~ 1.35kg	密 φ1~3mm大的石英、長石、 黑色粒砂が多く見られる。	-	内)2.5Y8/3淡黄色~10YR8/3浅黃橙色 断)2.5Y8/2灰白色~10YR8/2灰白色	石片	前庭部 G東部 (北半) 圓面下位		打点がみられる。打点から波紋状に外側 へ亀裂が走っている。外面は丸みのある 自然面である。	1点
113-2	17 67	卷頭 17 67	中剥片	-	-	長28.3 幅11.1 厚み6.1 重さ 1.22kg	密 φ1~5mm大的長石、石英、黑 色粒砂が多く含まれる。	-	内)5Y8/2灰白色~2.5Y8/3淡黄色 断)外)5Y8/4淡黄色~2.5Y8/3淡黄色	石片	前庭部 G東部 (北半) 圓面下位		打点がみられる。外面が自然面である。	1点
114-1	卷頭 18	竜山石 中剥片	-	-	長13.0 幅8.2 厚み4.5 重さ290g	密 φ1~3mm大的石英、長石、黑 色粒砂が多く見られる。	-	内)2.5Y8/1灰白色~5Y8/1灰白色 断)2.5Y8/2灰白色~5Y8/1灰白色	石片	前庭部 G東部 (北半) 圓面下位		剥片である。	1点	
114-2	卷頭 18	竜山石 中剥片	-	-	長11.3 幅8.0 厚み2.6 重さ190g	密 φ1~3mm大的石英、長石、肌 色粒砂が多く見られる。	-	内)2.5Y8/1灰白色~10YR8/2灰白色 断)外)5Y8/2灰白色~2.5Y8/2灰白色	石片	前庭部 G東部 (北半) 圓面下位		剥片である。	1点	
114-3	卷頭 18	竜山石 中剥片	-	-	長15.6 幅9.5 厚み5.3 重さ490g -500g	密 φ1mm以下~2~3mm大的石英、 長石、黑色粒砂が多く見ら れる。	-	内)2.5Y8/2灰白色~5Y8/2灰白色 断)外)5Y8/3淡黄色~2.5Y8/2灰白色	石片	前庭部 Z東部		石材を整える際に出た剥片であろう。	1点	
114-4	卷頭 18	竜山石 中剥片	-	-	長12.9 幅8.9 厚み4.4 重さ310g	密 φ1~3mm大的石英、長石、肌 色粒砂が多く見られる。	-	内)10Y8/2灰白色~5Y8/1灰白色 断)外)5Y8/2灰白色~2.5Y8/1灰白色	石片	前庭部 G東部 (北半) 圓面下位		剥片である。	1点	
114-5	67	竜山石 中剥片	-	-	長12.4 幅14.6 厚み4.6 重さ800g	密 φ1~5mm大的石英、長石、灰 白色粒砂が多く見られる。	-	内)5Y8/2灰白色~5Y8/3淡黄色 断)外)7.5Y8/2灰白色~5Y8/3淡黄色	石片	前庭部 G東部 (北半) 圓面下位		打点らしきところがある。弯曲してい る方が自然面なので、母岩の外側にあつた 部分と思われる。	1点	
114-6	卷頭 18	竜山石 中剥片	-	-	長15.4 幅8.0 厚み3.5 重さ330g	密 φ1~2mm大的石英、長石、赤 褐色粒砂が多く見られる。	-	内)2.5Y8/2灰白色~5Y8/1灰白色 断)外)2.5Y8/2灰白色~10Y8/4灰白色	石片	前庭部 G東部 (北半) 圓面下位		剥片である。	1点	

VI. まとめ

近年、全国各地において衆目を集めている終末期古墳は、古代へと連続する地域史叙述の面でも重視されている。兵庫県下において屈指の巨石墳として知られる旭塚古墳は、その代表的な存在であり、このたび、40有余年ぶりに発掘調査を実施した。表六甲の閑静な山手の住宅地にあって、その雄姿を今に残してきたこの古墳は、墳丘の東半部を既に失っていることが判明したが、石室や床面、さらに前庭部は予想以上に良好な状況で残存していたことが確認できた。第1次確認調査では、敷地全体の遺構分布状態と平面調査範囲の絞り込みを進め（V章(2)）、第2次確認調査では、この調査で対象として絞り込まれた旭塚古墳北東方のエリア（拡大調査区Aトレーナー）と墳丘および前庭部の記録調査を行い、多くの知見と成果をあげることができた（V章(3)）。本章では、それらを改めて整理し、若干の推察を交えつつ、旭塚古墳の持つ特殊性や独自性について多様な視角から言及することにより、潰えた本書のまとめとしたい。

(1) 立地の特異性

旭塚古墳は、陰宅風水の思想を意識的に取り入れた選地を大きな特徴とする（II章）。すなわち、標高260mを測る鷹尾山（通称城山）を背山として、視覚的によりスケールの大きい景観と風致の形成を利用した立地環境の中に所在する。さらに、群集墳分布域の真っ只中において、他の横穴式石室墳が認められなかった点もネガティブながら兆域的なゾーンの存在が窺われ、同時期の群がる墳丘建築を一切許さない排他的な空間に建築された独立墳として捉えることができる。その独自性は、以下に記す墳形や内部構造、土器供献祭祀の器種や性格、播磨・竜山石の使用といった諸点にも分散的に顕現している。

(2) 墳形と墳丘構造の特殊性

墳形については、当初円墳ないし方墳の可能性が高いと指摘されてきた経緯があり（III章）、今般、墳丘南西部において、150度前後の交角をもつ外護石辺の一部が確認されたことにより、再考の余地があることが判明した。具体的には、羨門立柱石の西約5mの一角であり、基底石の並ぶラインは、明らかに直線と直線の交わりを示し、多角部を造り出していた。その西側一辺には、高さ1.24mまでの貼石が遺存しており、墳丘外表としての急傾斜角度の斜面を呈していた。この貼石には、入念な裏込めは見られなかったものの、20cm前後の自然石（主として花崗岩）を3段以上組み上げており、少なくとも墳丘の正面觀では、このような造作が辺角をもちつつも連続して行われていた公算が高い。一角のみの遺存であるため、六角形や八角形など墳丘平面形の特定には至らなかつたが、円墳や方墳の蓋然性を大きく排除できるデータが得られたことは、本墳の特殊性を考える上で大きな成果をもたらしたと言える。終末期古墳ならではの平面プランが確認できた意義は大きい。

一方、墳丘構造に関しては、城山から派生する微支谷地形を埋積した河成堆積物の起伏、特に高まりを巧みに利用し、それを残核状に削り出して成形されたもので、墳丘盛土の土量は墳高からみた予想に反し、極めて少ないことが確認された。墳丘背面側の西半部で検出された多重の内区列石もこの地域にあっては調査例として特異なもので、その最上段列が墳丘基盤層と盛土部分との境界を示す作業区分の痕跡と判断された。天井石を覆うことに主眼を置いた墳頂部を中心とする最終段階の封じ方と言え、墓擴の深さとともに、畿外的な要素の浸透も無視できない。

(3) 墳裾テラス面の存在と多数の供献土器

石室開口部の西側、貼石多角部を検出した部分においてテラス面を検出した。20~30cm程の落差をもって一段高く造成された面が墳丘裾に接して巡っていた。後世の乱掘、工事などによる壊平によって、幅1m弱、長さ1.5m前後の僅かな範囲と化していたが、平らに整えられた面上には、夥しい数の須恵器や土師器が正置されていたとみられる状態で出土した。土器類は、墳丘の崩壊に伴う動き以外に目立って移動した形跡がなく、ほぼ正確に旧状を保っていることが窺われ、甕や埴、深杯にみる3個体1組の意図的なセット関係は、個々の距離や配置などに儀礼行為における役割や属性の一端の反映が推測できる（V章(3)）。畿内中心部における大化薄葬令の適用時期と触れ合う築造年代を示す当墳であるだけに、外部施設とはいえ、厚葬行為とも触れ合う多量の土器類の供献をみた点は、被葬者集団の地域性や特異性の一つとして認識しておく必要がある。

(4) 石室構造をめぐる二、三の特質

内蔵の石室は、全長9.8m、玄室幅2.1m、玄室長4.1m、羨道幅1.6m、羨道長5.7m、残存高2.1mを測り、壁体は主に巨石を縦位置に使用することを意識した巨石墳で、形骸化しつつも袖をもち、両袖式の横穴式石室の形式を探る。石材は六甲花崗岩を主用する。その用石法は、巨石の自然石を使用した石舞台型式と切石を用いた岩屋山型式の中間的様相を持つものである〔森岡1984、森岡・坂田2008など〕。注目すべきは、奥壁直下に据え付けられた巨大な床石で、構築当初から原位置に存在したことが証明された（V章(3)）。石棚や石壇、石棺とは明らかに性格を異にするもので、両袖式横穴式石室に対する横口式石槨の基本的要素の部分的同化を想起させつつも、完全には取り込んでいないその曖昧な手法にこそ、時期差や地域性に基づく融合に加え、当墳が持つ本質的な特異性の一つに数えられよう。石室構造の系譜解明には、なお腐心すべき課題を残している。

(5) 竜山石の受容とその背景

石室床面と石室開口部から南に12m隔たった前庭部で、竜山石のまとまった剥片・碎石面を検出した。竜山石は調査地の周辺に限らず、阪神間では産出地のない石材種であり、西方の播磨地域（加古川市・高砂市・加西市・姫路市など）で産出する流紋岩質凝灰岩である。古墳時代に入り、石棺材として重宝された石材であり、大王墓をはじめ各地の有力首長墳で類例をみることができるものの、本例では石棺片の想定可能な製品加工面を残した資料は、詳細な観察にもかかわらず絶無であって、むしろ石片化、細片化の作業を連続的に進め、バラス敷きにすることが築造当初からの目的であったかのような出土状態を示した。工程の判明する数百kgを測る石材を約50km遠方から摂津の地に運ばせる目的物に対する被葬者の求心力と、他に類例を見ない使用形態も本墳の際立った独自性と言えよう。

(6) 供獻須恵器群にみられる播磨以西の要素

墳裾にテラス面が遺存していたことは、V章(3)において指摘したが、局部的に残っていたにもかかわらず、大量の土器が出土した。内訳として、土師器12点、須恵器40点、総個体数52点を数えるものの、偶発的な遺存状態であったため、それ以上の土器が連続するテラスの上に献ぜられていたものと推定されることは、驚きを禁じ得ない。残存土器群の特徴は、V章(4)で要記したとおりであるが、①豊富な器種と大小のバラエティー、②特にセット関係を有する小型飲食用器の存在、③播磨以西の山陽地方産とみられる須恵器の存在などが摘記され、上記(5)とも深く関係して、本墳被葬者の出自や性格を暗示させる。一括性の高いこの土器群は、また7世紀の摂津西部地域における土器編年や築造年代を考える上にも有効な基準資料となろう。

(7) 城山古墳群の群集墳としての性格

旭塚古墳は、芦屋川右岸、通称城山の山麓部から山腹急斜面にかけて営まれた城山古墳群中の一墳であり、時間的にも空間的にも群集墳を構成していることは疑いない。しかし、城山古墳群は、西に隣接する三条古墳群と並んで様々な点で異質で特異な群集墳の性格を顕示している。それは市域東部の丘陵地一帯に展開する八十塚古墳群などの性格と比較して、より一層明晰なものとなり、既に素描を図ったところである〔森岡2002、森岡・坂田2009〕。群集墳の形成には、それぞれにプラットホームとしての地域と母集団があり、その析出を要する。

その第一点目は、その早い成立と終焉の時期の新しさに窺え、6世紀前半の早々に造墓活動を始め、7世紀後半の天武・持統朝期へと持続する。実年代にして少なく見積もっても150年前後は継続したもので、群形成の長期に及ぶ經營が注目される。第二点目は、築造された古墳が横穴式石室を内部構造にすることに基調を置きつつも、竪穴式石室や横口式石槨などの諸要素を多分に採り入れ、墳丘の大小、高低、構成墳の主体部構造がきわめて多彩であって、一墳ごとに等質性を排除した個性豊かな独立性の高さを保持している点である。第三点目として注目されるのは、副葬品などにみられるミニチュア竈形土器の特徴的な存在であり、かねてより渡来系の要素の一つとして注目されている。加えて、武器や馬具などの副葬慣行も周辺にみられる他の群集墳より卓越することが窺え、出土遺物の面でも城山古墳群は三条古墳群と同軌のあり方を示す点が看過できない。

以上、やや散漫なまとめとなつたが、旭塚古墳のもつ群集墳中での位相や被葬者のもつ強烈なイメージ、古墳自体が持つ特異性などが浮き彫りにできたと考える。これらのことがらは、発掘担当者としての事実関係と考証の最小限の整序にすぎず、残された課題はあまりにも多い。個別具体的に深化させるべき多岐に亘っての問題については、報告書の制約と限界を超えることもあって、考察に立ち入った別稿をいくつか用意する中で明らかにしたい。群集墳というものを従前の因習に縛られることなく、解析していく姿勢が必要だろう。（森岡・坂田）

引用・参考文献目録

- 青木 敬 2004 「横穴式石室と土木技術」『古墳文化』創刊号 國學院大學古墳時代研究会
 青木 敬 2005 「後・終末期古墳の土木技術と横穴式石室－群集墳築造における“畿内と東国”」『東国史論』20 群馬考古学協会
- 秋里籬鳶 1796 『撰津名所図会』(菟原郡)
 明元和子 1991a 「〈速報〉芦屋市城山3号墳の発掘調査(1)」『淡神文化財協会ニュース』14 淡神文化財協会
 明元和子 1991b 「〈速報〉芦屋市城山3号墳の発掘調査(2)」『淡神文化財協会ニュース』15 淡神文化財協会
 浅岡俊夫 1981 「鷹尾城」『日本城郭大系』12 大阪・兵庫 新人物往来社
 芦屋市役所 1971 『新修芦屋市史』本篇
 芦屋市役所 2002 「刻印石の謎を解く－発掘調査からわかる大坂城と芦屋の歴史－」『広報あしや』855
 芦屋市役所 2005 「発掘・発見メモリアル2004－徳川大坂城東六甲採石場の大規模調査終わる 長州藩毛利家の石切丁場跡を確認 岩園町では石材を持ち出すルートなどがみつかる」『広報あしや』908
- 芦屋市役所 2007 「芦屋考古学再発見35 郷土地名の考古学(10)－地名と竜山石と芦屋－」『広報あしや』977
 芦屋市役所 2008a 「芦屋考古学再発見41 古墳発掘断章(1)－夢多き考古少年吉岡昭－」『広報あしや』991
 芦屋市役所 2008b 「芦屋考古学再発見42 古墳発掘断章(2)－武藤誠と山芦屋古墳の登場－」『広報あしや』993
 芦屋市役所 2008c 「芦屋考古学再発見43 古墳発掘断章(3)－山芦屋古墳の巨大石室を掘る－」『広報あしや』995
 芦屋市役所 2008d 「芦屋考古学再発見44 古墳発掘断章(4)－行政調査の草分けと熊田種次－」『広報あしや』997
 芦屋市役所 2008e 「一体誰が…謎の九曜紋刻印 城山刻印群で見つかった二つの刻印」『広報あしや－文化財特集考古学が解き明かす芦屋－』1001
- 芦屋市教育委員会 1967 『芦屋市埋蔵文化財包蔵地台帳』(芦屋市文化財調査報告第5集)
 芦屋市教育委員会 1977 『〈現地説明会資料〉山芦屋古墳発掘調査の概要』
 芦屋市教育委員会 1979 『芦屋の史跡 10. 城山古墳群と山芦屋古墳』『芦屋の生活文化史－民俗と史跡をたずねて』
 芦屋市教育委員会 1980 『〈現地説明会資料〉城山古墳群発掘調査の成果』
 芦屋市教育委員会 1982 『城山南麓遺跡A地点発掘調査現地説明会資料』
 芦屋市教育委員会 1988 『八十塚岩ヶ平10号墳現地説明会ノート』
 芦屋市教育委員会 1993 『芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図 利用の手引き』(芦屋市文化財調査報告第24集)
 芦屋市教育委員会 1997 『観覧の手びき 最新発掘！考古学からみた芦屋展－'95～'97震災復興調査の成果』
 芦屋市教育委員会 1999 『芦屋廃寺遺跡(第62地点)発掘調査－平成11年度震災復興埋蔵文化財調査－現地説明会ノート』
 芦屋市教育委員会 2001a 『芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図 利用の手引き』(芦屋市文化財報告第40集)
 芦屋市教育委員会 2001b 『「寺」字刻印土器と芦屋廃寺跡－第75地点発掘調査の成果から－』(公開展示説明会資料)
 芦屋市教育委員会 2006a 『八十塚古墳群現地説明会資料－岩ヶ平支群第45・46号墳の確認結果と第58号墳の発掘調査並びに徳川再築大坂城岩ヶ平石切丁場・刻印石の調査－』
 芦屋市教育委員会 2006b 『芦屋川水車場跡現地見学会資料－芦屋川水車場跡と城山古墳群第20号墳の発掘調査成果－』
 芦屋市教育委員会 2007a 『会下山から邪馬台国へ－高地性集落の謎と激動の弥生社会－』(会下山遺跡発掘50周年記念事業記録集)
 芦屋市教育委員会 2007b 『旭塚古墳とその周辺－古墳時代終末期巨石古墳・竜山石検出 確認発掘調査の成果と説明のひととき－』(現地説明会資料)
 芦屋市教育委員会 2007c 『広報あしや考古連載記事にみる芦屋の古代史』
 芦屋市教育委員会 2008 『徳川大坂城東六甲採石場における細川家石切丁場の確認について(報道関係公表資料)』
 芦屋市教育委員会 2009 『広報あしや考古連載記事にみる芦屋の地名と遺跡びと』
 芦屋市教育委員会・関西大学山芦屋遺跡調査団 1983 『兵庫県芦屋市山芦屋遺跡S4地点現地説明会資料』
 芦屋市教育委員会・山芦屋遺跡調査会 1981 『〈現地説明会資料〉山芦屋遺跡緊急発掘調査の成果－N・S両地点の縄文・弥生遺跡を中心に－』
 芦屋市教育委員会・山芦屋遺跡調査団 1982 『山芦屋遺跡S3地点の発掘調査概要』
 綱干善教・直宮憲一・藤原学・森岡秀人 1973 『吉志部古墳発掘調査報告』 吹田市・吹田市教育委員会・関西大学考古学研究室
 天野正史 1971 『八十塚古墳群予察調査報告と今後の問題』『芦の芽』23 芦の芽グループ
 荒木幸治 編 2006 『木虎谷11号墳発掘調査報告書』(赤穂市文化財調査報告64) 赤穂市教育委員会
 有坂隆道・村川行弘 1971 『大坂城と芦屋』『新修芦屋市史』本篇 芦屋市役所
 伊井孝雄 2004a 『兵庫県芦屋市八十塚古墳群破壊の危機』『文全協ニュース』166 文化財保存全国協議会
 伊井孝雄 2004b 『新しいタイプの乱開発と遺跡調査問題－芦屋市の八十塚古墳群と徳川大坂城採石遺跡』『文全協ニュース』167 文化財保存全国協議会
 池田 碩 1998 『花崗岩地形の世界』 古今書院
 勇 正廣 他 1972 『西宮市埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表』(文化財資料4) 西宮市教育委員会
 勇 正廣 他 1974 『具足塚－発掘調査概報』(文化財資料10) 西宮市教育委員会
 勇 正廣・藤岡 弘 1976 『古墳時代』『新修芦屋市史』資料篇1 芦屋市役所
 勇 正廣・藤岡 弘・前田義人 1977 『苦楽園の古墳－発掘調査概報－』(文化財資料18) 西宮市教育委員会
 勇 正廣・藤岡 弘・前田義人・古川久雄 1976 『具足塚発掘調査報告』(西宮市文化財調査報告書第1集) 西宮市教育委員会
 勇 正廣・藤岡 弘・森岡秀人 1977 『芦屋市山芦屋古墳(仮称城山古墳)緊急発掘調査終了報告』(芦屋市文化財資料遺跡調査No.1) 芦屋市教育委員会

- 石野博信 1970 「宝塚市長尾山古墳群」『宝塚の埋蔵文化財』(宝塚市文化財調査報告第1集) 宝塚市教育委員会
(森 浩一 編『論集終末期古墳』1973年に再録所収)
- 稻田孝司 1978 「忌の龜と王權」『考古学研究』97 (1976年版) 考古学研究会
- 今西純朗・森岡秀人 1973 「古墳の歴史的研究－八十塚13号墳をめぐる横穴式石室の二次的使用について－」『八十塚13号墳の測量調査』 芦の芽グループ考古学研究会・兵庫県立芦屋高校史学研究部
- 岩本昌三・藤川祐作 1979 「第6章 芦屋の史跡19 大坂城と採石地芦屋の刻印石」『芦屋の生活文化史－民俗と史跡をたずねて－』 芦屋市教育委員会
- 魚澄惣五郎 編 1956 『芦屋市史』本編 芦屋市教育委員会
- 魚澄惣五郎 編 1957 『芦屋市史』史料編第二(考古学資料編) 芦屋市教育委員会
- 大国正美 2003 「9. 文獻にみる近世初頭の採石場の変質と豊臣・徳川両大坂城」『徳川大坂城東六甲採石場Ⅲ 岩ヶ平刻印群(第12次)発掘調査報告書－芦屋市六麓荘浄水場高区配水池(水道建設)築造工事に伴う唐津藩採石場跡の発掘調査－』(芦屋市文化財調査報告第44集) 芦屋市教育委員会
- 大阪城天守閣 2002 「特別展 大坂再生－徳川幕府の大坂城再築と都市の復興－」
- 大阪城天守閣 編 1984 『大阪城天守閣紀要』12(大阪城学術調査報告特集号)
- 大阪府立近つ飛鳥博物館 編 2006 『年代のものさし－陶邑の須恵器－』(大阪府立近つ飛鳥博物館図録 40) 平成17年度冬季企画展・重要文化財指定記念
- 太田宏明 1999 「『畿内型石室』の属性分析による社会組織の検討」『考古学研究』181 (第46巻第1号) 考古学研究会
- 太田宏明 2002 「第5章 論考3 類型化による群集墳の検討－西摂地域を中心として－」『八十塚古墳群の研究』(関西大学文学部考古学研究 第7冊・芦屋市文化財報告第33集) 関西大学考古学研究室 編
- 太田宏明 2003a 「畿内型石室の変遷と伝播」『日本考古学』15 日本考古学協会
- 太田宏明 2003b 「畿内地域における導入期の横穴式石室」『関西大学考古学研究室開設五拾周年記念考古学論叢』関西大学
- 小方泰宏 1995 「大畠1号古墳の復元－後期横穴式石室の築造過程－」『研究紀要』9 財團法人 北九州市教育文化事業団 埋蔵文化財調査室
- 岡野慶隆 1987 「横穴式石室の平面企画についてII－畿内における主要横穴式石室の検討－」『関西学院考古』8 関西学院大学考古学研究会
- 岡野慶隆 他 1975 「構内古墳現状・遺物報告」『関西学院考古』2 関西学院大学考古学研究会
- 岡野慶隆・寺前直人・福永信哉 編 2006 『川西市勝福寺古墳発掘調査報告書』 川西市教育委員会
- 岡本良一 1970 『大坂城』(岩波新書739) 岩波書店
- 岡本良一 編 1983 『大阪城』 清文堂
- 尾崎喜左雄 1966 『横穴式古墳の研究』 吉川弘文館
- 落合重信 他 1956 『神戸地方古墳地名表』 神戸市教育委員会
- 小野 清 1973 『大坂城誌 全』(付・日本城郭誌) (1899年刊行版を復刻) 名著出版
- 小野 清 1899 『大坂城誌 中』
- 梶原 勝 2001 『Ⅲ江戸の施設と遺構 2 土居・土橋・石垣 石垣の名称と構造』『図説江戸考古学研究事典』(江戸遺跡研究会 編) 柏書房
- 春日真実 2001 「横瓶の製作技法」『つぼとかめのつくり方－須恵器貯蔵具を考えるII－』(北陸古代土器研究) 9 北陸古代土器研究会
- 葛野 豊 2004 『《学問・文化》徳川大坂城の石垣採石場跡 芦屋市岩ヶ平 調査・保存の意味 兵庫』『赤旗』11月25日号 日本共産党
- 河上邦彦 1976 「大和の群集墳概観」『横田健一先生還暦記念日本史論叢』 横田健一先生還暦記念会
- 関西大学文学部考古学研究室 編 1983 『関西大学考古学研究室開設参拾周年記念考古学論集』 関西大学文学部考古学研究室
- 関西大学文学部考古学研究室 編 2002 『八十塚古墳群の研究』(関西大学文学部考古学研究第7冊・芦屋市文化財調査報告第33集) 関西大学文学部考古学研究室
- 喜田貞吉 1922 「古墳墓の二、各地の荒墳」(第3章 武庫地方上代の遺物遺蹟)『神戸市史』別録1 神戸市役所
- 北垣聰一朗 1984 「横穴式石室構築技法の一考察」『檀原考古学研究所論集』6 吉川弘文館
- 北垣聰一朗 1987 「石垣普請」 法政大学出版局
- 北垣聰一朗 2005 「第5章 第3節 近世の石切技術」『兵庫県高砂市所在竜山石切場－竜山採石遺跡詳細分布調査報告書－』(高砂市文化財調査報告12) 高砂市教育委員会
- 北垣聰一朗 2008 「石垣構築技術の発達と石材の規格化」『天下普請大坂城再築を支えた石材の調達－東六甲徳川大坂城の石切丁場跡－』 大阪歴史学会
- 喜谷美宣 1964 「後期古墳時代研究抄史」『日本考古学の諸問題』(考古学研究会十周年記念論文集)
- 北野博司 2001 「須恵器の風船技法」『つぼとかめのつくり方－須恵器貯蔵具を考えるII－』前掲書
- 木下 忠 1962 「後期古墳群の諸問題」『考古学研究』33 考古学研究会
- 木下律子・辻 有子・山口厚子・田辺真人・森岡秀人 1974 「(資料紹介)芦高社会科準備室所蔵の須恵器」『芦笛』27 兵庫県立芦屋高等学校自治会
- 熊田種次 1949 「探史日誌」(メモ・ノート遺稿、岩本昌三筆稿)
- 車崎正彦 2007 「古墳時代の社会－首長国から国家へ－」『季刊考古学』98 雄山閣
- 合田茂伸 2002 「第5章 論考4 横穴式石室の床面について」(1998成稿、2000修正) 『八十塚古墳群の研究』(関西大学文学部考古学研究 第7冊・芦屋市文化財報告第33集) 関西大学考古学研究室 編
- 合田茂伸・西川卓志 編 1991 『兵庫県西宮市所在八十塚古墳群劍谷支群第2号墳 第2次発掘調査報告書』(文化財資料

- 34) 西宮市教育委員会
 紅野芳雄 1940 『考古小録』 西宮史談會
 小林行雄 1961 「旭塚古墳発掘調査概要」(調査終了報告、タイプ印刷)
 小林行雄 1976 『黄泉戸喫』『古墳文化論考』 平凡社 初出は昭和24(1949)年『考古学集刊』第2冊
 五来 重 1992 「IV. 葬儀論2-殯歎儀礼」「葬と供養」 東方出版
 近藤義郎 1952 「問題の所在」『佐良山古墳群の研究』1 津山市
 近藤義郎 1956 『日本古墳文化』『日本歴史講座』1 歴史学研究会・日本史研究会
 坂田典彦 2008 「多曜紋刻印のゆくえ-刻印は、家紋か?デザインか?-」『芦屋市立美術博物館紀要』創刊号
 芦屋市立美術博物館
 先山 徹 2001 「石材の代表『みかけ石』」「自然環境ウォッキング「六甲山」」(兵庫県立人と自然の博物館「六甲」研究グループ 編) 神戸新聞総合出版センター
 先山 徹 2003 「VI. 3. 六甲花崗岩の分類研究・特性からみた石垣用材」『徳川大坂城東六甲採石場Ⅲ 岩ヶ平
 刻印群(第12次)発掘調査報告書-芦屋市六麓荘浄水場高区配水池(水道施設)築造工事に伴う
 唐津藩採石場跡の発掘調査-』(芦屋市文化財調査報告第44集) 芦屋市教育委員会
 先山 徹 2005 「地質学・岩石学的にみた六甲山の御影石」「天下普請を支えた石材の調達-東六甲徳川大坂城石
 切丁場跡-」現地検討会資料 主催:大阪歴史学会 後援:日本考古学協会・文化財保存全国協
 議会・関西文化財保存協議会・歴史資料ネットワーク
 佐々木幸雄 1965 「朝日ヶ丘古墳群と八十塚古墳群」『芦笛』18 兵庫県立芦屋高校自治会
 佐々木幸雄 1967 「芦屋市内古墳分布調査所見」『芦屋市埋蔵文化財包蔵地台帳 八十塚E号墳発掘調査報告書』
 <芦屋市文化財調査報告第5集> 芦屋市教育委員会
 笹沢正史 2001 「須恵器瓶類の口縁頸部接合痕跡」「つぼとかめのつくり方-須恵器貯蔵具を考えるII-」前掲書
 佐田 茂 1972 「群集墳の形成とその被葬者について」『考古学雑誌』第58巻第2号 日本考古学会
 佐藤 茂 1997 「新しい群集墳」「古代学評論」(古代を考える別冊 第5号) 古代を考える會
 重藤輝行・竹村忠洋 編 「寺田遺跡第95地点発掘調査概要報告書」阪神・淡路大震災復興に伴う埋蔵文化財発掘調査の成
 果(芦屋市文化財調査報告第32集) 芦屋市教育委員会
 島 之夫 1929 『芦屋の里』 宝蔵館
 島田貞彦 1928 「本邦発見の竈形土器」「歴史と地理」22-5
 寒川 旭・森岡秀人・竹村忠洋 2001 「芦屋廃寺跡建物基壇と関わる地震痕跡」『日本考古学』12 日本考古学協会
 志村 清 1970 『大坂城今昔』(日本古城友の会 編) 日本城郭資料出版会
 白石太一郎 1966 「畿内の後期大型群集墳に関する一試考-河内高安千塚及び平尾山千塚を中心として-」『古代学
 研究』(第42・43合併号) 古代学研究会
 白石太一郎 1975 「ことどわたし考-横穴式石室墳の埋葬儀礼をめぐって-」『権原考古学研究所論集 創立35周年
 記念』 権原考古学研究所 編 吉川弘文館
 清家植直 1919 「釜及竈形土器の新発見」『考古学雑誌』9-8 日本考古学会
 濱川芳則・森岡秀人 1987 「城山古墳群・山芦屋遺跡」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和59年度』 兵庫県教育委員会
 関川尚功 1978 「群集墳をめぐる諸問題-大和を中心として-」『桜井市外鎌山北麓古墳群』(奈良県史跡名勝天
 然記念物調査報告第34冊) 奈良県立権原考古学研究所
 堆積学研究 編 1998 『堆積学辞典』 朝倉書店
 高瀬一嘉 編 1997 「芦屋市所在 三条九ノ坪遺跡-被災マンション等再建事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
 -」(兵庫県文化財調査報告書第168冊) 兵庫県教育委員会
 高橋美久二 1995 「山陽道の駅と駅路」「古代交通の考古地理」 大明堂
 高橋美久二 1996 「山陽道-瓦葺き白壁朱塗りの駅館」「古代を考える古代道路」(木下 良 編) 吉川弘文館
 高松雅文 2006 「群集墳からみた地域支配(上)-但馬地域の分析を中心に-」『古代学研究』175 古代学研究会
 高松雅文 2007 「群集墳からみた地域支配(下)-但馬地域の分析を中心に-」『古代学研究』176 古代学研究会
 竹村忠洋 編 2004 「津知遺跡(第198・222地点)発掘調査報告書-芦屋西部第二地区震災復興地区画整理事業に
 伴う震災復興調査の成果-」(芦屋市文化財調査報告第55集) 芦屋市教育委員会
 竹村忠洋・辻 康男 2006 「平成12年度国庫補助事業 城山・三条古墳群C地点発掘調査実績報告書 平成13年(2001)3月」
 「平成11・12年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査-震災復興に伴う埋蔵文化財緊急調査確
 認・本発掘調査-実績報告書集」(芦屋市文化財調査実績報告集3) 芦屋市教育委員会
 竹村忠洋・辻 康男 2007 「第2章 第1節 城山南麓遺跡(C・D地点)」「平成12年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡發
 掘調査概要報告書-震災復興に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果-」(芦屋市文化財調査報告第65
 集) 芦屋市教育委員会
 竹村忠洋・白谷朋世 2004 「徳川大坂城東六甲採石場岩ヶ平刻印群の発掘調査(1)-長州藩毛利家石切丁場における発掘調査
 の成果-」 城郭談話会11月例会資料(2004年11月13日)
 竹村忠洋・白谷朋世 2007 「兵庫県芦屋市芦屋川水車場跡の調査-六甲山地南麓における産業用水車場遺構の検討-」『有限
 責任中間法人日本考古学協会第73回総会研究発表要旨』 有限責任中間法人日本考古学協会
 竹村忠洋・白谷朋世 編 2006 「徳川大坂城東六甲採石場V 岩ヶ平刻印群(第85地点)発掘調査報告書-長州藩毛利家石
 切丁場における発掘調査の成果-」(芦屋市文化財調査報告第61集) 芦屋市教育委員会
 竹村忠洋・白谷朋世 編 2007 「打出小槌遺跡(第41地点)発掘調査報告書」(芦屋市文化財調査報告第66集) 芦屋市教育
 委員会
 竹村忠洋・白谷朋世 編 2007 「芦屋川水車場跡発掘調査報告書-城山古墳群第20号墳と芦屋川水車場跡の発掘調査成
 果-」(芦屋市文化財調査報告第71集) 芦屋市教育委員会
 竹村忠洋・守田めぐみ 編 2009 『月若遺跡発掘調査概要報告書第96地点-都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査

- VII-』〈芦屋市文化財調査報告第76集〉 芦屋市・芦屋市教育委員会
 『陶邑古窯址群』 I 平安学園考古学クラブ
 『須恵器大成』 角川書店
- 田辺昭三 1966
 田辺昭三 1981
 田辺真人・森岡秀人 他 1979 『芦屋の生活文化史－民俗と史跡をたずねて－』 芦屋市教育委員会
 地学団体研究会大阪支部 1999 『大地のおいたち－神戸・大阪・奈良・和歌山の自然と人類』 築地書館
 繁城史研究会 2006
 辻 美紀 1999
 辻 康男 2001
 辻 康男 2002
 辻 康男 2003
 辻 康男・森岡秀人・竹村忠洋 2000 「芦屋の縄文遺跡－震災復興調査の成果から－」(第54回京都縄文文化研究会発表資料)
 辻 康男・森岡秀人・竹村忠洋 2001 「六甲山地南麓における沖積扇状地の層序と考古遺跡の形成過程について－芦屋川・宮川の事例－」(-第36回低湿地遺跡研究会発表要旨・資料-)
- 寺澤 黒・森岡秀人 編 1990 『弥生土器の様式と編年 近畿編II』 木耳社
 都出比呂志 1970
 寺前直人 2006
 富山直人 1994
 中野 咲 2005
 仲彦三郎 編 1911
 長町 彰 1928
 中村 浩 2001
 中村博司 1997
 中村博司 2004
 中村博司 2005
 鍋島敏也・藤原 学 1974
 並河誠所 1734
 西 弘海 1986
 西川卓志 2000
 西嶋定生 1961
 西宮市教育委員会 1967
 西宮市教育委員会 編 1982
 西宮市立郷土資料館 編 1994
 西宮市立郷土資料館 編 1998
 白谷朋世 編 2006
 白谷朋世・竹村忠洋・水津真実 2006
 橋本 久 1971
 橋本 久 1972
 濱野俊一 2003
 原口正三 1979
 東大阪市教育委員会 1973
 兵庫県教育委員会 2000
 兵庫県教育委員会 2004
 広瀬和雄 1975
 藤井重夫 1982
 藤井祐介 1976
- VIII-』〈芦屋市文化財調査報告第76集〉 芦屋市・芦屋市教育委員会
 『大坂城 石垣調査報告書(二)』 日本古城友の会
 「古墳時代中・後期の土師器に関する一考察」『国家形成期の考古学』 大阪大学考古学研究室
 「芦屋川・宮川流域沖積扇状地における更新世末期遺構の地形発達史と遺跡形成過程－縄文時代後期－弥生時代前期の堆積環境を中心として－」『第98近江貝塚研究会発表要旨・資料』
 「遺跡をとりまく自然環境」『六条遺跡発掘調査報告書－芦屋西部第一地区震災復興土地区画整理事業・清水公園建設事業に伴う六条遺跡(第17・18地点)の事前調査記録－』〈芦屋市文化財調査報告第41集〉 芦屋市教育委員会
 「II 1 遺跡をとりまく自然環境」『津知遺跡第142地点ほか発掘調査報告書－芦屋西部第二地区震災復興土地区画整備事に伴う震災復興調査の成果－』〈芦屋市文化財調査報告第46集〉 芦屋市教育委員会
 「芦屋の縄文遺跡－震災復興調査の成果から－」(第54回京都縄文文化研究会発表資料)
 「六甲山地南麓における沖積扇状地の層序と考古遺跡の形成過程について－芦屋川・宮川の事例－」(-第36回低湿地遺跡研究会発表要旨・資料-)
- 「横穴式石室と群集墳の発生」『古代の日本』5 近畿 角川書店
 「ヨモツヘゲイ再考－古墳における飲食と調理の表象としての土器－」『待兼山論叢』40 史学篇 大阪大学大学院文学研究科
 「横穴式石室考－畿内を中心として－」『大阪市文化財論集』 大阪市文化財協会
 「土師器甕の地域色発現過程－古墳時代中・後期の近畿地方を中心に－」三条文化財整理事務所 学習会資料
 「武庫郡東部・名所旧蹟」『西撰大觀』 明輝社
 「摂津山芦屋古墳調査報告」『考古学雑誌』18-11 日本考古学会
 『和泉陶邑窯 出土須恵器の型式編年』 芙蓉書房出版
 「徳川期大坂城石垣築造について」『建設文化としての大坂城石垣築造における土木施工技術の土木史的調査研究』(課題番号07455206 平成7・8年度文部省科学研究〈基盤研究(B)〉研究成果報告書) 建設文化としての大坂城石垣築造に関する総合研究会(研究代表者 天野光三)
 「大阪城と石切丁場遺跡について」『第9回中四国中世城館調査検討会－中四国の城郭にみる石垣普請－』 第9回中四国中世城館調査検討会
 「天下普請－徳川大坂城の石垣構築をめぐって－」『天下普請を支えた石材の調達－東六甲徳川大坂城石切丁場跡－』(現地検討会資料) 主催: 大阪歴史学会 前掲書
 『千里古窯跡群』
 『摂津志』(日本輿地通志畿内部)
 「土器様式の成立とその背景」『考古学論考 小林行雄博士古稀記念論文集』 小林行雄博士古稀記念論文集刊行委員会 真陽社
 「八十塚古墳群老松町支群第3号墳の調査」「八十塚古墳群老松町支群第4号墳の調査」『西宮市埋蔵文化財発掘調査報告書』(文化財資料44) 西宮市教育委員会
 「古墳と大和政権」『岡山史学』10
 『苦楽園五番町古墳－移築保存記録』 西宮市教育委員会
 『西宮市埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表』(文化財資料23) 西宮市教育委員会
 『八十塚発掘－38年間にわたる群集墳発掘調査の成果－』
 『紅野芳雄「考古小録」－西宮考古学のパイオニア－』
 『八十塚古墳群(第106地点)発掘調査報告書－八十塚古墳群岩ヶ平支群第10号墳と徳川大坂城東六甲採石場岩ヶ平支群の調査－』(芦屋市文化財調査報告第63集) 芦屋市教育委員会
 『八十塚古墳群(第106地点)発掘調査報告書－八十塚古墳群岩ヶ平支群第10号墳と徳川大坂城東六甲採石場岩ヶ平刻印群の調査－』(芦屋市文化財調査報告第63集) 芦屋市教育委員会
 『御堂ヶ池群集墳の『列石』について』『嵯峨野の古墳時代』京都大学考古学研究会
 『古墳は語る』『宝塚市史』1 宝塚市
 『2. 歴史的環境と周辺の遺跡』『徳川大坂城東六甲採石場Ⅲ 岩ヶ平支群(第12次)発掘調査報告書』(芦屋市文化財調査報告第44集) 芦屋市教育委員会
 『墓の中の須恵器－塚原古墳群の須恵器』『日本の原始美術4 須恵器』 講談社
 『山畠古墳群1』(東大阪市文化財調査報告書第1冊) 東大阪市教育委員会
 『兵庫県遺跡地図－第1分冊(発掘調査の手引き・地名表)』
 『兵庫県遺跡地図－第1分冊－(発掘調査の手引き・遺跡地図地名表)』
 『群集墳研究の一情況－六世紀代政治構造把握への方法論・覚書－』『古代研究』7 元興寺仏教民俗資料研究所考古学研究室
 『大坂城石垣符号について』『大坂城の諸研究』(日本城郭史研究叢書8) 名著出版
 『旧石器・縄文時代』『新修 芦屋市史』資料篇1 芦屋市役所

- 藤井祐介・森岡秀人 1974 『朝日ヶ丘縄文遺跡・会下山遺跡』〈芦屋市文化財調査報告第8集〉 芦屋市教育委員会
- 藤岡 弘 1967 『芦屋市埋蔵文化財包蔵地台帳 八十塚E号墳発掘調査報告書』〈芦屋市文化財調査報告第5集〉 芦屋市教育委員会
- 藤岡 弘 1971 『八十塚古墳群予察調査報告』 芦屋市教育委員会
- 藤岡 弘 1986 『八十塚古墳群岩ヶ平支群(22号墳)』『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和58年度』 兵庫県教育委員会
- 藤岡 弘・勇正廣 1978 『山芦屋古墳』『日本考古学年報』29(1976年版) 日本考古学協会
- 藤岡 弘・橋爪康至 1966 『芦屋市内出土遺物について』『朝日ヶ丘縄文遺跡 八十塚古墳群』〈芦屋市文化財調査報告第4集〉 芦屋市教育委員会
- 藤岡 弘 他 1967 『芦屋市埋蔵文化財包蔵地台帳 八十塚E号墳発掘調査報告書』〈芦屋市文化財調査報告第5集〉 芦屋市教育委員会
- 藤岡 弘・森岡秀人 1980 『城山古墳群緊急発掘調査概報』〈芦屋市文化財調査遺跡調査No.8〉 芦屋市教育委員会
- 藤川祐作 1969 『大坂築城石と芦屋』『芦の芽』16 芦の芽グループ(孔版)
- 藤川祐作 1972 『摂津大坂城(六) - 芦屋山中の採石場 - 』〈城と陣屋〉65 日本古城友の会
- 藤川祐作 1976 『八十刻印群の復元 - 徳川大坂城の研究3』『わだち』12 わだち編集部(孔版)
- 藤川祐作 1979 『採石場としての岩ヶ平』『兵庫県埋蔵文化財調査集報』4 兵庫県教育委員会
- 藤川祐作 1985a 『徳川大坂城・東六甲採石場の西限の再考』『郷土史料室だより』'85夏 - ゆり号 芦屋市教育委員会
- 藤川祐作 1985b 『大坂城と採石場』『鹿児』111 加古川史学会
- 藤川祐作 1985c 『摂津大坂城(十) - 徳川大坂城東六甲採石場甲山刻印群 - 』〈城と陣屋〉168 日本古城友の会
- 藤川祐作 1991 『六甲山系の徳川大坂城採石場と積み出し地 - 芦屋市呉川町発見の新資料を中心に - 』『歴史と神戸』168 神戸史学会
- 福原潜次郎 1904 『摂津国武庫郡打出村の古墳』『考古界』5 日本考古学会
- 古川久雄 1975 『八十塚古墳群における呼称統一の一試案』『八十塚12・15号墳の調査』 六甲南麓群集墳測量調査団
- 古川久雄 1975 『芦屋市内出土古墳時代関係遺跡遺物調査報告(I)』〈市史編集作業プリント〉 芦屋市史編集室
- 古川久雄 1976a 『市内出土の古墳時代遺物』『新修芦屋市史』資料篇1 芦屋市役所
- 古川久雄 1976b 『芦屋市打出駒塚古墳について』『武陽史学』15 武陽史学会
- 古川久雄 1977 『朝日ヶ丘町257番地の須恵器出土地について』『芦の芽』30 芦の芽グループ
- 古川久雄 1988 『徳川大坂城の採石場』『芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図・利用の手引き』〈芦屋市文化財調査報告第16集〉 芦屋市教育委員会
- 古川久雄 1990 『芦屋市八十塚古墳群岩ヶ平支群第10号墳の調査 - 古墳損壊に伴う確認調査の結果 - 』〈芦屋市文化財調査報告第20集〉 芦屋市教育委員会
- 古川久雄 1992 『岩ヶ平刻印群における池田家筆頭家老人名刻印の発見』『蘆樋』65 芦の芽グループ
- 古川久雄 1993 『徳川大坂城東六甲採石場 - 調査研究25年の歩みと課題』〈考古学研究会関西例会第65回研究会発表資料〉 考古学研究会
- 古川久雄 2003 『岩ヶ平刻印群における採石大名と採石領域』『徳川大坂城東六甲採石場Ⅲ岩ヶ平刻印群(第12次)発掘調査報告書 - 芦屋市六麓莊浄水場高区配水池(水道施設)築造工事に伴う唐津藩採石場跡の発掘調査 - 』〈芦屋市文化財調査報告第44集〉 芦屋市教育委員会
- 古川久雄 2004 『徳川大坂城と東六甲採石場』『第9回中四国中世城館調査検討会 - 中四国の城郭にみる石垣普請 - 』 第9回中四国中世城館調査検討会
- 古川久雄・森岡秀人・濱野俊一 他 2003 『徳川大坂城東六甲採石場Ⅲ 岩ヶ平刻印群(第12次)発掘調査報告書 - 芦屋市六麓莊浄水場高区配水池(水道施設)築造工事に伴う唐津藩採石場跡の発掘調査 - 』〈芦屋市文化財調査報告第44集〉 芦屋市教育委員会
- 古川久雄 編 1990 『芦屋市八十塚古墳群岩ヶ平支群第10号墳の調査 - 古墳損壊に伴う確認調査の結果 - 』〈芦屋市文化財調査報告第20集〉 芦屋市教育委員会
- 古川久雄 編 1999 『兵庫県芦屋市・西宮市所在 岩ヶ平刻印群 刻印石資料集』 摂陽文化財研究所
- 古川久雄 編 2002 『徳川大坂城東六甲採石場と岩ヶ平刻印群』『平成13年度国庫補助事業 徳川大坂城東六甲採石場Ⅱ 岩ヶ平刻印群(第11次)発掘調査報告書』〈芦屋市文化財調査報告第42集〉 芦屋市教育委員会
- 細川道草 1963 『芦屋郷土史』 芦屋史談会
- 前田 昇 1971 『第一章 芦屋の自然環境』『新修 芦屋市史』本篇 芦屋市役所
- 前田義人 1974 『苦楽園5・6・7・8号墳』『西宮の文化財 - 埋蔵文化財篇 - 』(文化財資料7) 西宮市教育委員会
- 水野正好 1974 『群集墳の群構造とその性格 - 兵庫県小野市所在東野中番地区古墳群をめぐる分析 - 』『高山古墳群調査報告書』(小野市文化財調査報告書第6冊) 小野市教育委員会
- 水野正好 1974 『雲雀山東尾根中古墳群の群構造とその性格』『古代研究』4(特集・群集墳研究) 元興寺仏教民俗資料研究所考古学研究室
- 南 博史 編 1985 『寺田遺跡発掘調査報告書』 財團法人 古代學協会
- 武庫川女子大学考古学研究会 1984 『兵庫県芦屋市 旭塚古墳 - 表六甲城山群集墳中の一巨石墳の測量調査とその考証 - 』
- 武庫郡教育会 編 1921 『武庫郡誌』 武庫郡教育会
- 武藤 誠 1956 『遺跡・遺物から見た古代の芦屋地方』『芦屋市史』本編 芦屋市教育委員会
- 武藤 誠 1977 『山芦屋古墳発掘調査の概要』(現地説明会資料) 芦屋市教育委員会
- 武藤 誠・村川行弘 1971 『考古学上からみた芦屋』『新修芦屋市史』本篇 芦屋市役所

- 武藤 誠・森岡秀人・上田祥子 1976 「文献解題 吉岡昭とその遺稿について」『新修芦屋市史』資料篇1 芦屋市役所
- 武藤 誠 編 1971 『新修 芦屋市史』本篇 芦屋市役所
- 武藤 誠 編 1978 「劍谷支群（2号墳）」「苦楽園の古墳」〈西宮市文化財調査報告第2集〉 西宮市教育委員会
- 村上欣三 1905 「摂津国打出村の古墳」『考古界』8-2 日本考古学会
- 村上 隆 2001 「古代金宵系の材質と製作技術の歴史的変遷に関する材料科学的研究」『2001年度 文部省科学研究費助成研究』 奈良文化財研究所
- 村上紘揚 1978 「兵庫県〔動向〕」『日本考古学年報』29（1976年版） 日本考古学協会
- 村川行弘 1959 『芦屋市史録』〈芦屋市文化財調査報告第1集〉 芦屋市教育委員会
- 村川行弘 1962 『大坂城と芦屋』〈芦屋市文化財調査報告第2集〉 芦屋市教育委員会
- 村川行弘 1966a 「朝日ヶ丘古墳」「八十塚古墳群」「朝日ヶ丘先土器遺跡・朝日ヶ丘縄文前期単純遺跡・朝日ヶ丘古墳・八十塚古墳群」〈芦屋市文化財調査報告第4集〉 芦屋市教育委員会
- 村川行弘 1966b 「剣谷1号墳」〈芦屋市文化財調査報告第4集〉 芦屋市教育委員会
- 村川行弘 1966c 「最近発見された遺物・遺跡」〈芦屋市文化財調査報告第4集〉 前掲書
- 村川行弘 1966d 「苦楽園五番町古墳」〈文化財資料3〉 西宮市教育委員会
- 村川行弘 1966e 「朝日ヶ丘先土器遺跡・朝日ヶ丘縄文前期単純遺跡・朝日ヶ丘古墳・八十塚古墳群」〈芦屋市文化財調査報告第4集〉 芦屋市教育委員会
- 村川行弘 1967 『芦屋市埋蔵文化財包蔵地台帳 八十塚E号墳発掘調査報告書』〈芦屋市文化財調査報告書第5集〉 芦屋市教育委員会
- 村川行弘 1970a 「現存大坂城の石垣刻印」「大坂城の謎」 学生社
- 村川行弘 1970b 『大坂城の謎』 学生社 前掲書
- 村川行弘 1970c 『芦屋廃寺址』〈芦屋市文化財調査報告第7集〉 芦屋市教育委員会
- 村川行弘 1971 「考古学上からみた芦屋」『新修芦屋市史』本篇 芦屋市役所
- 村川行弘 1979 「親王塚・親王寺所蔵遺物の再検討」『考古学雑誌』第65巻 第3号 日本考古学会
- 村川行弘 2002 『大坂城の謎』〈改訂新版〉 学生社
- 村川行弘・石野博信 1964 『会下山遺跡』〈芦屋市文化財調査報告第3集〉 芦屋市教育委員会
- 村川行弘・石野博信・森岡秀人 1985 『増補・会下山遺跡』 明新社
- 村川行弘・森岡秀人 1976 「弥生時代」『新修芦屋市史』資料篇1 芦屋市役所
- 望月精司 2001 「須恵器甕の製作痕跡と成形方法」「つぼとかめのつくり方—須恵器貯蔵具を考えるII-」前掲書
- 森 浩一 1962 「後期古墳の討論を回顧して」『古代学研究』30（特集後期古墳の研究） 古代学研究会
- 森岡秀人 1972 「考察とまとめ」「八十塚14号墳の測量調査」 芦の芽グループ考古学研究会・兵庫県立芦屋高校史学研究部
- 森岡秀人 1973 「向こうの山に群がる黄泉国—六甲南麓群集墳解明への一素描—」『芦の芽』24 芦の芽グループ
- 森岡秀人 1974a 『金津山古墳墳丘実測調査の結果概要報告』 芦屋市史編集室
- 森岡秀人 1974b 「八十塚E号墳緊急立会い調査結果の概要」〔プリント〕 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1976 『仮称城山古墳予察調査概要報告』 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1977a 「〈書評〉関西学院考古No.3－西摂地域群集墳解明への一布石－」「芦桶」15 芦の芽グループ
- 森岡秀人 1977b 「〈研究ノート〉TK217型式における地方窯の第2次拡散と群集墳の追葬－芦屋八十塚古墳群出土須恵器製作地の再検討－」「わだち」14 兵庫県立芦屋高校史学研究部OB会
- 森岡秀人 1977c 「山芦屋古墳緊急発掘調査の概要－白江邸西側堀建設工事に伴う事前調査－」〈芦屋市文化財資料（1977）遺跡調査No.4〉 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1977d 「芦屋市山芦屋古墳（仮称城山古墳）緊急発掘調査終了報告」〈芦屋市文化財資料（1977）遺跡調査No.1〉 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1977e 「貴重な資料を発掘－山芦屋古墳・埋蔵文化財発掘調査の記録」「広報あしゃ」5月号 芦屋市役所
- 森岡秀人 1978a 「芦屋市八十塚6・7・8号墳所在地開発に伴う予察調査結果の概要」〈芦屋市文化財資料（1978）遺跡調査No.1〉 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1978b 「<資料紹介>山芦屋古墳隣接地出土の須恵器」「あしゃ文化財短信」創刊号 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1979a 「解明進む八十塚古墳群（芦屋遺跡めぐり5）」「海技通信」340 海技大学校
- 森岡秀人 1979b 「II 調査研究の沿革」「VII 総括－八十塚古墳群の展開と岩ヶ平支群のもつ意義－」「芦屋・八十塚古墳群岩ヶ平支群の調査」〈芦屋市文化財報告第11集〉 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1979c 「城山古墳群と山芦屋古墳」「芦屋の生活文化史－民俗と史跡をたずねて－」 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1980 「芦屋遺跡めぐり(9)山芦屋古墳の出現－巨石墳の系譜を求めて－」「海技通信」344 海技大学校
- 森岡秀人 1981a 「東六甲の高地性集落（上）」「古代学研究」96 古代学研究会
- 森岡秀人 1981b 「西摂の縄文文化展－表六甲の先住者の生活を探る」 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1982a 「阪神地方 その過疎時代－“西摂の縄文文化”展に寄せて－」「地域史研究 芦の芽」35 芦の芽グループ
- 森岡秀人 1982b 「城山南麓遺跡A地点確認調査報告書－芦屋市山芦屋町・児島邸建設予定地の埋蔵文化財予察調査結果の概要－」 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1982c 「城山古墳群第4・10号墳緊急発掘調査」『昭和55年度 兵庫県埋蔵文化財調査年報』 兵庫県教育委員会
- 森岡秀人 1982d 「山芦屋遺跡N地点緊急発掘調査」『昭和55年度 兵庫県埋蔵文化財調査年報』 兵庫県教育委員会
- 森岡秀人 1982e 「山芦屋遺跡S1地点緊急発掘」『昭和55年度 兵庫県埋蔵文化財調査年報』 兵庫県教育委員会
- 森岡秀人 1983a 「城山南麓遺跡B地点緊急発掘調査の概要－城山17号墳の発掘と中世建物群の部分確認－」 芦屋市教育委員会

- 森岡秀人 1983b 「追葬と棺体配置－後半期横穴式石室墳の空間利用原理をめぐる二、三の考察－」『関西大学考古学研究室開設参拾周年記念考古学論叢』 関西大学文学部考古学研究室
- 森岡秀人 1984a 「八十塚古墳群岩ヶ平支群第23・24・25・29号墳」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和56年度』 兵庫県教育委員会
- 森岡秀人 1984b 「表六甲東南麓における群集墳の動静」『歴史と神戸』第23巻第4号 神戸史学会
- 森岡秀人 1984c 「旭塚古墳および城山・三条古墳群をめぐる諸問題」『兵庫県芦屋市 旭塚古墳－表六甲城山群集墳中の一巨石墳の測量調査とその考証－』 武庫川女子大学考古学研究会
- 森岡秀人 1985a 「城山南麓遺跡A地点」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和57年度』 兵庫県教育委員会
- 森岡秀人 1985b 「山芦屋遺跡（S3地点）」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和57年度』 兵庫県教育委員会
- 森岡秀人 1986a 「城山古墳群第17号墳」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和58年度』 兵庫県教育委員会
- 森岡秀人 1986b 「三条古墳群」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和58年度』 兵庫県教育委員会
- 森岡秀人 1986c 「三条寺ノ内B墳所在推定地」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和58年度』 兵庫県教育委員会
- 森岡秀人 1986d 「城山古墳群第4・10号墳（山芦屋町19番地1・7・8）」『埋蔵文化財調査メモリアル'80～'85』〈芦屋市文化財調査報告第14集〉 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1986e 「山芦屋遺跡S3地点（山芦屋町58番地）」『埋蔵文化財調査メモリアル'80～'85』〈芦屋市文化財調査報告第14集〉 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1986f 「城山南麓A地点遺跡（山芦屋町6番地8）」『埋蔵文化財調査メモリアル'80～'85』〈芦屋市文化財調査報告第14集〉 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1986g 「城山南麓B地点遺跡（山芦屋町4・5・6番地）」『埋蔵文化財調査メモリアル'80～'85』〈芦屋市文化財調査報告第14集〉 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1986h 「近年の埋蔵文化財試掘・立合調査一覧」『埋蔵文化財調査メモリアル'80～'85』〈芦屋市文化財調査報告第14集〉 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1987a 「古墳時代の芦屋地方（上）－近年の遺跡調査をふりかえって－」『兵庫県の歴史』23 兵庫県
- 森岡秀人 1987b 「山芦屋遺跡（E1地点）」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和59年度』 兵庫県教育委員会
- 森岡秀人 1988a 「古墳時代の芦屋地方（下）－近年の遺跡調査をふりかえって－」『兵庫県の歴史』24 兵庫県
- 森岡秀人 1988b 「兵庫県芦屋市」『角川 日本地名大辞典』28 角川書店
- 森岡秀人 1988c 「三条寺ノ内A・B墳」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和60年度』 兵庫県教育委員会
- 森岡秀人 1988d 「三条古墳群（南縁）」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和60年度』 兵庫県教育委員会
- 森岡秀人 1990a 「V. (3)トレンチ調査の所見」『芦屋市八十塚古墳群岩ヶ平支群第10号墳の調査－古墳損壊に伴う確認調査結果－』〈芦屋市文化財調査報告第20集〉 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1990b 「1980～1990年 この10年の文化財保護行政」『芦屋市教育委員会40周年記念誌』 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1992 「群集墳の形成」『古代を考える 古墳』（白石太一郎 編） 吉川弘文館
- 森岡秀人 1995 「海辺の古墳－揖津・金津山古墳と打出小植古墳について－」『古墳文化とその伝統－西谷眞治先生古稀記念論文集』 勉誠社
- 森岡秀人 1996 「8. 山芦屋遺跡」『平成7年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書』〈芦屋市文化財調査報告第27集〉 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 2001 「揖津国菟原郡葦屋郷・賀美郷考証覚書」『考古学論集』5 考古学を学ぶ会
- 森岡秀人 2002 「揖津・八十塚古墳群と菟原郡葦屋郷・賀美郷周辺の古代史」『八十塚古墳群の研究』〈関西大学文学部考古学研究第7冊・芦屋市文化財調査報告第33集〉 関西大学文学部考古学研究室・芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 2003 「徳川氏再建大坂城の石切り丁場の調査と保護－芦屋市の行政的取り組みと成果を中心にして－」『石垣普請の風景を読む－城の石垣はいかにして築かれたか－』 東北芸術工科大学
- 森岡秀人 2005a 「石切丁場の出現－徳川大坂城・芦屋市東六甲石切場の発掘調査から－」『国際シンポジウム 韓国倭城と大坂城－西国大名は倭城築造から何を学んだか？』 倭城・大坂城国際シンポ実行委員会
- 森岡秀人 2005b 「六甲花崗岩巨石の大量利用と徳川大坂城の再築をめぐって」『関西近世考古学研究XIII－石から見た近世文化－』資料集 関西近世考古学研究会
- 森岡秀人 2007a 「飛鳥時代の終末期古墳・鷹尾城関連遺構、および準高地性遺跡」『平成12年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書－震災復興に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果－』〈芦屋市文化財調査報告第65集〉 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 2007b 「葦屋駅家と古代山陽道路線諸説をめぐっての一考察」『考古学論究－小笠原好彦先生退任紀念論－』 真陽社
- 森岡秀人 2008 「第1章 考古学が語る本庄地区周辺の地域史」『本庄村史 歴史編－神戸市東灘区深江・青木・西青木のあゆみ－』 本庄村史編纂委員会
- 森岡秀人 2009 「六甲山地南麓地域の終末期古墳－周辺施設に竜山石を用いた旭塚古墳の調査報告－」 古代学研究会10月例会（2009年10月17日）発表資料
- 森岡秀人 編 1979 『三条岡山遺跡』〈芦屋市文化財調査報告第10集〉 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 編 1980 『芦屋市埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表（第1分冊）』〈芦屋市文化財調査報告第12集〉 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 編 1983 『八十塚古墳群の発掘調査概報－岩ヶ平支群F小支群西地区の緊急調査成果概要－』〈芦屋市文化財調査報告第13集〉 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 編 1984 「3 八十塚古墳群岩ヶ平支群第23・24・25・29号墳」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和56年度』

- 兵庫県教育委員会
- 森岡秀人 編 1986 「八十塚古墳群岩ヶ平第6・7・8号墳」『埋蔵文化財メモリアル'80~'85』〈芦屋市文化財調査報告第14集〉 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 編 1993 『芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図および利用の手引き』〈芦屋市文化財調査報告第24集〉 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 編 1998 『徳川大坂城東六甲採石場I - 芦屋墓園拡張工事に伴う奥山刻印群K地区内の事前発掘調査-』〈芦屋市文化財調査報告第31集〉 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 編 2004 『前田公園建設事業に伴う前田遺跡（第20地点）発掘調査概要報告書 - 弥生前期水田跡の構造と水利動態-』〈芦屋市文化財調査報告第52集〉 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 他 1973a 『八十塚15号墳発掘調査略報』 六甲南麓群集墳測量調査団（芦の芽グループ・兵庫県立芦屋高校）
- 森岡秀人 他 1973b 『八十塚13号墳の測量調査 - 概要報告-』〈六甲南麓群集墳測量調査第2報〉 六甲南麓群集墳測量調査団（芦の芽グループ・兵庫県立芦屋高校）
- 森岡秀人 他 1977a 『芦屋市山芦屋古墳（仮称城山古墳）緊急発掘調査終了報告』〈芦屋市文化財資料（1977）遺跡調査No.1〉 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 他 1977b 『貴重な資料を発掘 - 山芦屋古墳・埋蔵文化財発掘調査の記録』『広報あしや』5月号 芦屋市役所
- 森岡秀人・坂田典彦 2004 『津知遺跡（第181地点）発掘調査報告書 - 共同住宅建設事業に伴う遺跡西限部の様相把握-』〈芦屋市文化財調査報告第50集〉 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・坂田典彦 2005a 『IV. 調査のまとめ』『若宮遺跡（第42地点）発掘調査報告書 - 須恵器集中遺存地点の調査と成果』〈芦屋市文化財報告第58集〉 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・坂田典彦 2005b 『城郭研究の一観点 - 徳川大坂城東六甲採石場の発掘調査から-』『日本考古学協会第71回総会研究発表要旨』 日本考古学協会
- 森岡秀人・坂田典彦 2005c 『徳川大坂城東六甲採石場IV 岩ヶ平石切丁場跡 - 宅地造成工事に伴う埋蔵文化財事前調査の記録と成果-』〈芦屋市文化財調査報告第60集〉 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・坂田典彦 2008 『芦屋市旭塚古墳の調査成果 - 多角形墳・竜山石・内部構造が明らかになった終末期古墳-』『古代文化』59-IV 古代学協会
- 森岡秀人・坂田典彦 2009 『摂津における終末期古墳の一様相 - 旭塚古墳の分析を中心-』『有限責任中間法人日本考古学協会第75回総会研究発表要旨』 有限責任中間法人日本考古学協会
- 森岡秀人・田口泰久 1991 『芦屋と大阪城』『芦屋の歴史と文化財 - 歴史資料展示室常設展示図録-』 芦屋市立美術博物館
- 森岡秀人・竹村忠洋 2000 『阪神・淡路大震災に伴う埋蔵文化財震災復興調査の経過と課題 - 芦屋市における5年間を振りかえって-』『地震災害と考古学 I - 阪神・淡路大震災の被災状況と復興への取り組み-』 日本考古学協会阪神・淡路大震災埋蔵文化財対策特別委員会
- 森岡秀人・竹村忠洋 2005a 『19. 八十塚古墳群第50号墳』『平成9・10年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査 - 震災復興に伴う埋蔵文化財緊急確認・本発掘調査 - 実績報告書』〈芦屋市文化財調査実績報告書2〉 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・竹村忠洋 2005b 『12. 城山・三条古墳群』『平成9・10年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査 - 震災復興に伴う埋蔵文化財緊急確認・本調査 - 実績報告書』〈芦屋市文化財調査実績報告書2〉 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・竹村忠洋・坂田典彦 2006 「第4章 第5節 岩ヶ平刻印群（第70地点）の調査」『岩ヶ平刻印群発掘調査報告書 第32・33・45・67・70・79・81・91地点 - 平成9・11・14・15・16年度国庫補助事業-』徳川大坂城東六甲採石場VI 〈芦屋市文化財調査報告第64集〉 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・竹村忠洋 編 2001 『芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図利用の手引き』〈芦屋市文化財調査報告第40集〉 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・白谷朋世 編 1992 『平成3年度国庫補助事業 芦屋廃寺遺跡ほか発掘調査概要報告書 月若遺跡第12次地点月若遺跡第14次地点 八十塚古墳群岩ヶ平支群第50号墳』〈芦屋市文化財調査報告第22集〉 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・藤岡 弘 1980 『城山古墳群緊急発掘調査概報』〈芦屋市文化財調査遺跡調査No.8〉 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・藤川祐作 1980 『芦屋市埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表（第1分冊）』 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・藤川祐作 2005 『石切丁場の考古学 - 徳川期大坂城東六甲採石場の分析から-』（考古学研究会第137回関西例会発表資料） 考古学研究会
- 森岡秀人・藤川祐作 2008 『矢穴の型式学』『古代学研究』180 古代学研究会
- 森岡秀人・藤田和尊 1984 『兵庫県東部 - 西摂地方-』『古代学研究』104 特集：各地域における最後の前方後円墳（西日本Ⅲ） 古代学研究会
- 森岡秀人・古川久雄 1992 『芦屋市立美術博物館野外歴史資料展示における近世考古資料の一例 - 兵庫県芦屋市呉川町出土の大坂城再築関係石材について-』『阡陵』（関西大学博物館学課程創立三十周年記念特集） 関西大学
- 森岡秀人・古川久雄 1998 『徳川大坂城東六甲採石場I - 芦屋墓園拡張工事に伴う奥山刻印群K地区内の事前発掘調査-』〈芦屋市文化財調査報告第31集〉 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・古川久雄 2002 『平成13年度国庫補助事業 徳川大坂城東六甲採石場II 岩ヶ平刻印群（第11次）発掘調査報告書』〈芦屋市文化財調査報告第42集〉 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・古川久雄 編 1979 『芦屋・八十塚古墳群岩ヶ平支群の調査』〈芦屋市文化財調査報告第11集〉 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・古川久雄 他 編 1979 『芦屋・八十塚古墳群岩ヶ平支群の調査』『兵庫県埋蔵文化財調査集報』4 兵庫県教育委員会
- 森岡秀人・村川義典 1986 『三条岡山遺跡〔第5次調査〕（三条町238番地）』『埋蔵文化財調査メモリアル'80~'85』〈芦屋市

- 文化財調査報告第14集〉 芦屋市教育委員会
森岡秀人・村川義典 1996 「第6章 摂津国」『兵庫県の考古学』 吉川弘文館
森岡秀人・和田秀寿・田口泰久 1991 『芦屋の歴史と文化財－歴史資料展示室常設展示図録－』 芦屋市立美術博物館
森岡秀人・和田秀寿・古川久雄 他 1990 『芦屋市八十塚岩ヶ平支群第10号墳の調査－古墳損壊に伴う確認調査結果－』
〈芦屋市文化財調査報告第20集〉 芦屋市教育委員会
山芦屋遺跡発掘調査団 1981 『山芦屋遺跡（S2地点）の発掘調査の概要』
山本圭二 2001 「VII考察 6東山古墳群における鉄釘・棺金具と木棺」『東山古墳群Ⅱ』 多可郡中町教育委員会・京都府立大学考古学研究室 編
吉岡 昭 1944a 『摂津国芦屋郷土石器時代文化研究』〔和綴墨書〕
吉岡 昭 1944b 遺稿『考古隨録』〔和綴墨書〕
吉田宣夫・金森安孝 1997 「業平遺跡（第31地点）」『平成8年度 年報』 兵庫県教育委員会
渡邊邦雄 1996a 「横穴式石室の前庭部構造と墓前祭祀」『ひょうご考古』2 兵庫考古研究会
渡邊邦雄 1996b 「横穴式石室における墓前祭祀」『ひょうご考古』5 兵庫考古研究会
渡邊邦雄 2001 「横穴式石室施設考－墳丘内暗渠と墳丘内列石を中心として－」『古代文化』第53巻第8号 財団法人古代学協会
渡邊邦雄 2002 「横穴式石室前庭部における祭祀施設」『古代文化』第54巻第2号 財団法人古代学協会
渡邊邦雄 他 1992 『神戸市東灘区生駒古墳調査報告－六甲東南麓地域の終末期古墳の測量調査と後期古墳研究動向－』〈神戸大学考古学研究会調査報告第2集〉 神戸大学考古学研究会
渡辺 昇 編 2003 『芦屋市 六条遺跡－芦屋市西部第一地区震災復興土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書－』
〈兵庫県文化財調査報告第256冊〉 兵庫県教育委員会
和田晴吾 2002 「石切場」『日本考古学事典』（編集代表 田中琢・佐原真） 三省堂
和田秀寿 1984 「〈写真速報〉芦屋市城山17号墳の調査と破壊」『芦の芽』36 芦の芽グループ

図版
PLATE

[遺構]





解体前の旭化成社宅と城山（南から）



解体前の旭化成社宅と発掘前の旭塚古墳（南から）

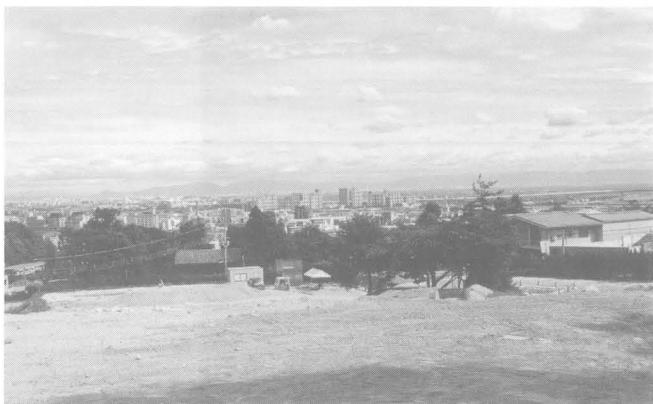
図 版 2



調査前の事業地の現状（南から）



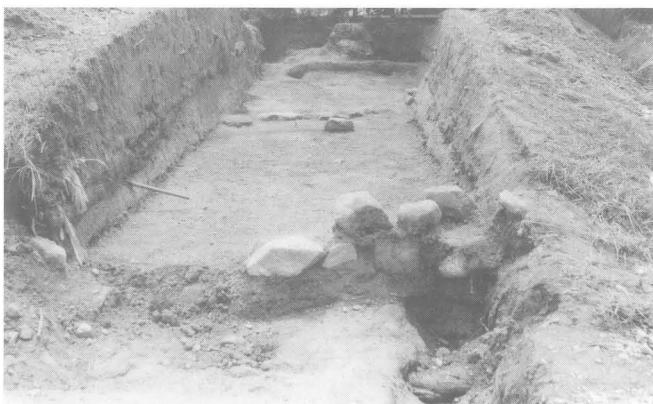
調査前の事業地の現状（南西から）



第1次確認調査前の状況（調査地北東端・北西から）



トレンチ1と旭塚古墳 遠景（北西から）



トレンチ1 旭塚古墳・墳丘部石列検出状況（北西から）



トレンチ1 旭塚古墳・墳丘部北東壁土層断面（南西から）



トレンチ2 東端・遺物出土状況（北東から）



トレンチ3 表土除去後の状況（北東から）



トレンチ4 表土・盛土除去後の状況（南西から）

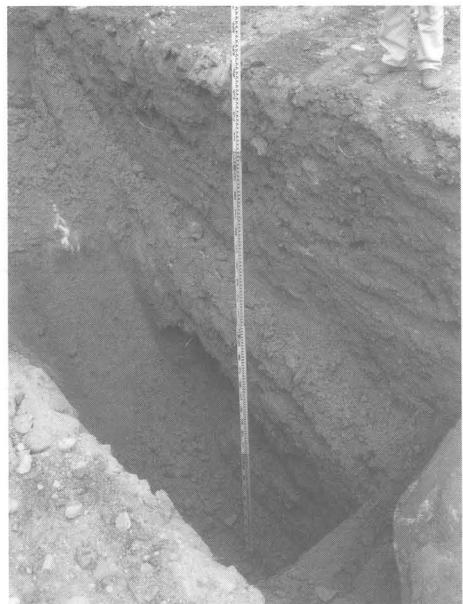


トレンチ5 完掘状況（南から）

図版 4



トレンチ6 完掘状況（東から）



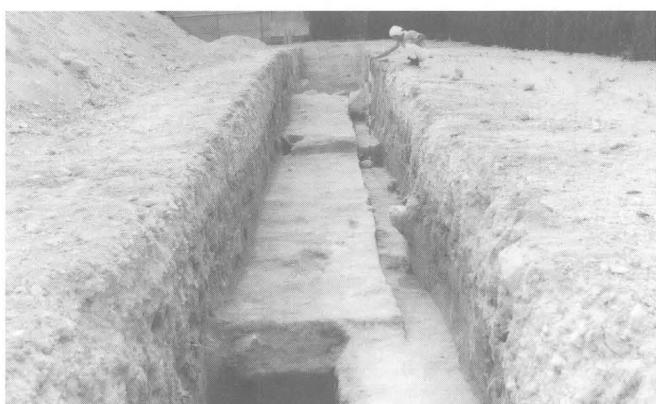
トレンチ6
基礎床の確認状況
(GL-3.2m～3.4m
で地山検出)



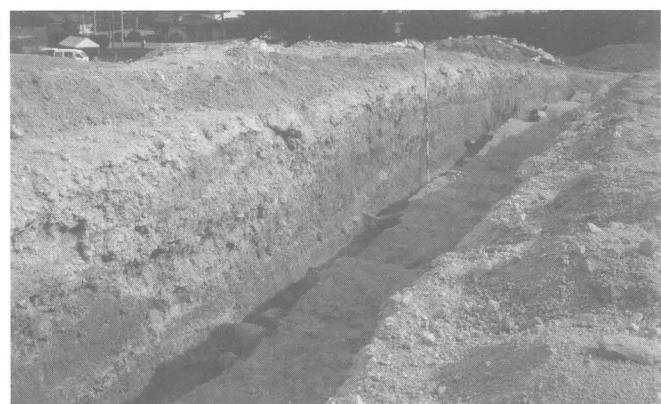
トレンチ7 完掘状況東・南壁断面（西から）



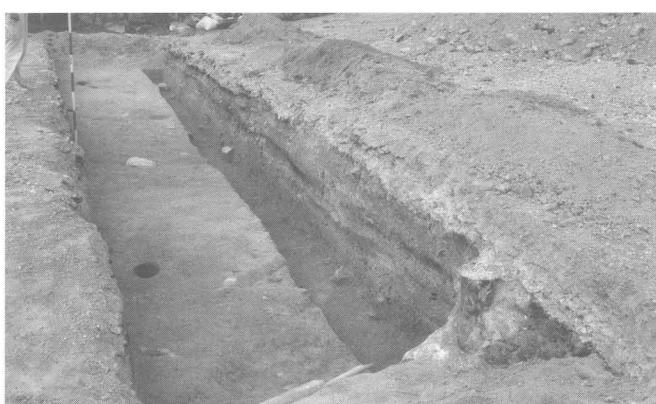
トレンチ8 完掘状況北西壁断面（南西から）



トレンチ9 完掘状況（東から）



トレンチ10 完掘状況東壁断面（北西から）



トレンチ11 北壁土層断面（南西から）



第1次確認調査地中央部の埋め戻し状況（西から）



第2次確認調査前の状況（北西から）



調査区機械掘削の状況（北西から）



Aトレンチ 人力掘削開始風景（北から）



Aトレンチ 遠景（南西から）



2層上面精査状況（西から）

図版 6



A トレンチ 深掘部 2段目掘削状況（南東から）



A トレンチ 北域 磯出土状況（南東から）



A トレンチ 2層上面精査状況（北から）



A トレンチ 北半部 磯出土状況（南西から）



A トレンチ 機械掘削後の精査面（北東から）



A レンチ 南半部と拡張部 磯出土状況（南から）



A レンチ 北壁土層断面（1段目）



A レンチ 北半部 土層断面（南東から）



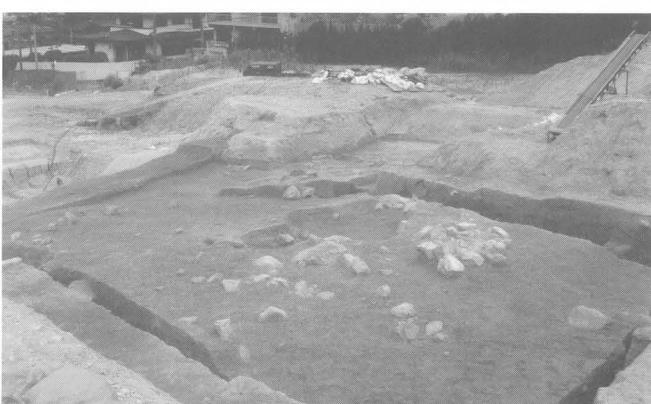
A レンチ 北半部 2層下面礫出土状況（北西から）



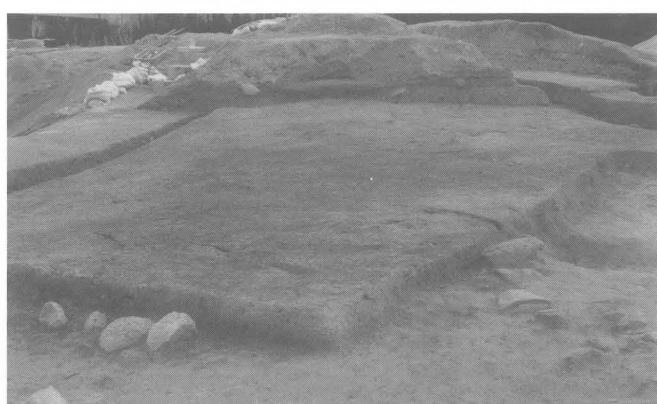
A レンチ 北半部 2層下面礫出土状況（北西から）



A レンチ 南端部 完掘状況（南東から）



A レンチ 南半部 遺物出土状況俯瞰（北東から）



A レンチ 南端部 遺物検出状況（東から）

図版 8



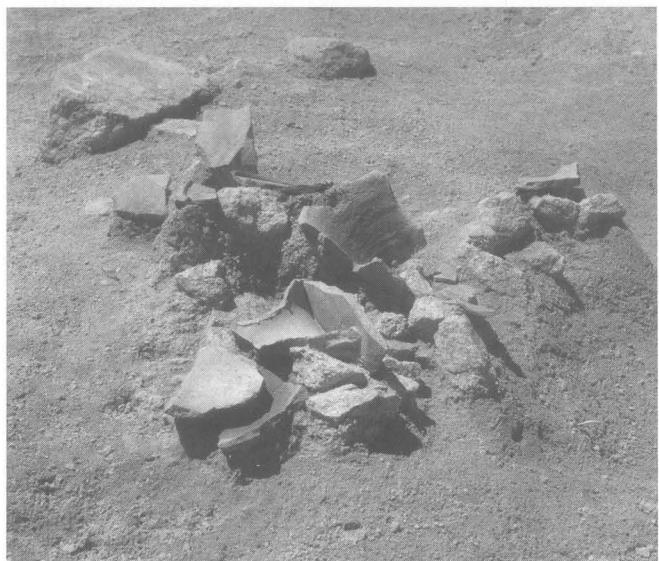
A トレンチ 土器溜り A 遺物検出状況（南から）



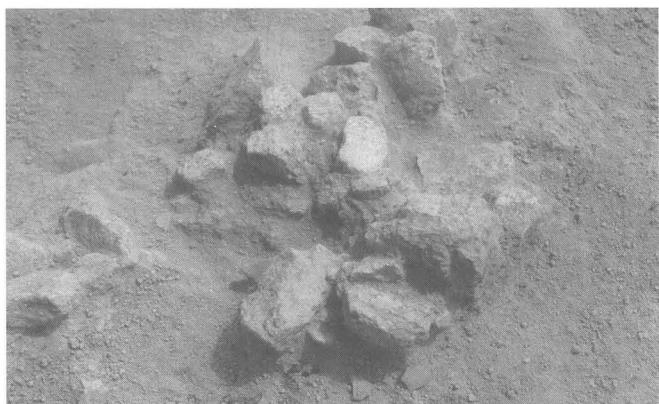
A トレンチ 南半部 遺物出土状況俯瞰（北東から）



A トレンチ 土器溜り A と拡張部の状況（東から）



A トレンチ 土器溜り A 遺物検出状況（北西から）



A トレンチ 土器溜り A 土器取り上げ後の状況（東から）



A トレンチ 土器溜り A 土器取り上げ状況（南東から）



A トレンチ 土器溜り A 土器取り上げ後の状況（西から）



A トレンチ 土器溜り A と完形土器検出状況(北東から)



A トレンチ 南半部 遺物出土状況



A トレンチ 溝201完形土器検出状況俯瞰 (南東から)



A トレンチ 溝201完形土器検出状況 (北東から)



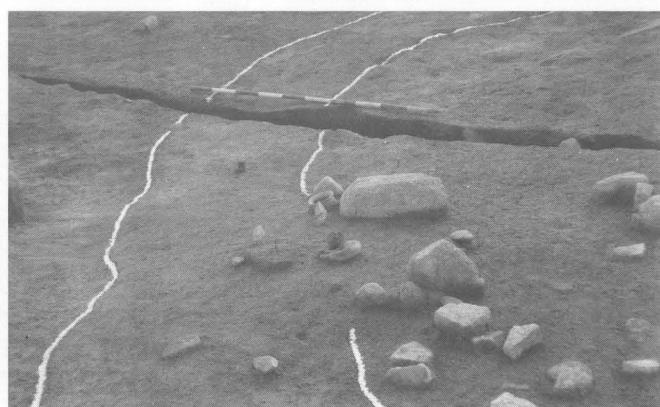
A トレンチ 溝201完形土器検出状況 (南から)



A トレンチ 溝201完形土器出土地遠景 (北東から)



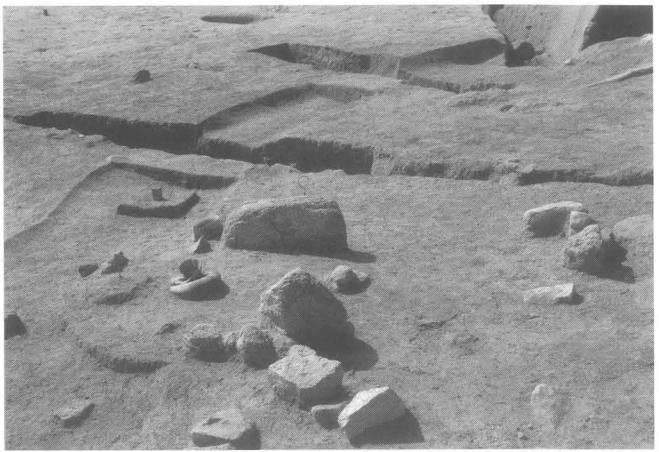
A トレンチ 溝201検出状況俯瞰 (北西から)



A トレンチ 溝201検出状況 (北東から)



A トレンチ 溝201完掘状況（北から）



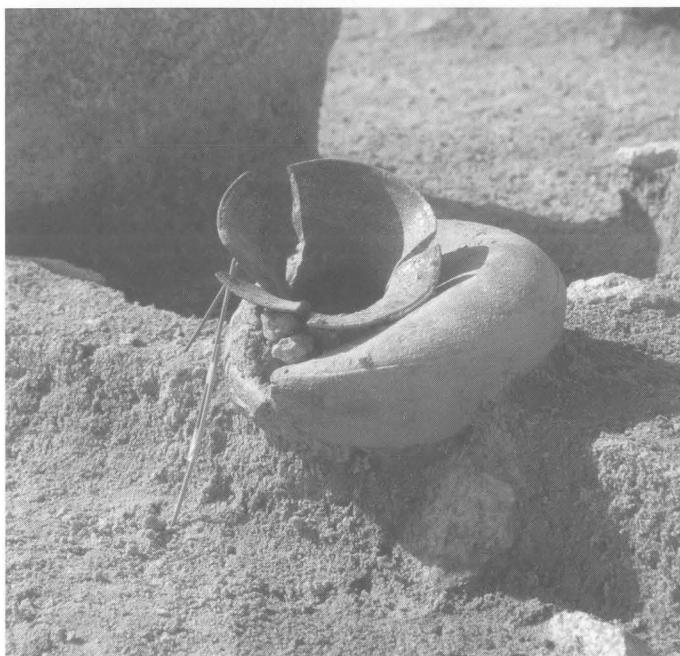
A トレンチ 溝201完掘状況（北東から）



A トレンチ 分割掘削の状況（北東から）



A トレンチ 完形土器完掘状況（南東から）



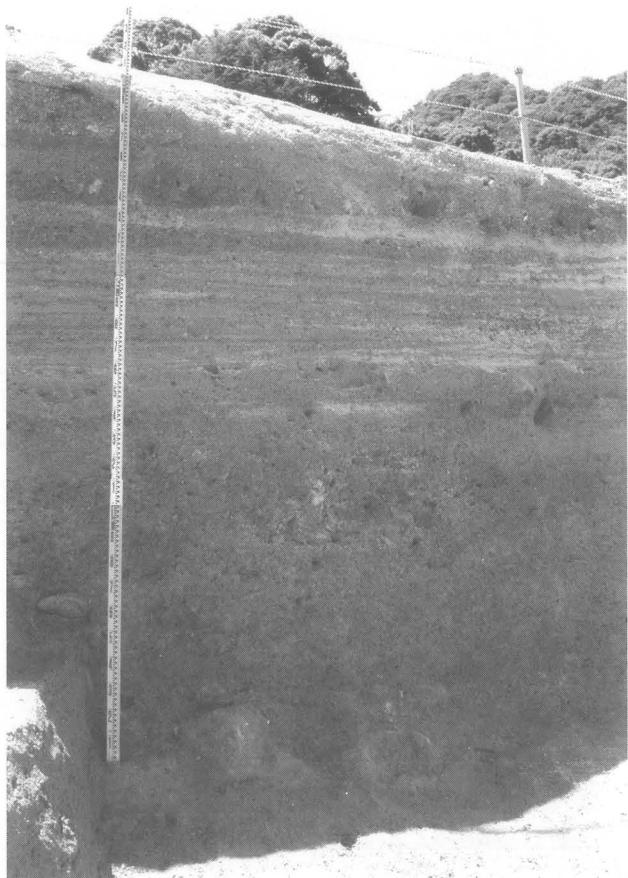
A トレンチ 完形土器完掘状況（南東から）



A トレンチ 完形土器完掘状況（東から）



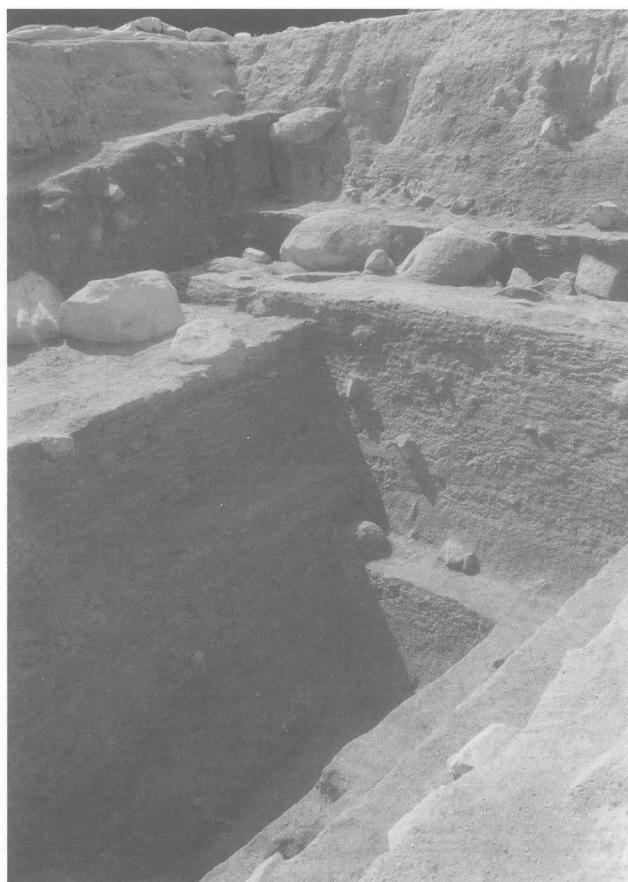
A トレンチ 拡張部 北西壁（旧旭化成社宅掘形断面）



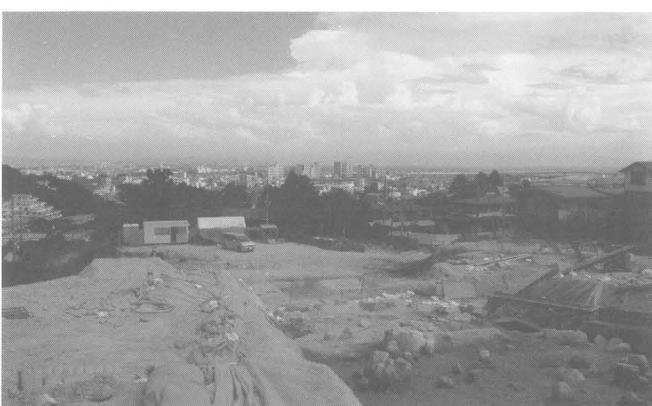
A トレンチ 拡張部 北西壁（旧旭化成社宅掘形断面）



A トレンチ 溝201セクション断面（西から）



A トレンチ 深掘部 北西壁土層断面（東から）



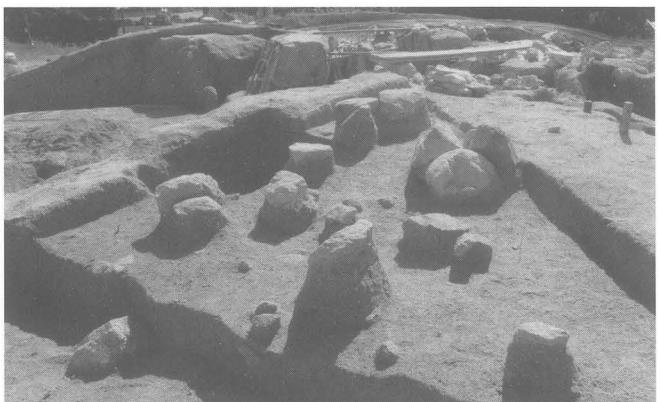
A トレンチ 完掘状況俯瞰（北西から）



旭塚古墳俯瞰（北西から）



調査前の墳丘（南東から）



墳丘列石出土状況（北から）



墳丘列石出土状況（北西から）



墳丘トレンチ設定状況（西から）



墳丘トレンチ設定状況（北西から）



第1トレンチにみる盛土の状況（南東から）



第1トレンチ奥壁裏込め部の攪乱（北東から）



第1トレンチ東壁土層断面と近世遺構（西から）



第2トレンチ掘削状況（東から）



第2トレンチ南壁土層断面（北から）



第2トレンチ南壁土層断面（北から）



第3トレンチ掘削状況（西から）



第5トレンチ掘削状況（南から）



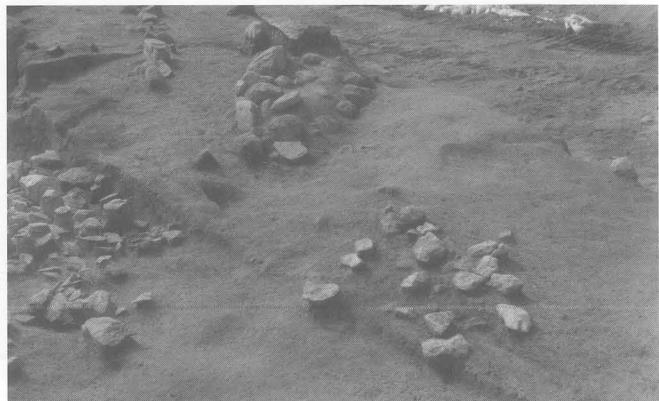
第3トレンチ掘削状況（西から）



第3トレンチ完掘状況（西から）



近世遺構と墳丘内列石（北から）



コッパ溜りと墳丘内列石（北西から）



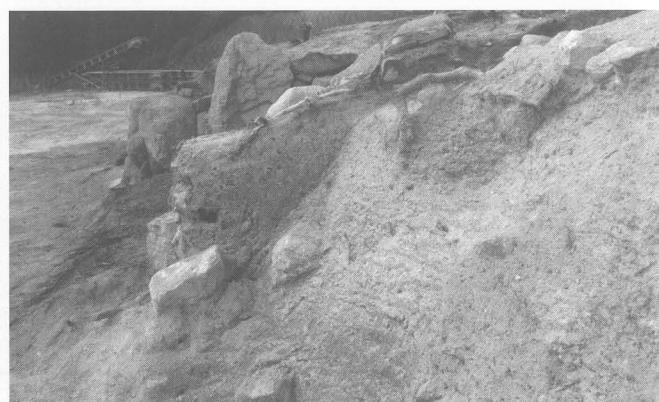
コッパ溜りと墳丘内列石（西から）



墳丘内列石（北から）



墳丘南西部の掘削状況（南から）



墳丘盛土の検出状況（北東から）



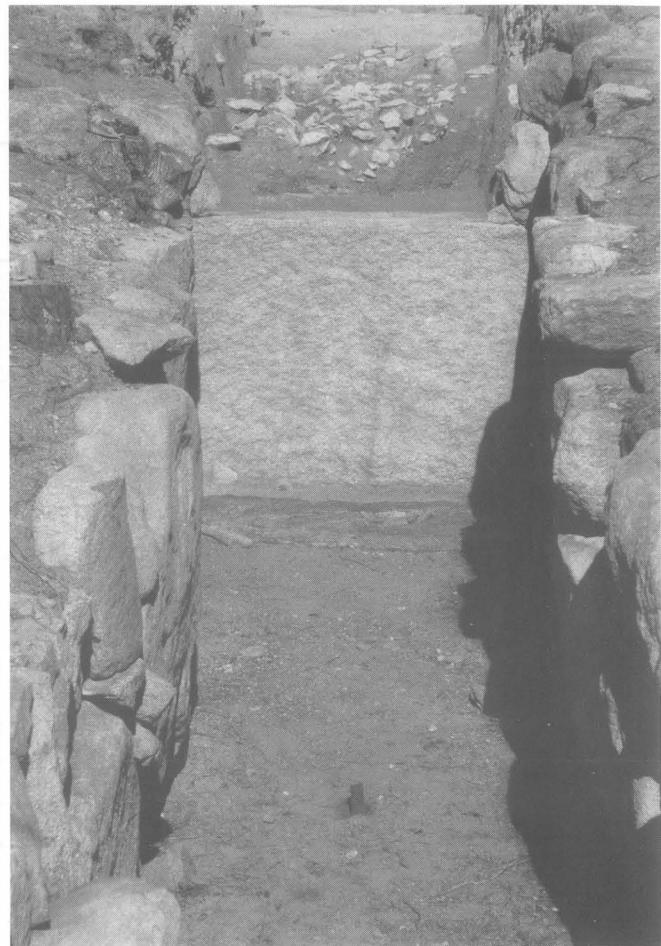
調査前の状況（南東から）



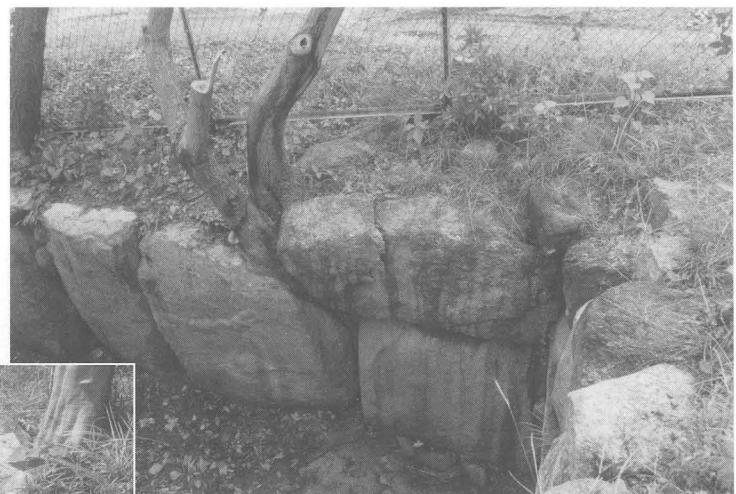
除草後の状況（南東から）



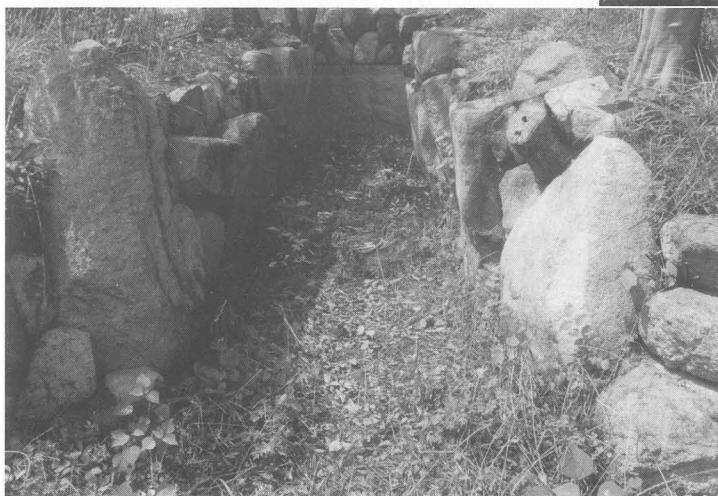
調査前の状況（北西から）



後補石材除去後の状況（南東から）



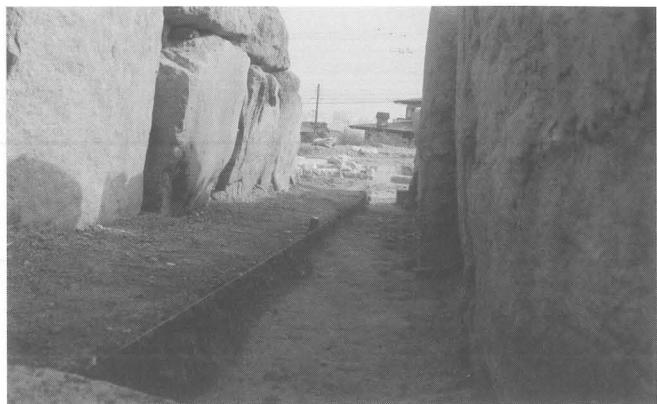
調査前の状況（右側壁）



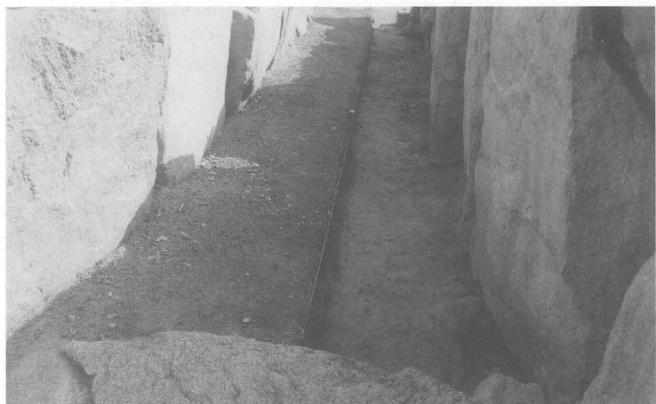
調査前の状況（南東から）



羨道部床面の半裁状況（北東から）



床面の半裁状況（北西隅から）



床面の半裁状況（北西から）



玄室部床面の半裁状況（南東から）



羨道部床面遺物検出状況（竜山石敷布面）



羨道部床面遺物検出状況（竜山石敷布面）



腐植土除去後の石室床面状況（南東から）



石室床面主軸トレンチ掘削状況（南東から）



玄室部胴木痕検出状況（左側壁から）



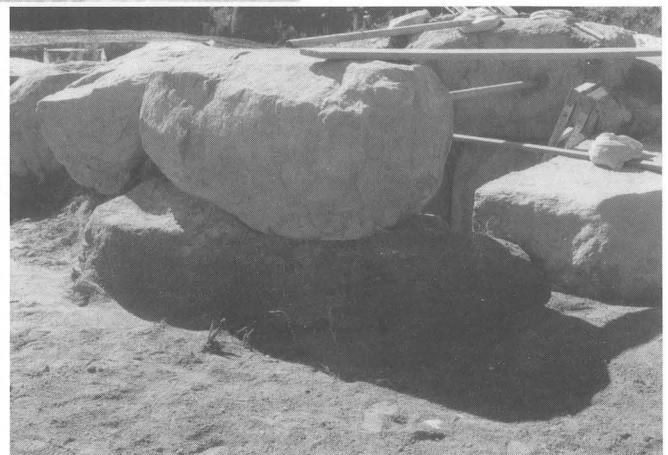
↑玄室床面（玄門から）



←玄室奥壁と床石、詰石除去状況
(真上から)



奥壁裏込めの状況（東から）



左側壁の裏込め部（北から）



調査前の多角部と外護列石風に積まれた後補石材（南から）



表土除去後の墳丘遺存状況（南西から）



多角部裾とテラス面の状況（南西から）



多角部裾と掘削前のテラス面の状況（西から）



基底列石とテラス面検出状況（南東から）



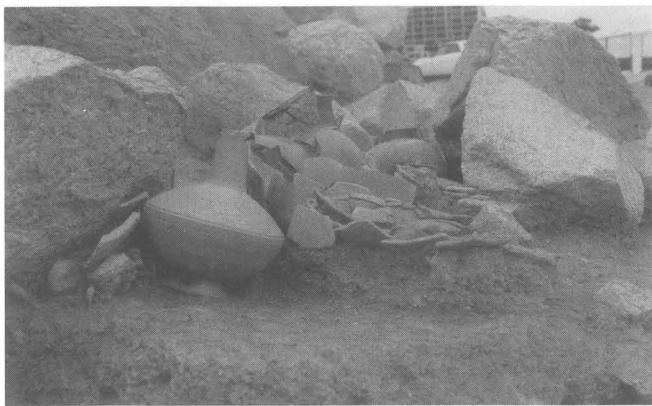
貼石の崩壊状況とテラス面の
土器出土状況（西から）



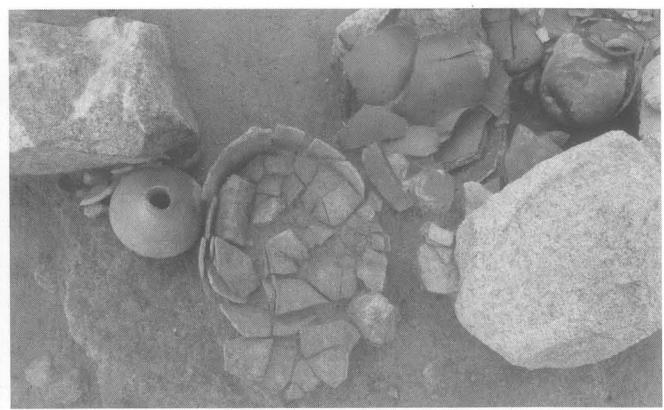
テラス面出土の土器群（南から）



テラス面出土の土器群（西から）



テラス面出土の土器群（西から）



テラス面出土の土器群（南から）



テラス面出土の土器群（南東から）



テラス面出土の土器群（東から）



墳丘・列石・供献土器除去後断面、テラス面完掘後の状況（西から）



前庭部調査区設定状況（南東から）



前庭部調査区掘削状況近景（北、墳丘側から）



碎石層除去後の状況（南東から）



西Ⅱ・Ⅲ区 表土除去後の状況（南西から）



西Ⅰ～Ⅲ区・東Ⅰ～Ⅲ区の掘削状況（北西から）



東Ⅳ区中央 土器出土状況（南から）



東Ⅳ区東端 土器出土状況（南から）



東Ⅳ区 土師器甕検出状況（北から）



西Ⅳ区 竜山石敷布面検出状況（南から）



西Ⅳ区 竜山石敷布面検出状況（南東から）



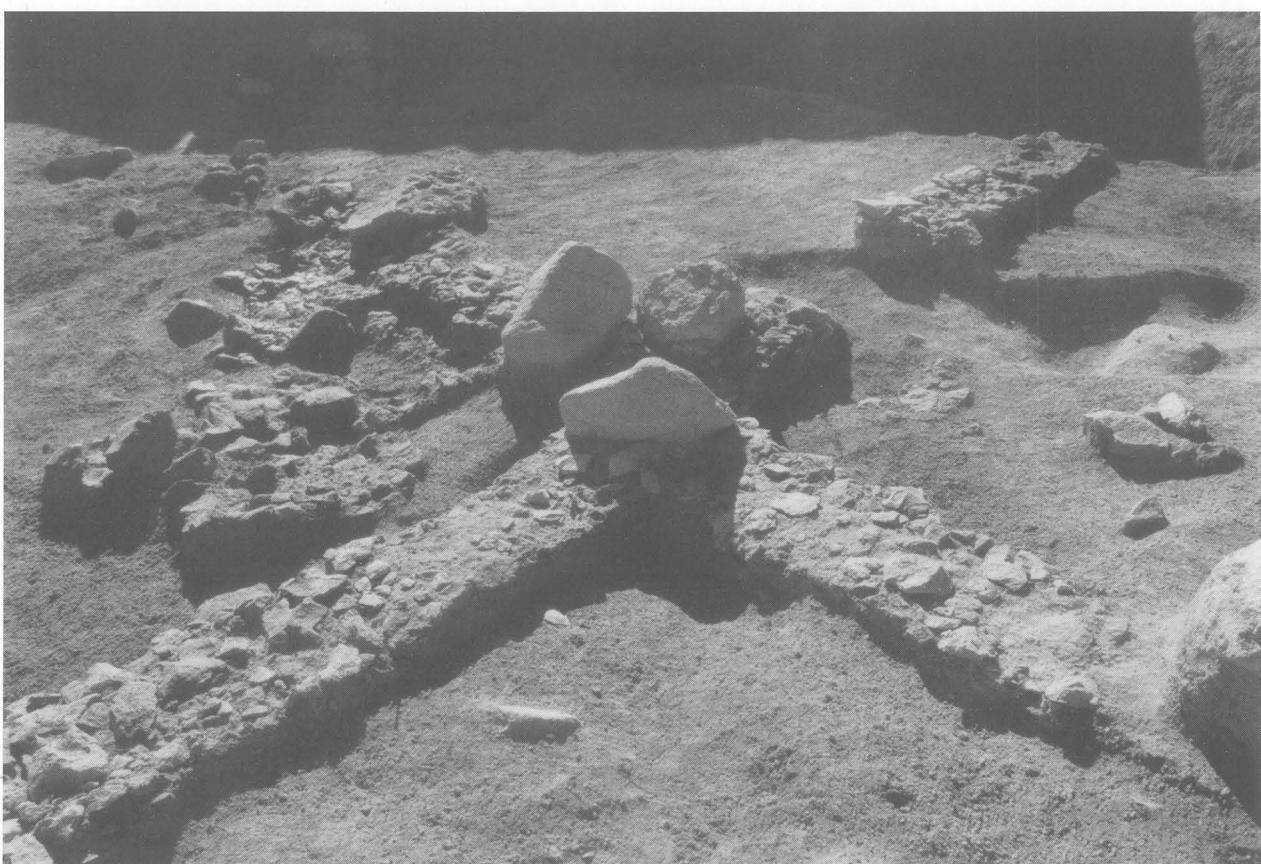
西IV区 竜山石敷布面接写（西から）



西IV区 竜山石敷布面（東から）



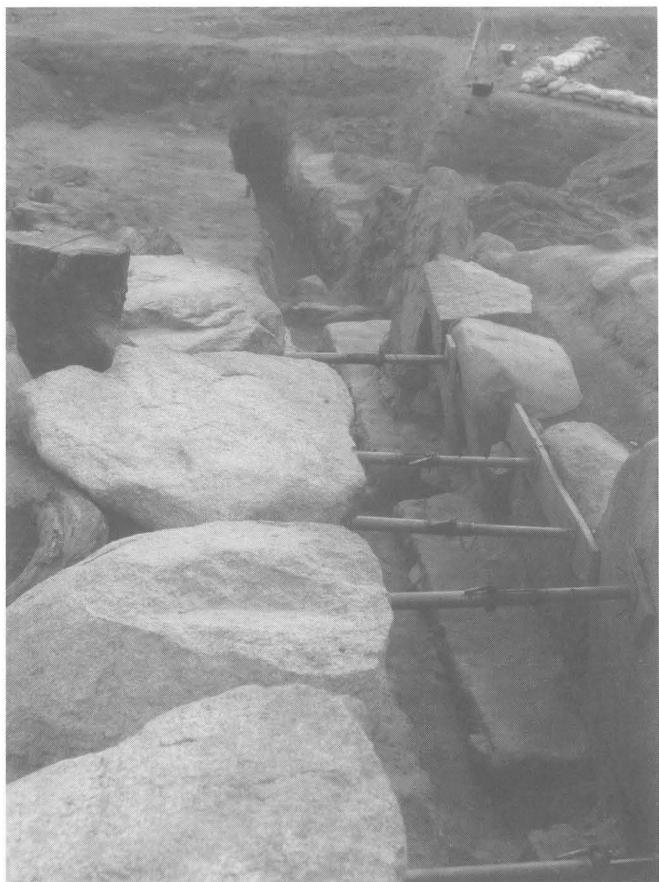
西IV区 竜山石検出状況（北から）



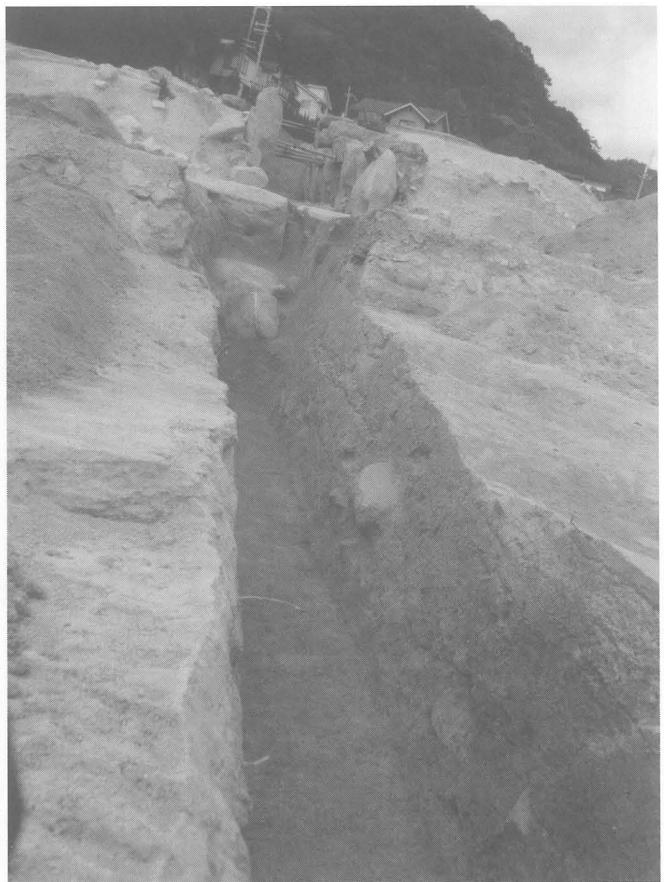
西III・IV区 竜山石散布面分割調査セクションベルト設定状況（北から）



西III・IV区 竜山石敷布面除石後完掘状況（東から）



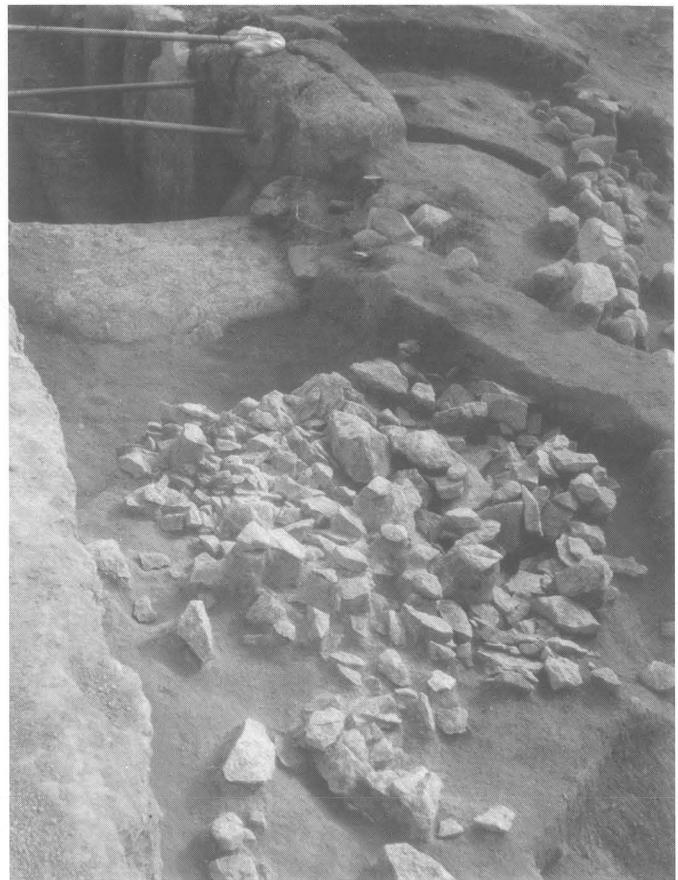
主軸トレンチ最終断割（開口部から前庭部を望む）



主軸トレンチ最終断割（前庭部から開口部を望む）



石室奥壁背面コッパ出土状況（東から）



石室奥壁背面土層断面（南から）

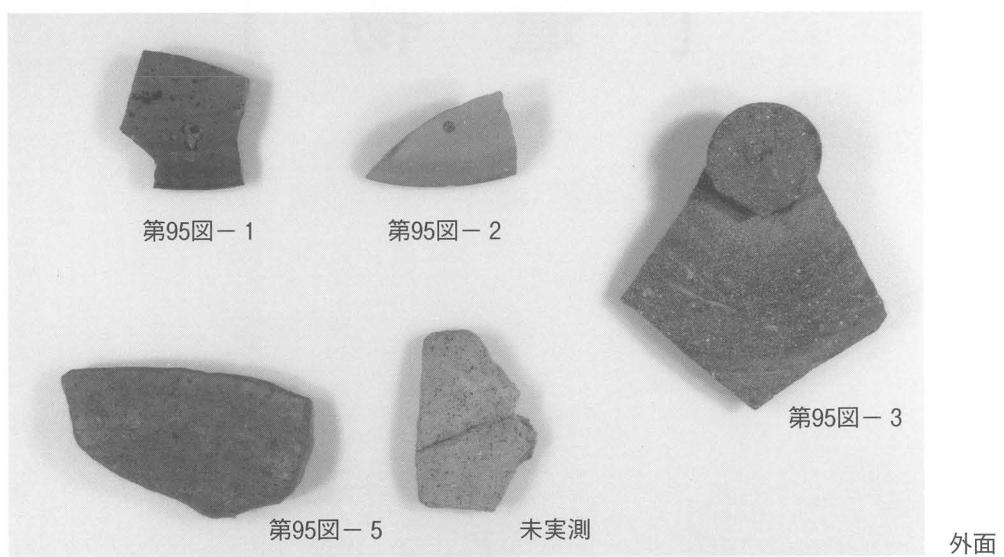
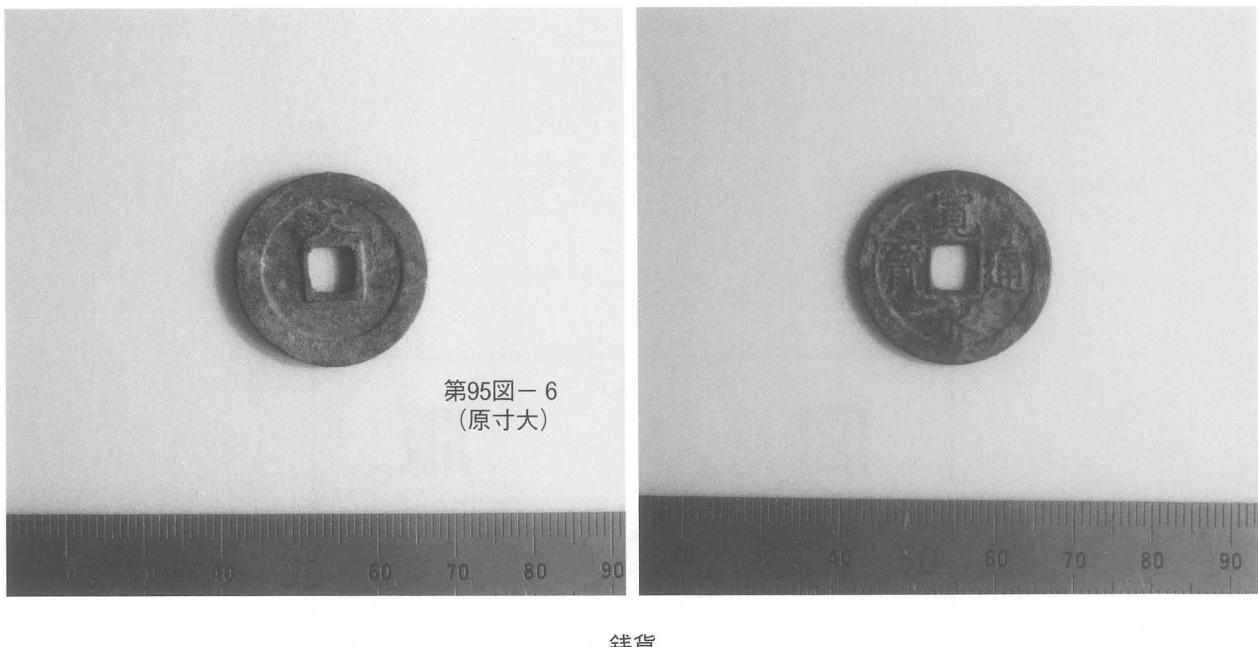
墳丘第1トレンチ コッパ出土状況（北から）



墳丘北西部の近世遺構と現代の石列（南東から）

図 版
PLATE

[遺 物]





第98図-8

Aトレンチ 土器溜り A出土遺物 子持器台（俯瞰）



第98図-8

Aトレンチ 土器溜り A出土遺物 子持器台（横から）



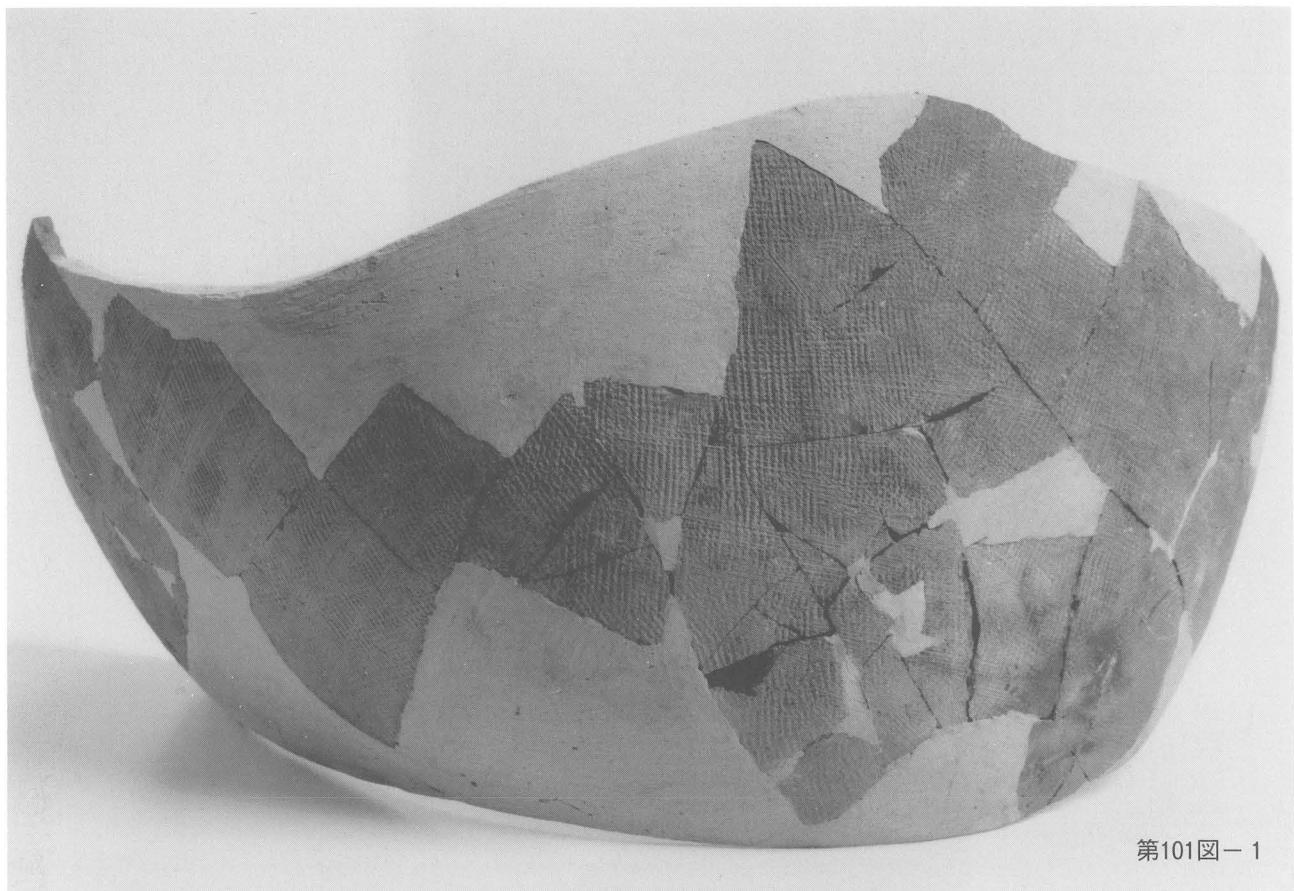
第98図-8

A トレンチ 土器溜り A 出土遺物 子持器台（復元途中）



第96図-8

A トレンチ 土器溜り A 出土遺物 子持器台の台座か



第101図-1

A トレンチ 掘乱出土遺物② 外面



A トレンチ 掘乱出土遺物② 内面接写



A トレンチ 溝201出土遺物

第99図-1



第99図-3

Aトレンチ 溝201出土遺物



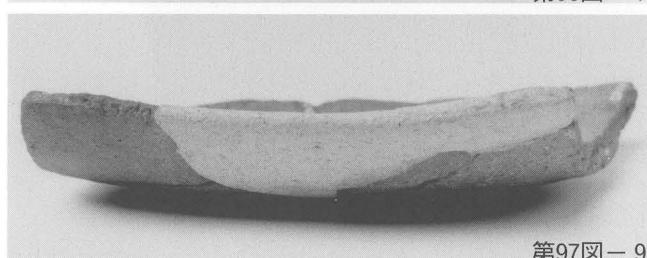
第98図-4



第96図-1



第96図-5



第97図-9

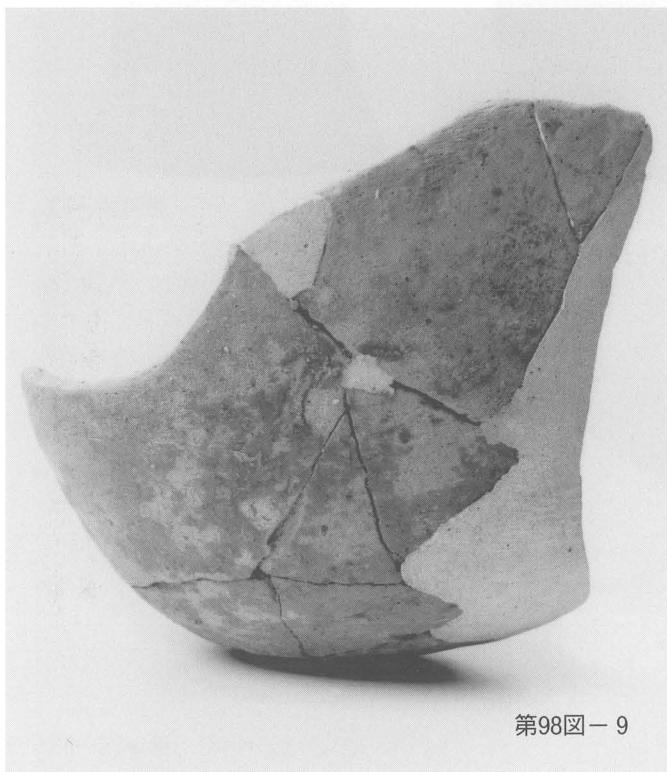


第97図-2

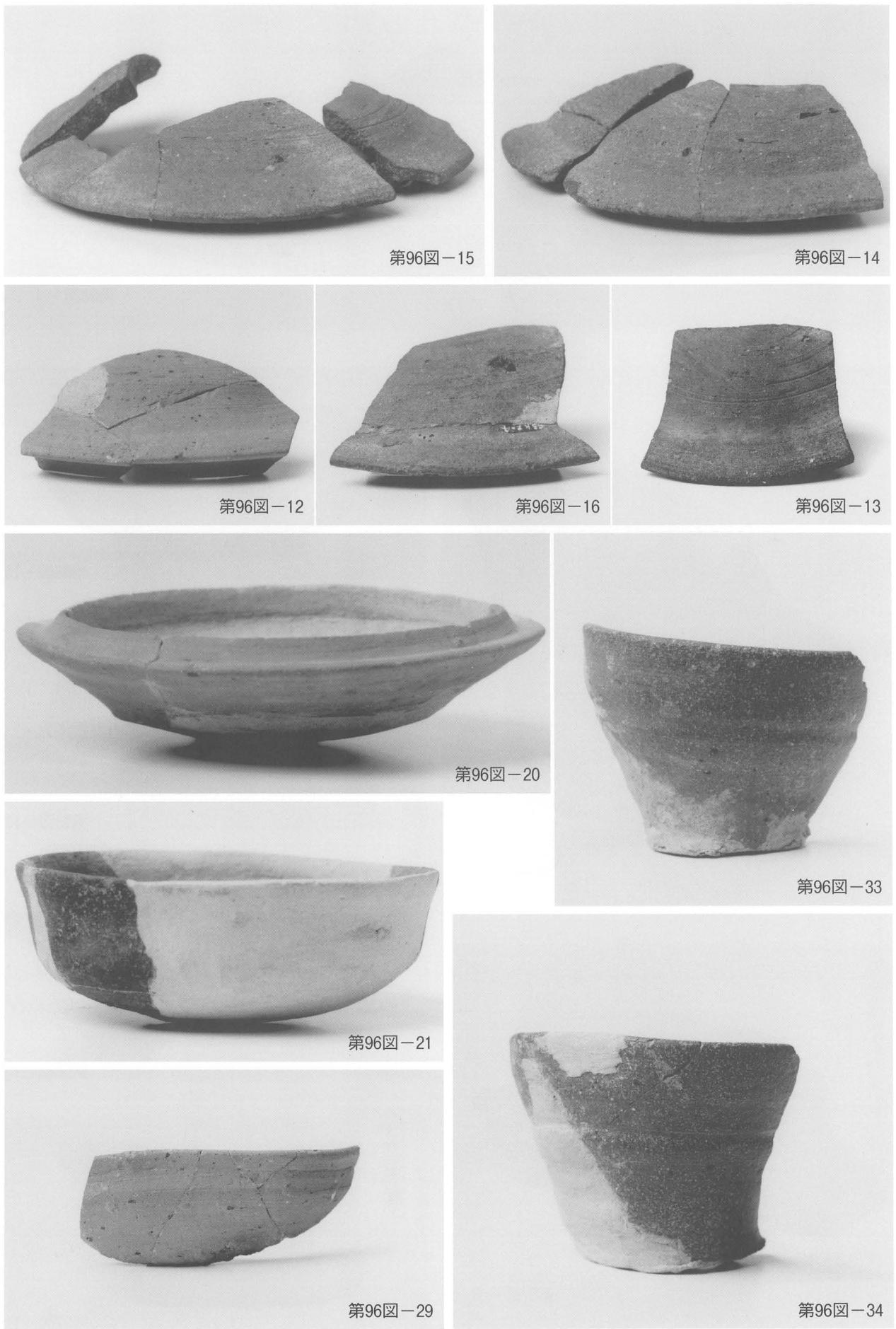


第95図-4

Aトレント 土器溜りA 西側サブトレント 第1次確認調査出土遺物



A トレンチ 土器溜り A 西側サブトレンチ出土遺物



A ドレンチ 出土遺物



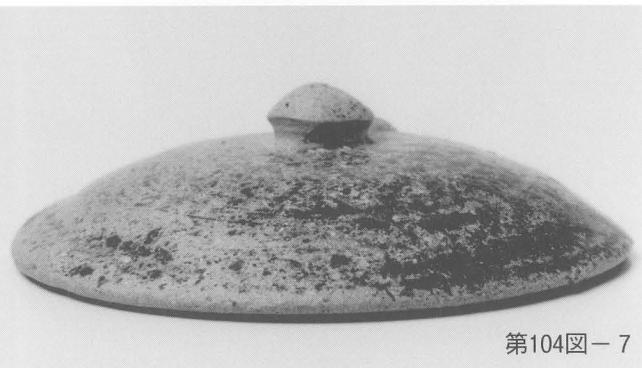
第104図-4



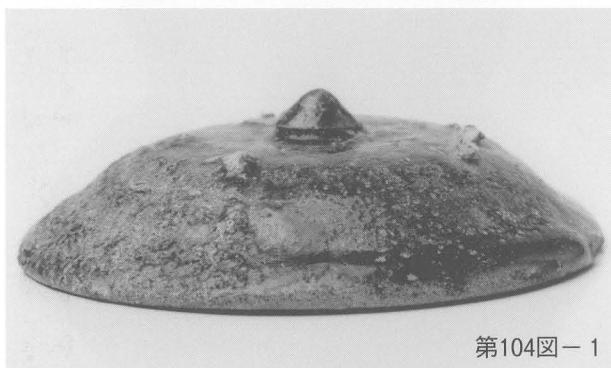
第104図-2



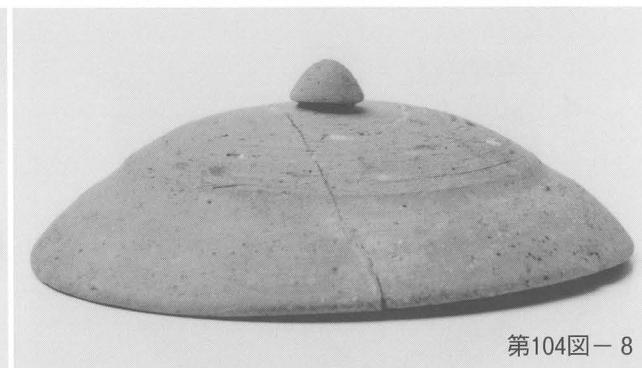
第104図-6



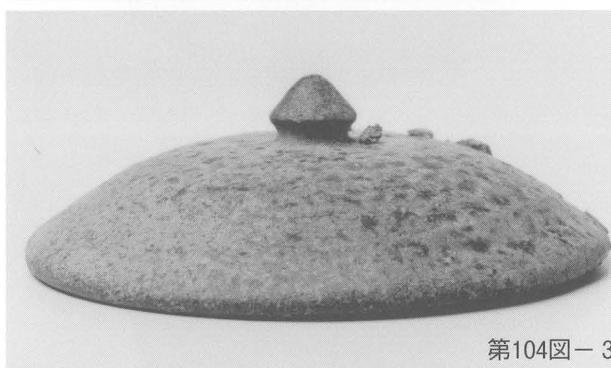
第104図-7



第104図-1



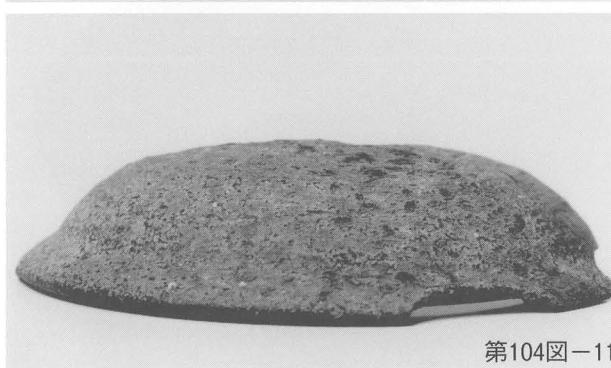
第104図-8



第104図-3



第104図-9

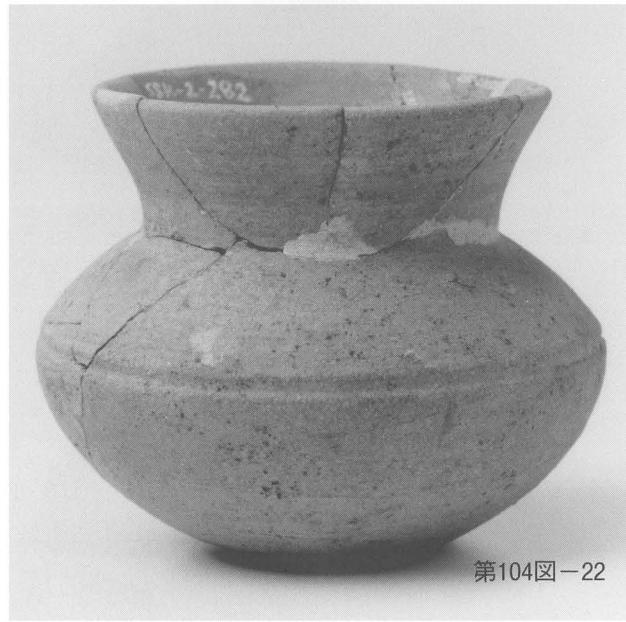
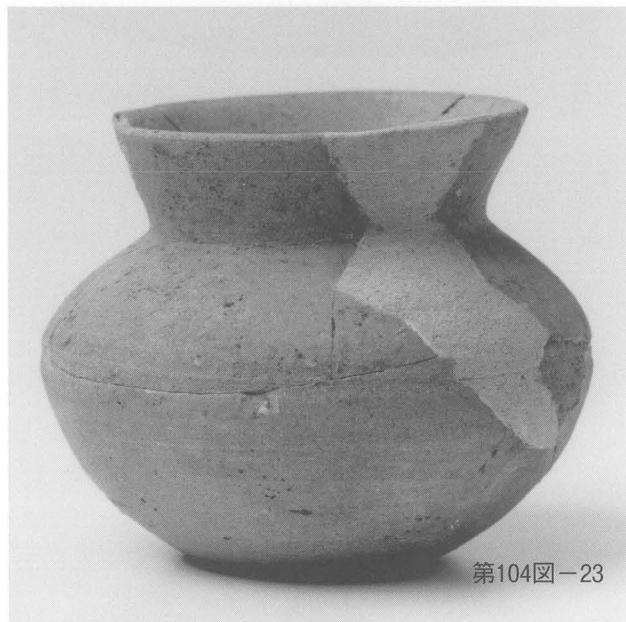
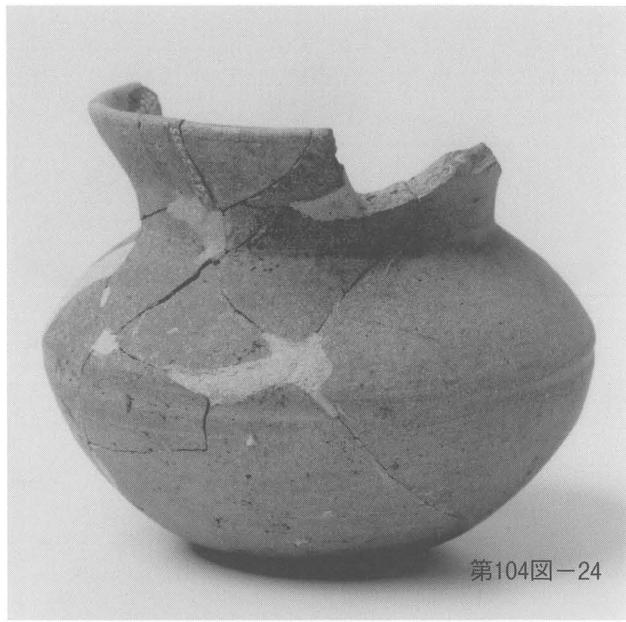


第104図-11



第104図-12

墳丘裾部テラス面出土遺物



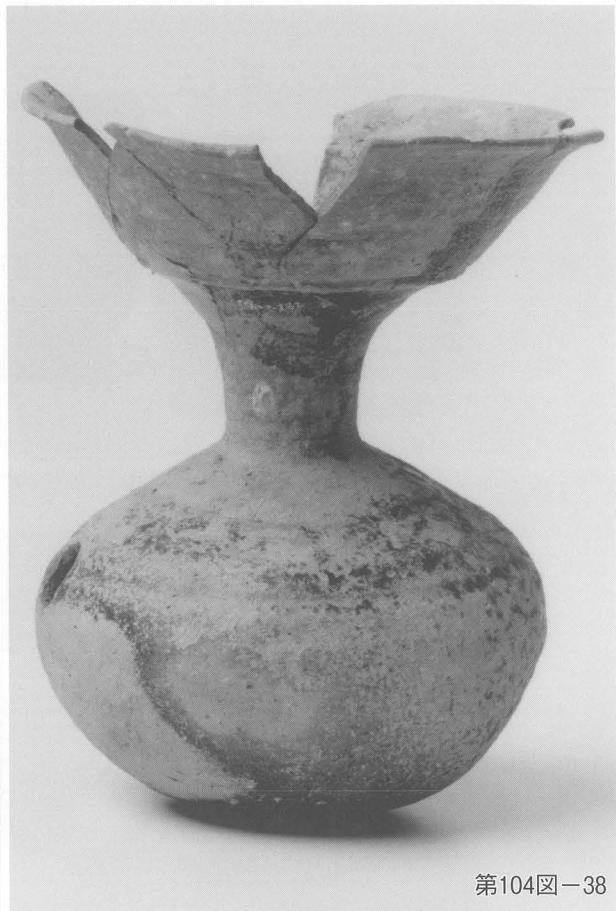
墳丘裾部テラス面出土遺物



墳丘裾部テラス面出土遺物



第104図-40



第104図-38



第104図-41



第104図-39

墳丘裾部テラス面出土遺物



第104図-34



第104図-34

墳丘裾部テラス面出土遺物



第104図-37



第104図-37

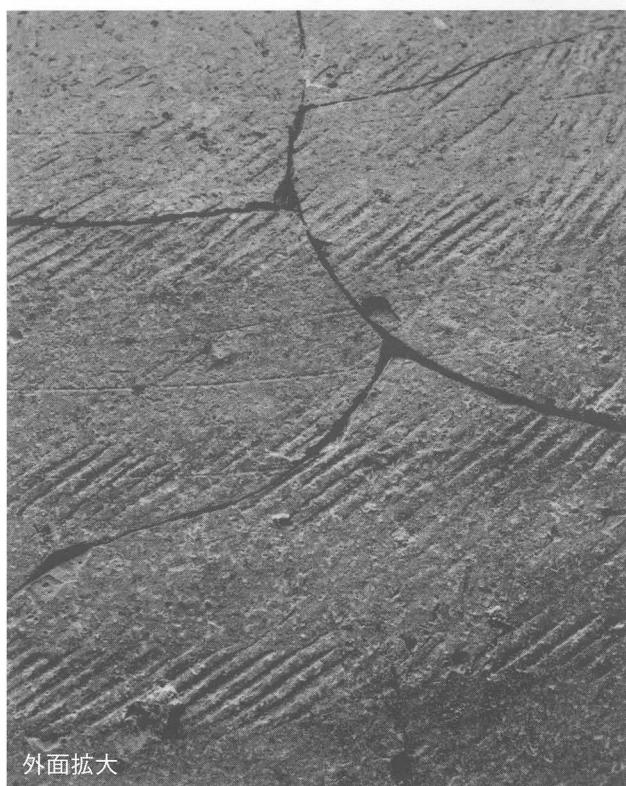
墳丘裾部テラス面出土遺物



墳丘裾部テラス面出土遺物



第105図-1



外面拡大

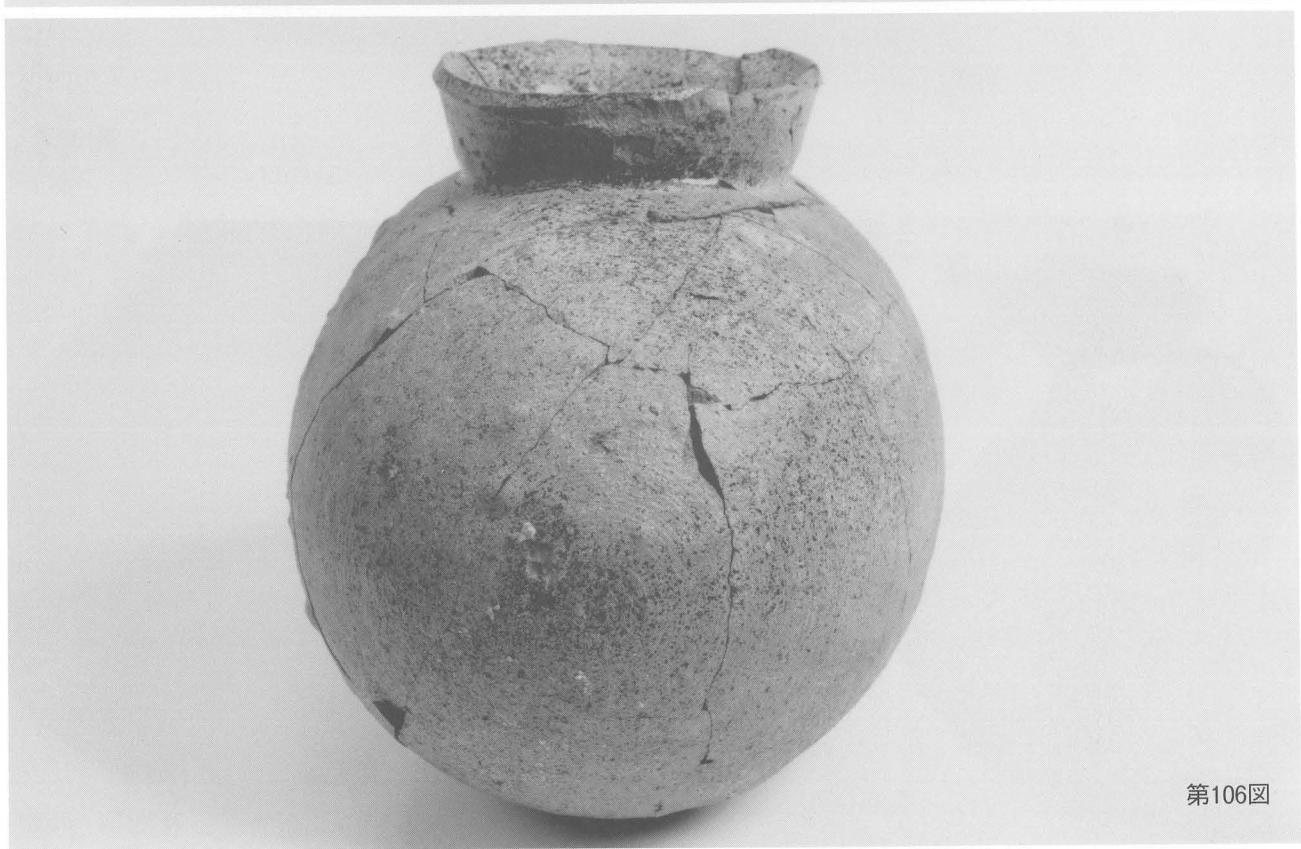


内面拡大

墳丘裾部テラス面出土遺物



第106図

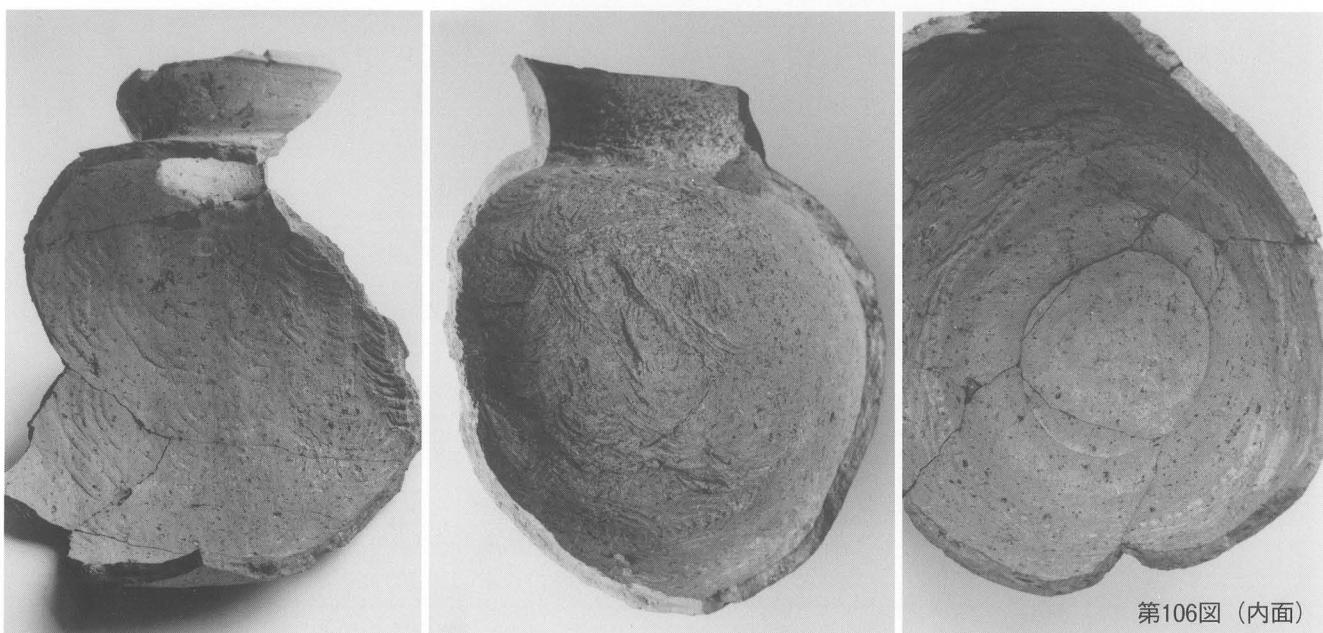


第106図

墳丘裾部テラス面出土遺物



第106図

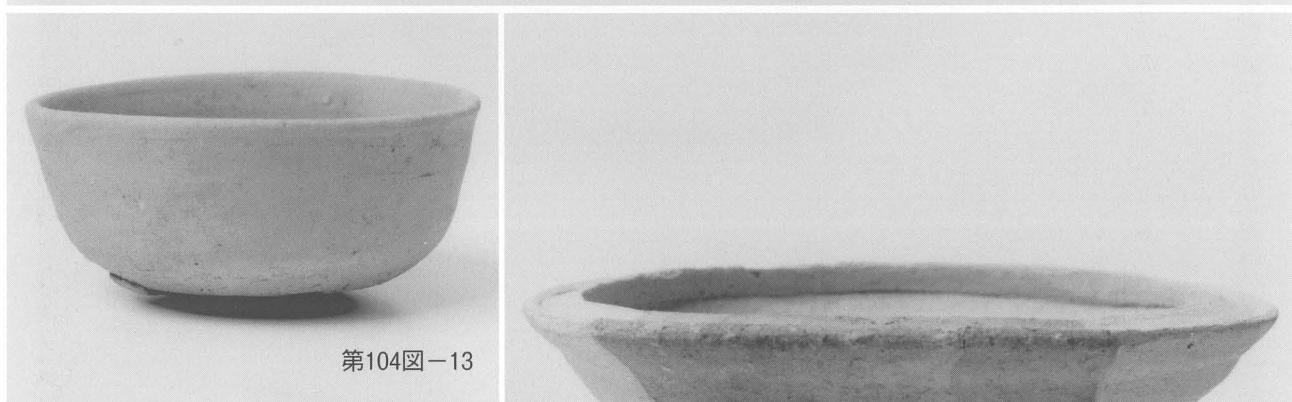


第106図 (内面)

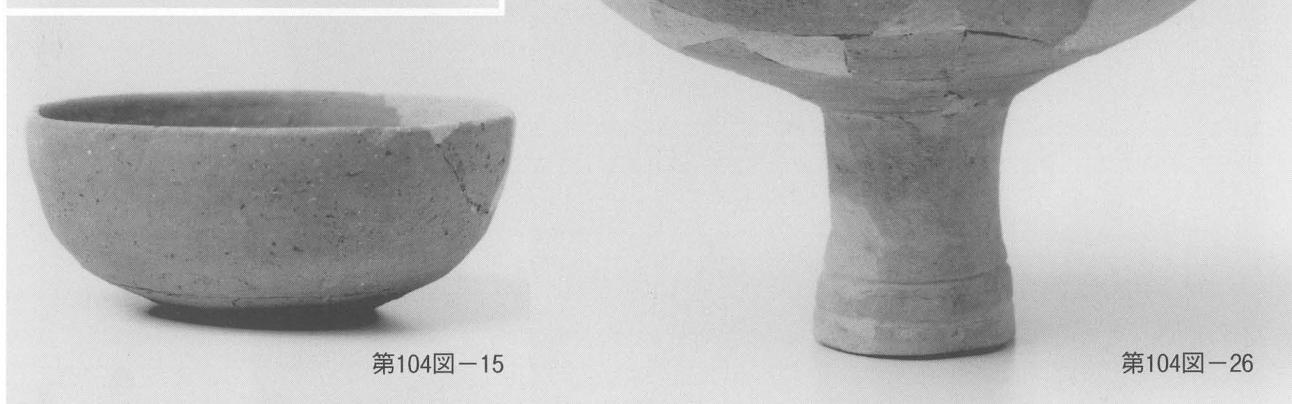
墳丘裾部テラス面出土遺物



第104図-25



第104図-13



第104図-15



第104図-26



第104図-16



第104図-29

墳丘裾部テラス面出土遺物



第107図-1



第108図-15

墳丘裾部テラス面（上）、前庭部（下）出土遺物

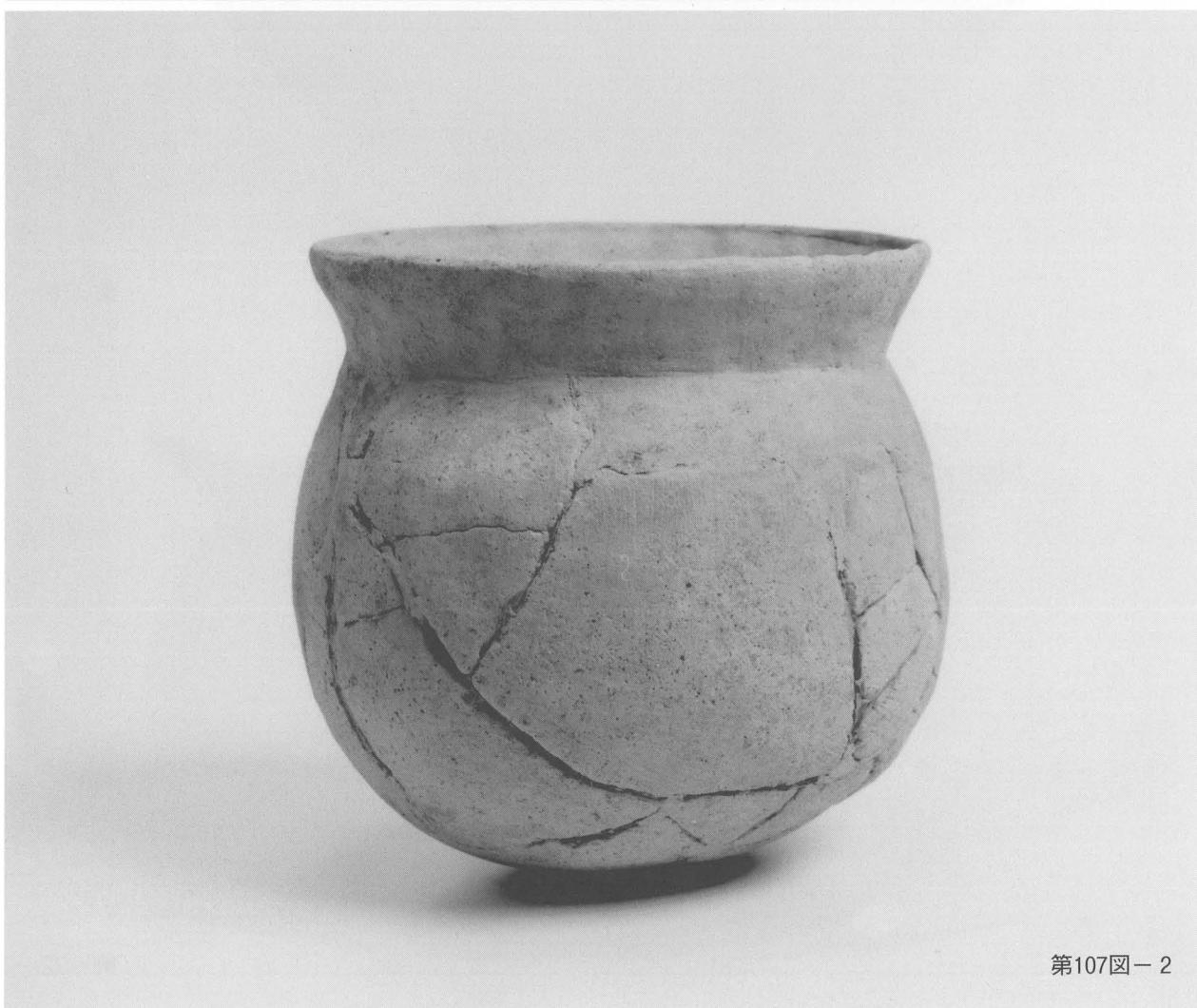


第107図-8

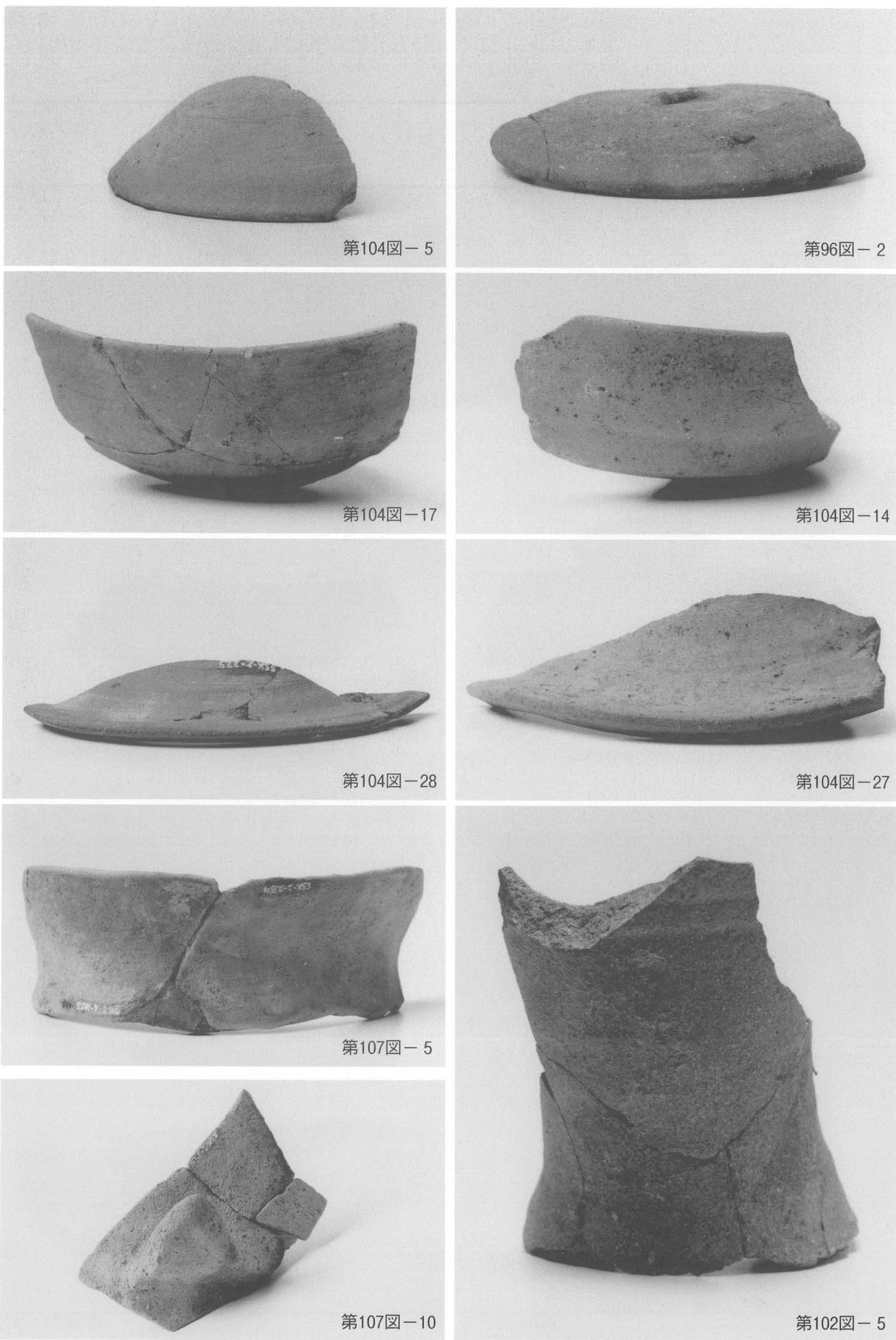


第107図-9

墳丘裾部テラス面出土遺物



墳丘裾部テラス面出土遺物



A トレンチ・墳丘・墳丘据部テラス面出土遺物



第103図-5



第103図-6



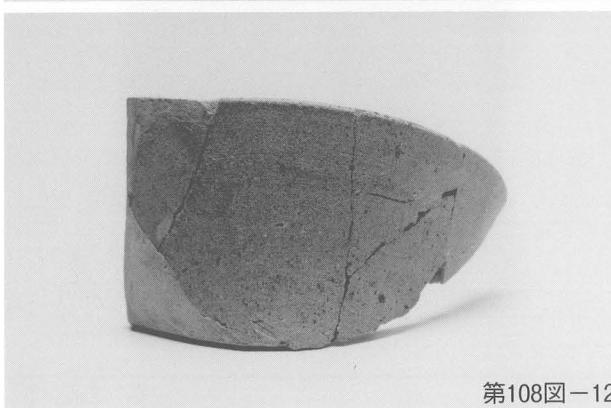
第102図-8



第102図-4



第102図-3

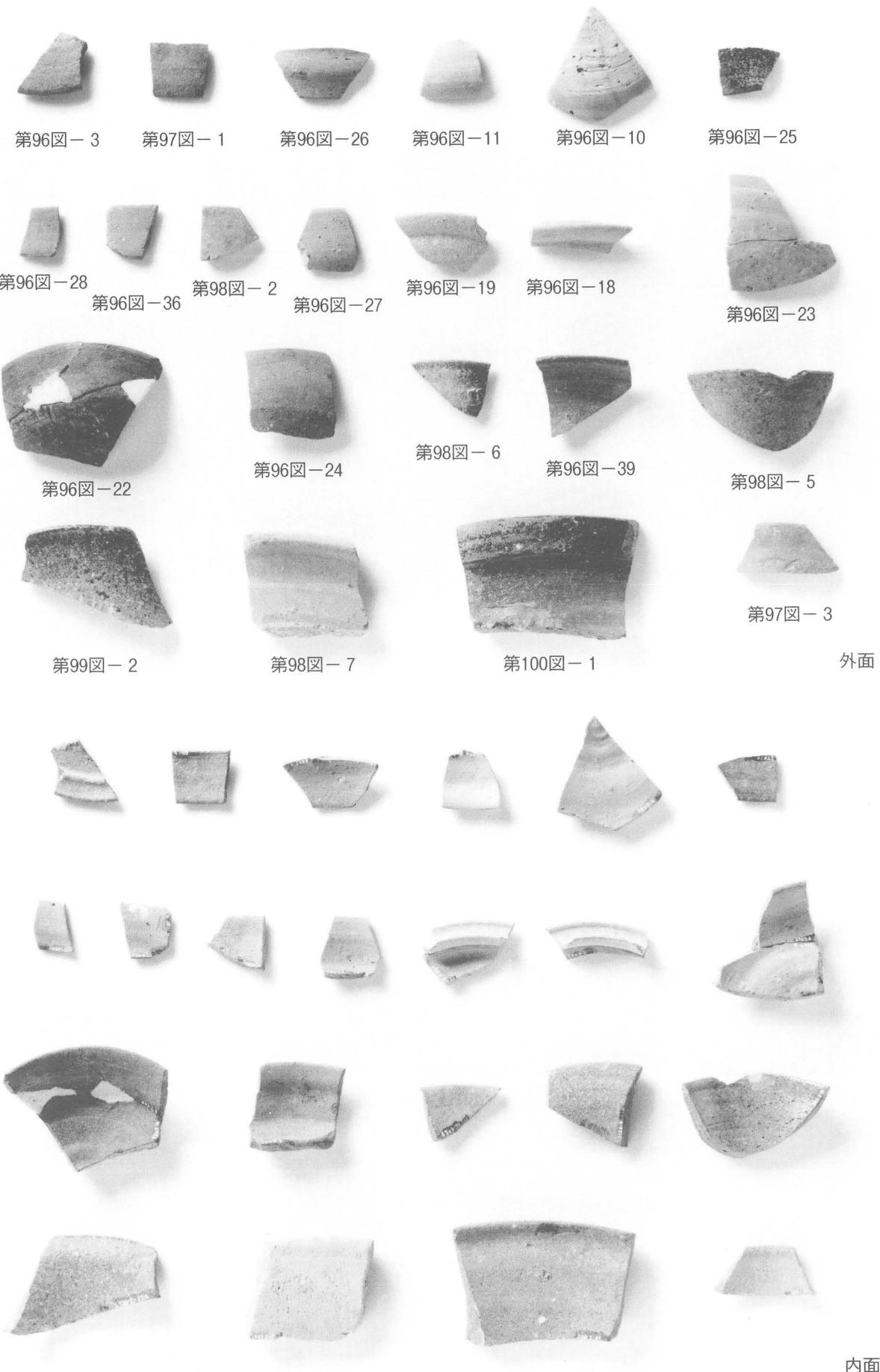


第108図-12

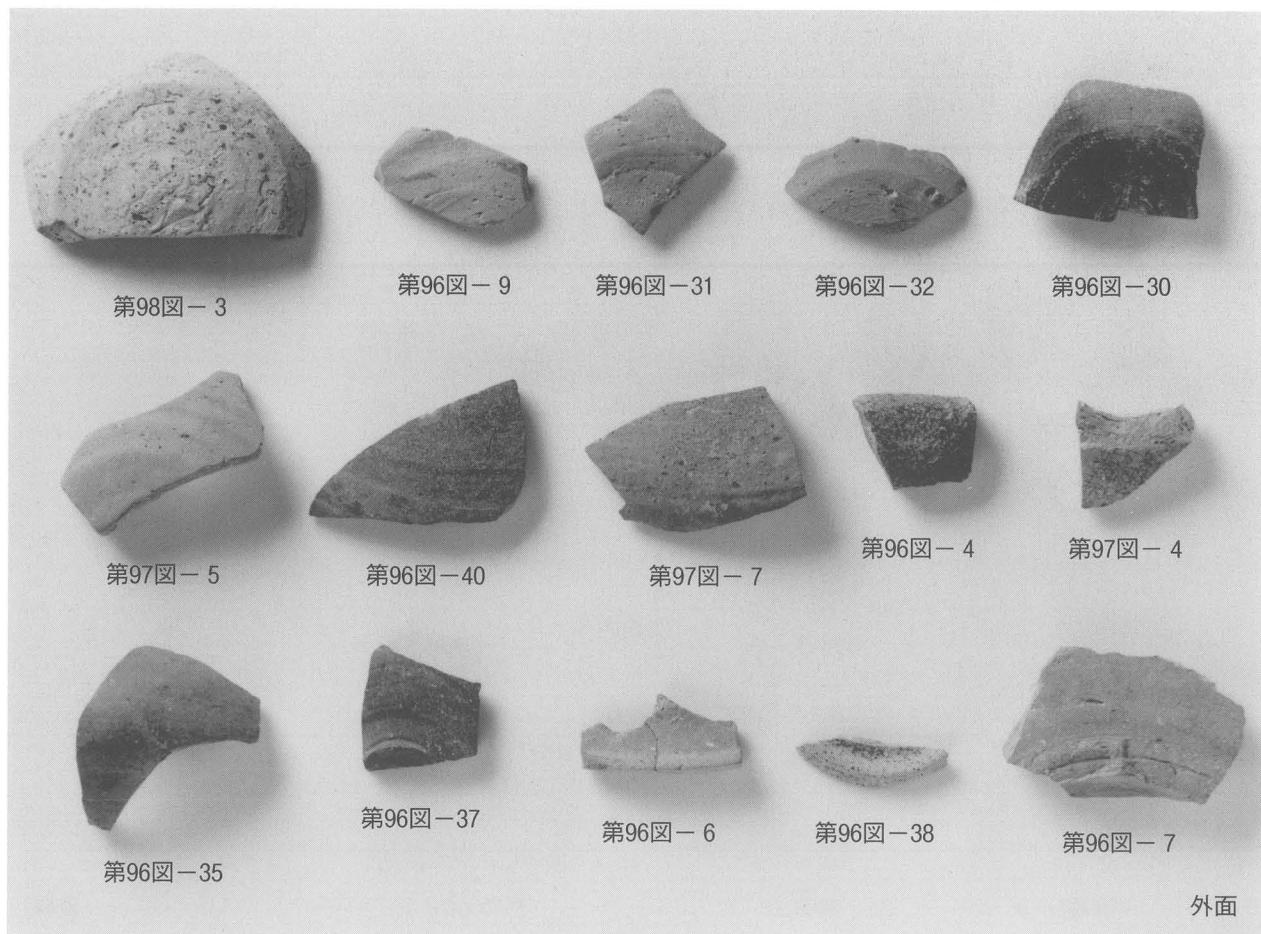


第108図-6

墳丘・石室内・前庭部出土遺物



Aトレンチ・西側サブトレンチ・土器溜りA・溝201・攪乱①出土遺物



Aトレンチ・西側サブトレンチ・土器溜りA出土遺物



第97図-8



第96図-41



第97図-10



第98図-12

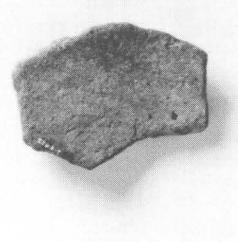
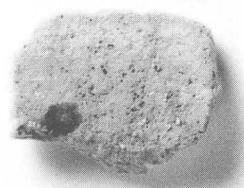
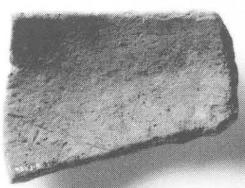


第100図-2



第98図-13

外面



内面

Aトレンチ・西側サブトレンチ・土器溜りA・攪乱①出土遺物



第104図-10



第102図-2



第104図-30



第104図-31



第104図-32



第107図-3



第107図-7

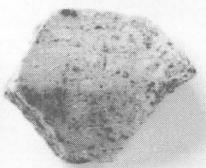
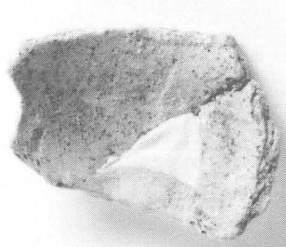
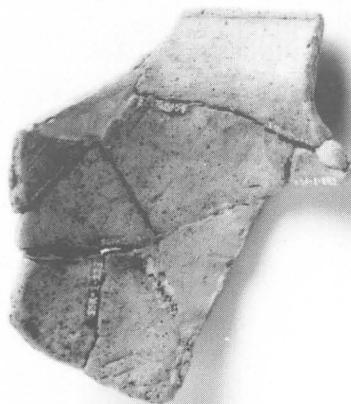


第107図-6



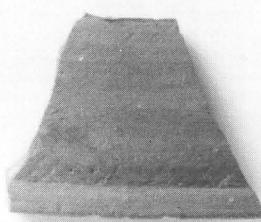
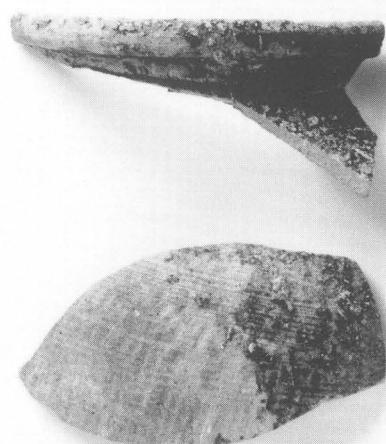
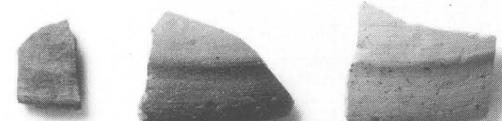
第107図-4

外面

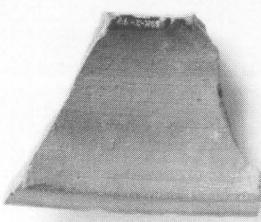
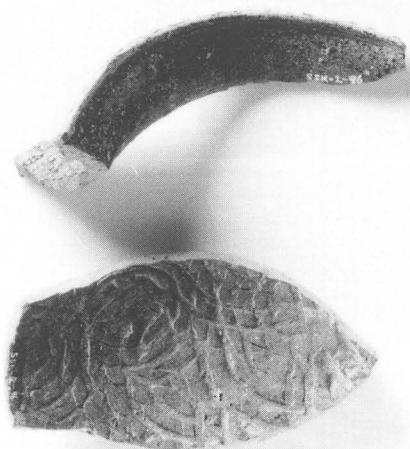
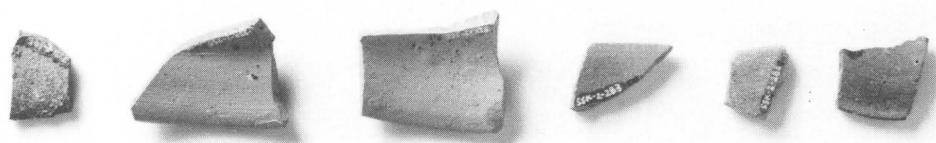


内面

墳丘・墳丘裾部テラス面出土遺物

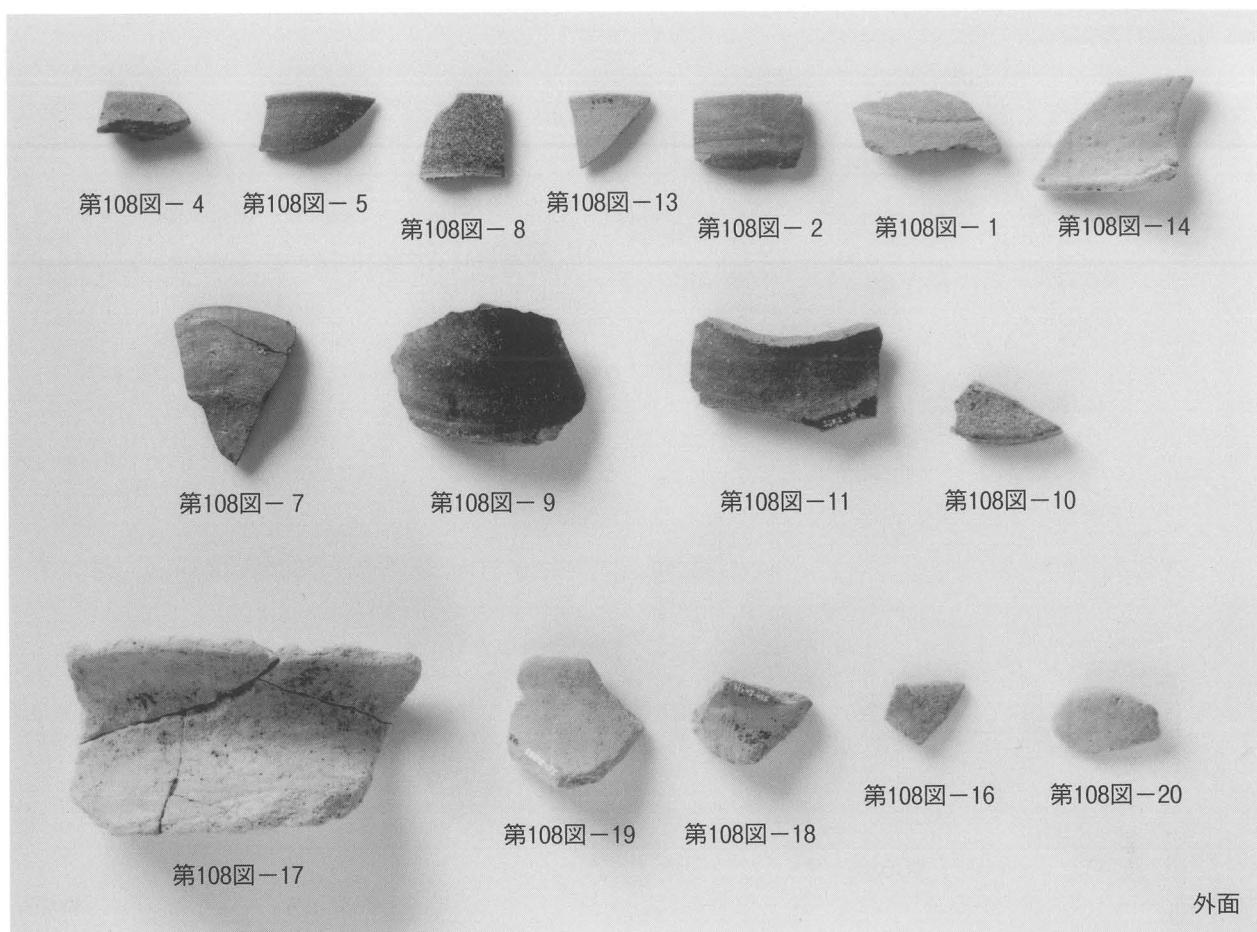


外面

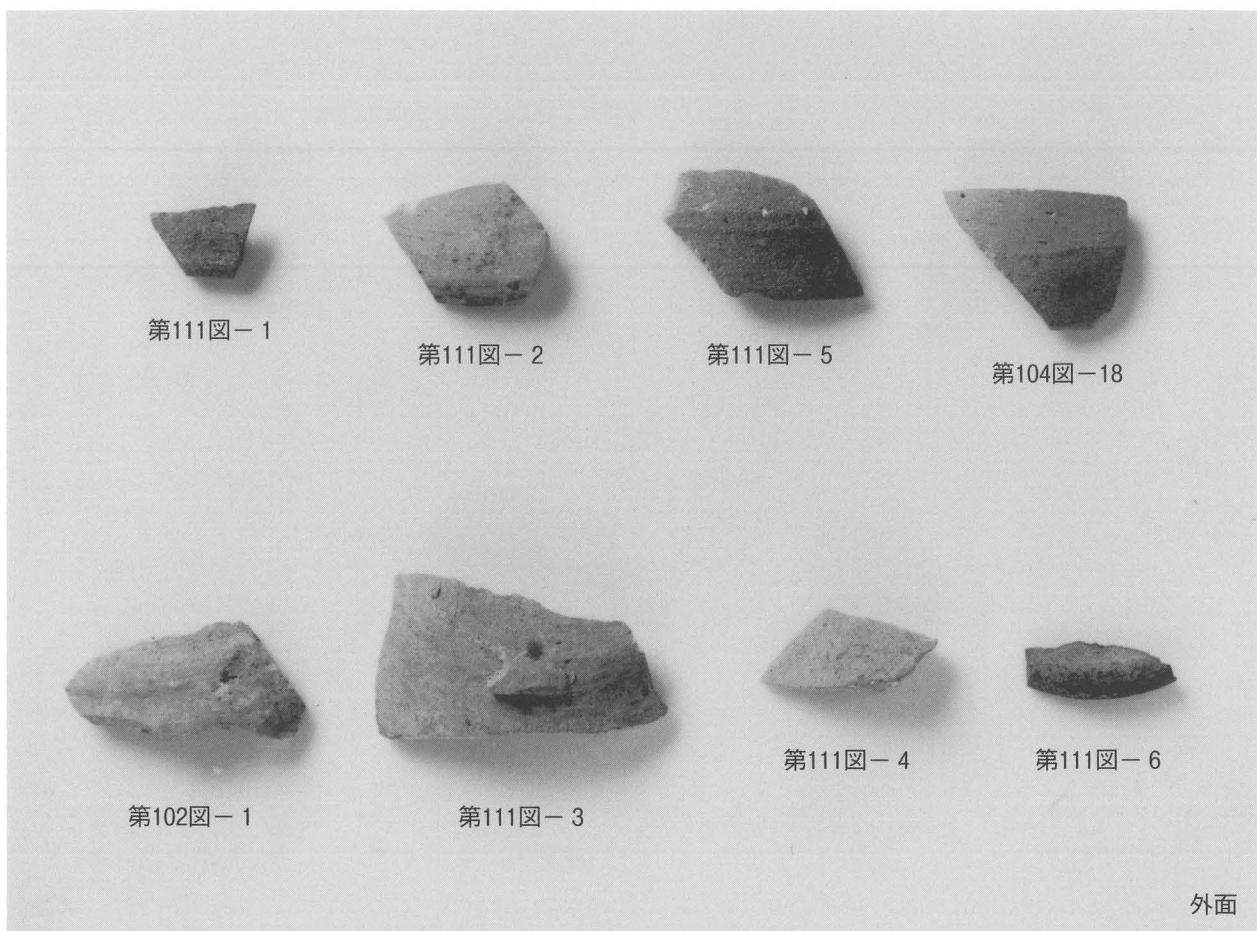


内面

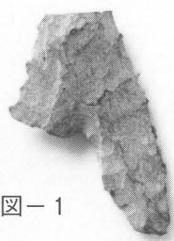
墳丘・石室内・前庭部出土遺物



前庭部出土遺物



墳丘・墳丘裾部テラス面・表面採集遺物



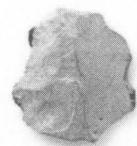
第109図－1



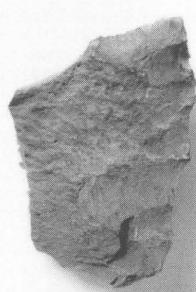
第109図－2



第109図－5



第109図－6

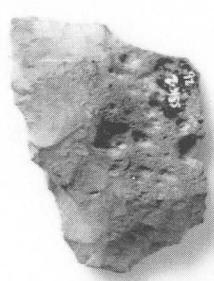
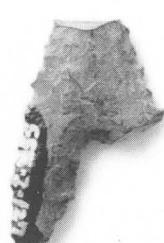


第109図－3



第109図－4

A面



B面

石器



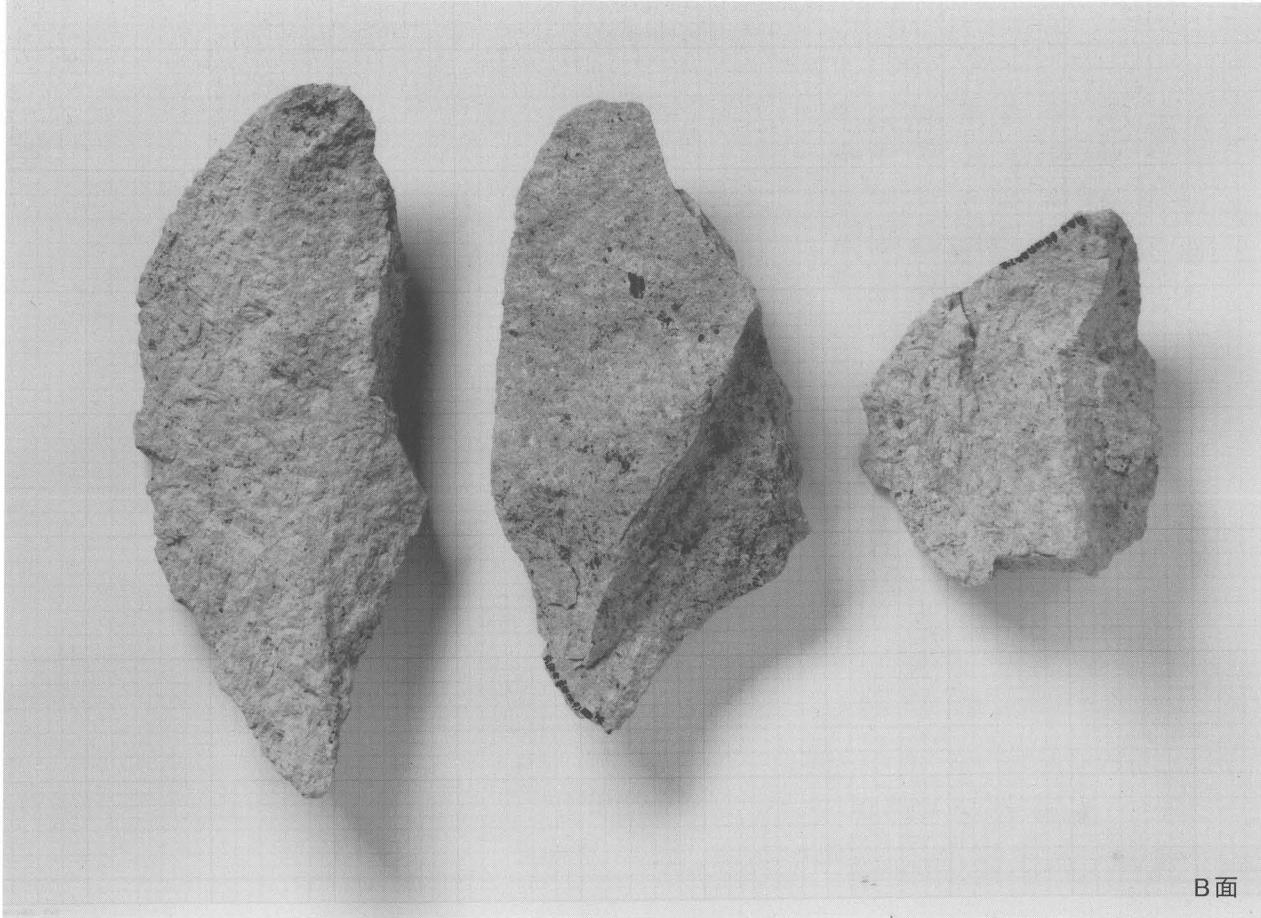
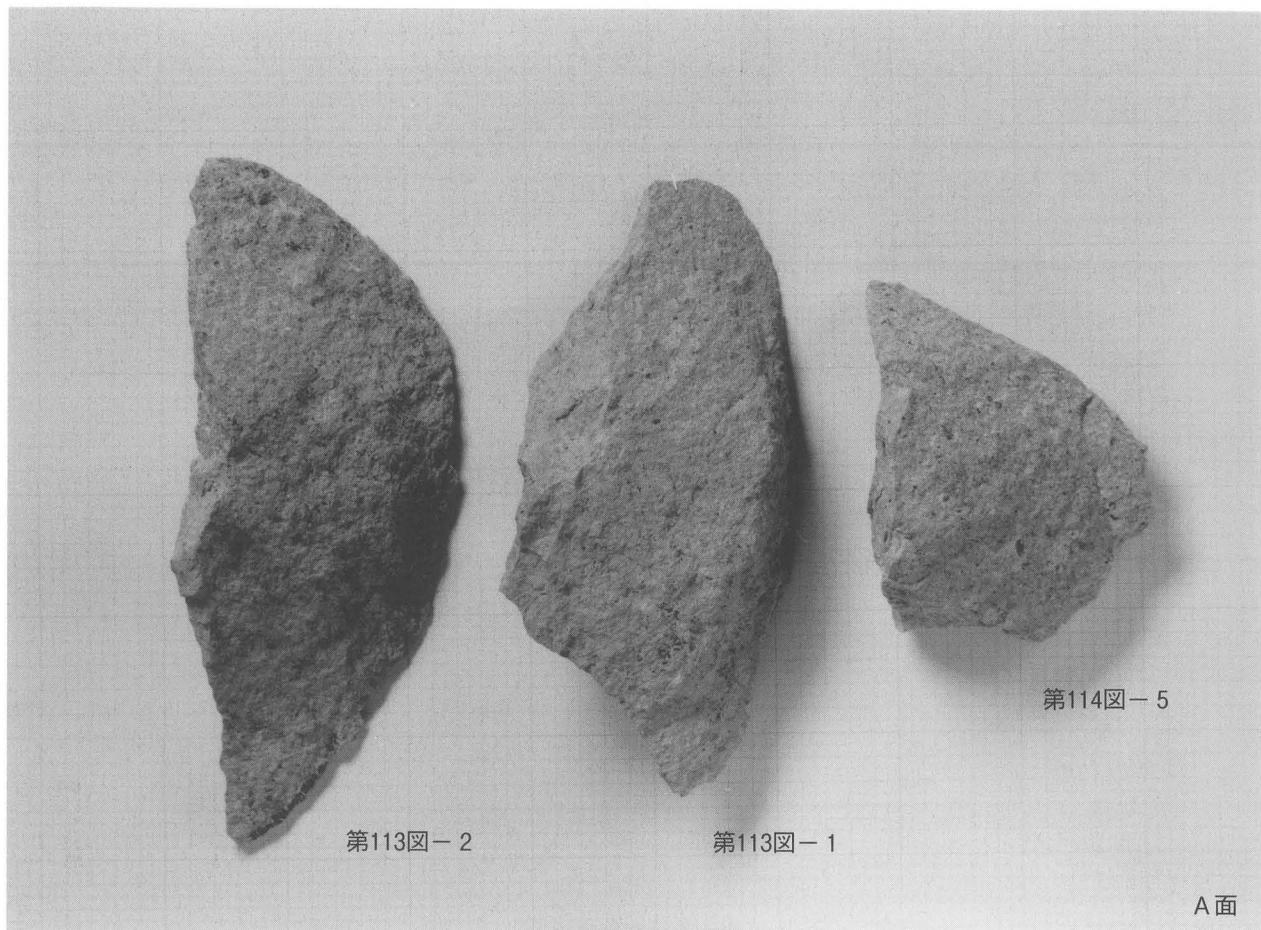
第112図

竜山石 大型剥片（A面）

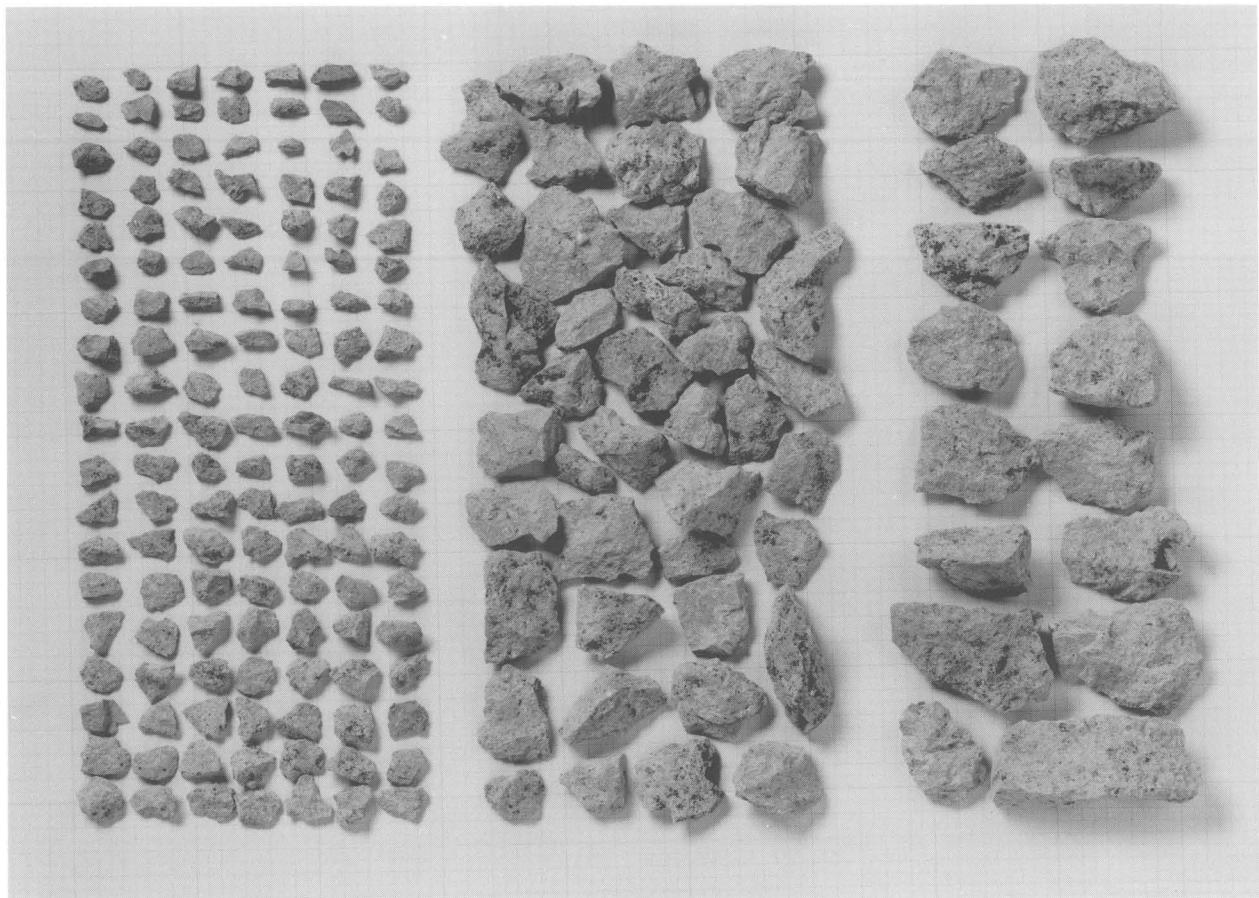


第112図

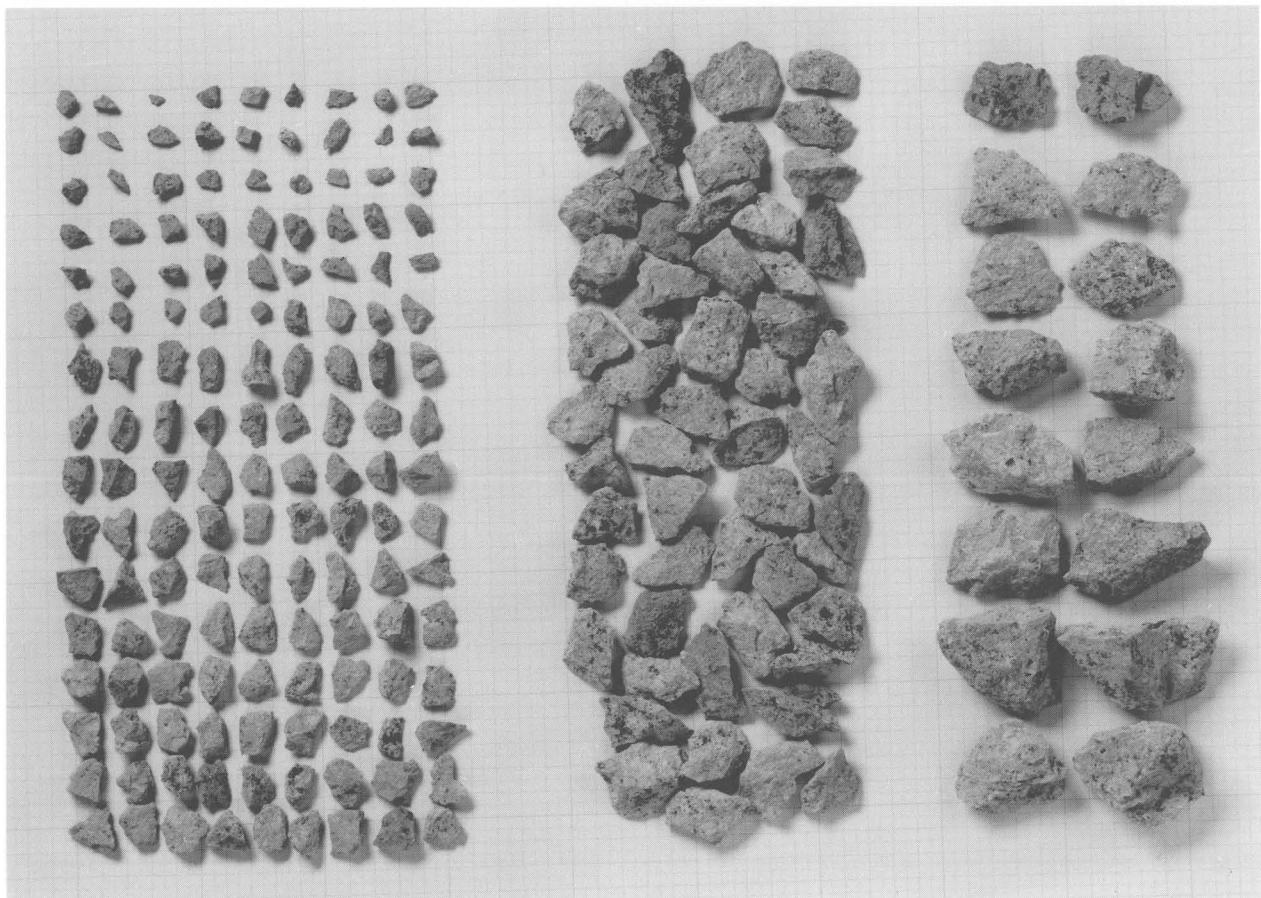
竜山石 大型剝片 (B面)



竜山石 中型剥片



竜山石法量別集合①



竜山石法量別集合②

報告書抄録

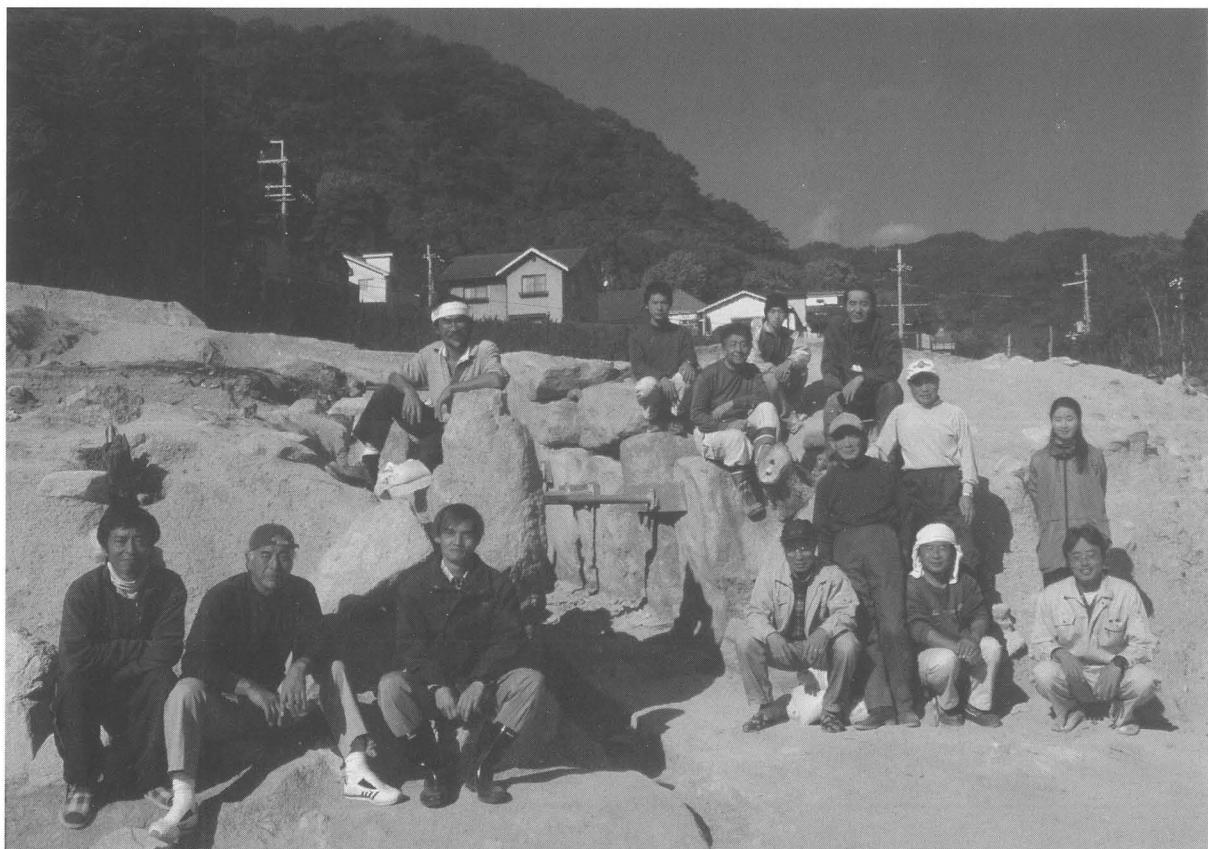
編集後記

脇道から発掘調査の終わった事業地を眺めながら、旭塚古墳が未来の芦屋市民にどのような遺産として受け継がれていくのかに想いを馳せています。

この古墳は、私たちが発掘する以前から、専門の研究者たちが関心を寄せる古墳の一つでしたが、こうして一定の発掘調査が終了すると、その稀少価値は二倍にも三倍にも膨れ上がり、指定文化財クラスの古墳であることをあらためて実感いたします。発掘が地域に新しい歴史像を結ぶとよく言いますが、古代の芦屋地方の歩みに全く新しい課題を投げかけるものでした。播磨・竜山石の特殊な使用法は、近畿地方初めてのケースですし、墳丘裾部から出土した大量の供献土器類は、不運にも400名以上のひとびとが訪れた現地説明会の翌日から姿を現し始めました。発掘現場である広い事業地も、まるで旭塚古墳が特徴的な山容を誇示する城山を借景として独り占めしたような印象を強く持ちました。

報告書は予想以上に難産でした。考えもしなかった土器の出土数、竜山石の膨大な石片調査、石室構造の系譜的理義、色々と詳しく考証すべきことを残しながら、事実報告だけは何とか本書に提示できたのではないかと思います。最近、発掘の成果は、地域の生活や文化に輝きを与える大きな資産だと思います。その活用をあらゆる方法を使ってやらねばなりません。旭塚の被葬者もきっとそれを望んでいることでしょう。

最後になりましたが、この地味な発掘事業と古墳の保全に協力された地権者、設計者、調査に加わって炎天の下、掘り、図を描き、測量を行い、遺物や図面の整理にあたった作業員・補助員・ボランティアの皆様に感謝の気持ちをお伝えしようと思います。



調査参加者と古墳の記念撮影写真

芦屋市文化財調査報告 第77集

旭塚古墳

城山古墳群発掘調査報告書

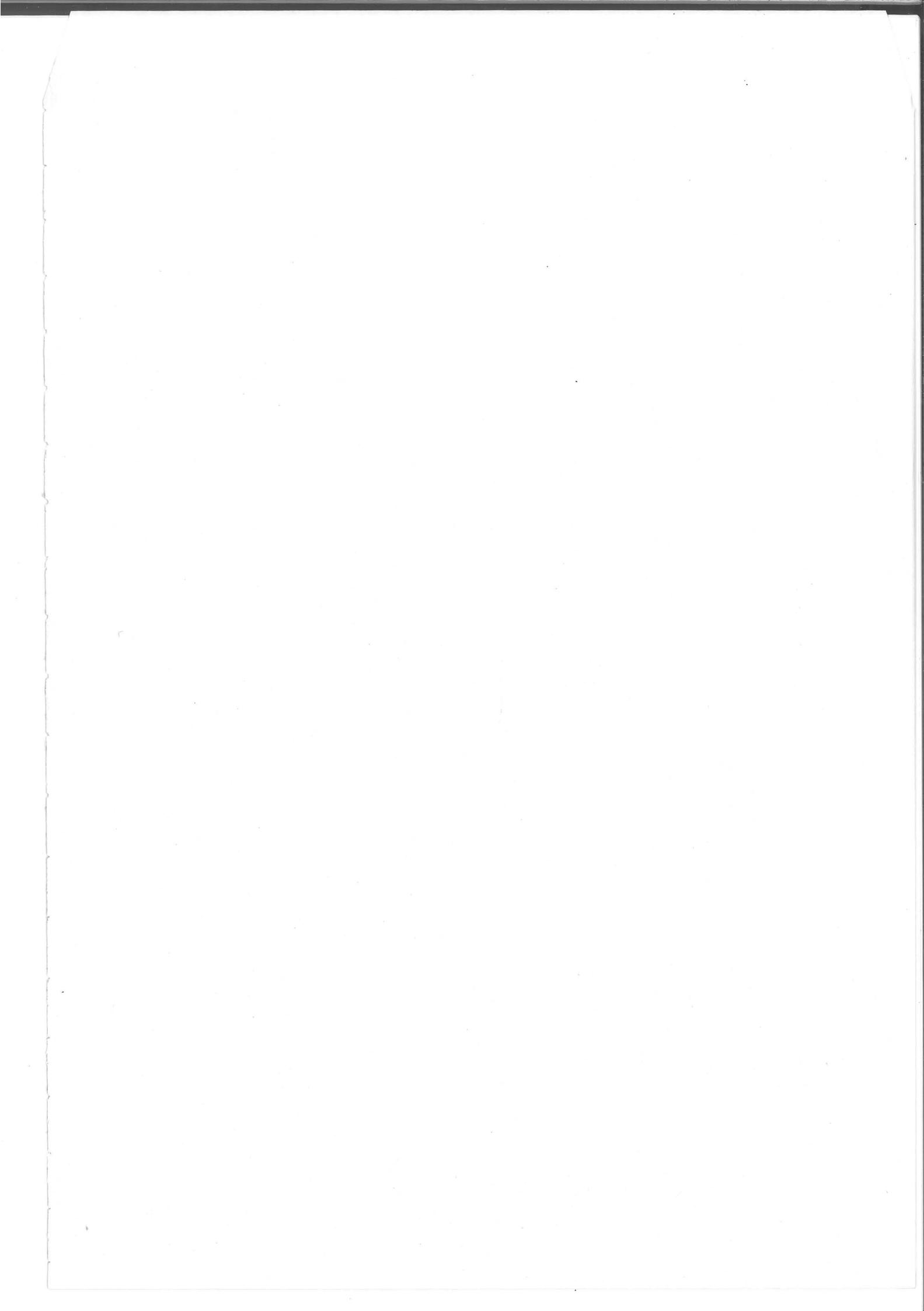
—第1・2次確認調査結果の概要と多角形終末期横穴式石室墳の保存調査—

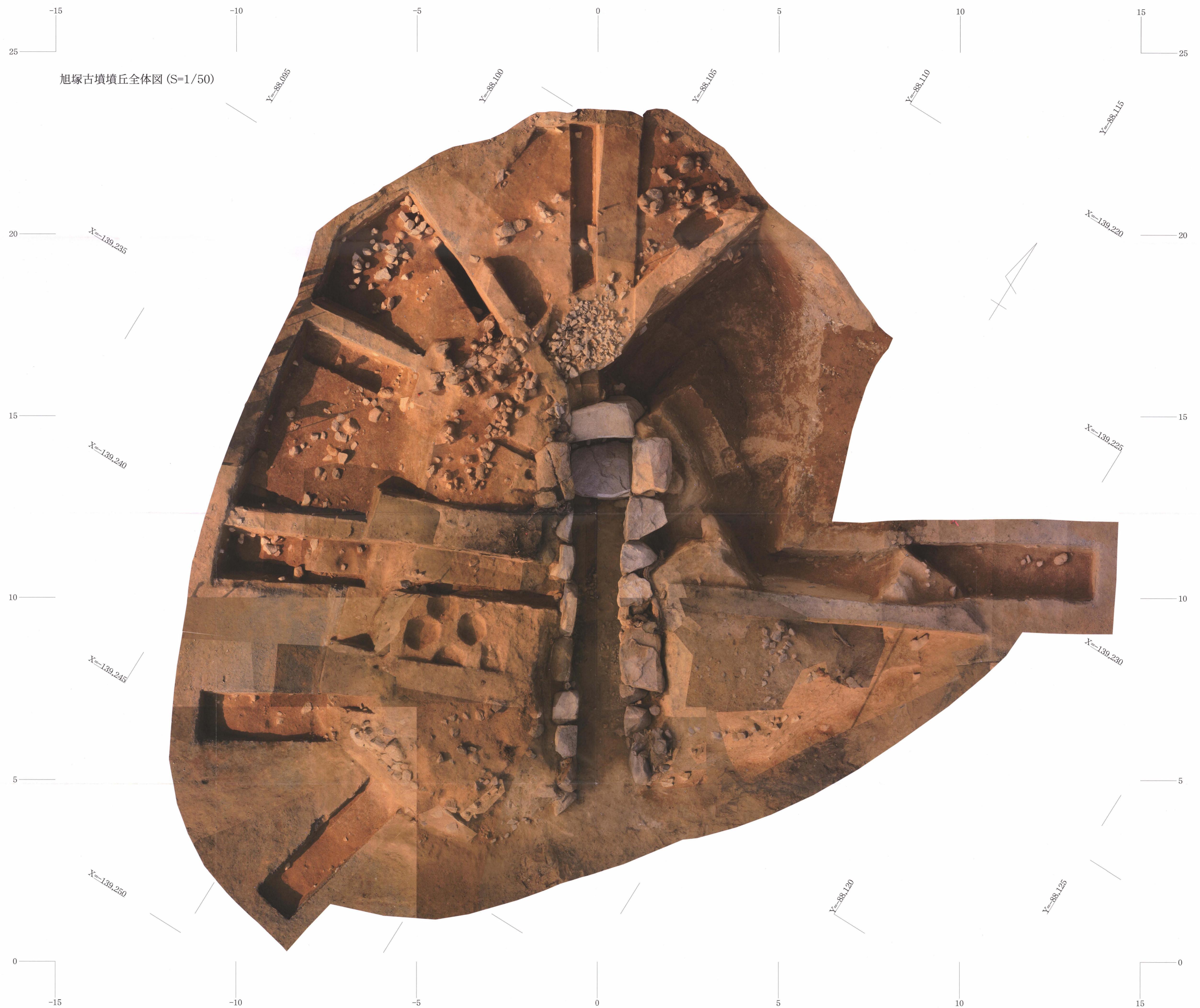
平成21年3月31日 発行

編 集 芦屋市教育委員会社会教育部生涯学習課（文化財担当）
〒659-8501 兵庫県芦屋市精道町7番6号
TEL 0797-31-9066

発 行 芦屋市教育委員会
〒659-8501 兵庫県芦屋市精道町7番6号
TEL 0797-31-9066

印 刷 有限会社 岸本出版印刷
〒652-0806 兵庫県神戸市兵庫区西柳原町3番地29
TEL 078-681-2456 (代)







Ashiya Archaeological Record 77



Ashiya City Board of Education, Japan